

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— X —

小 瀬 戸 遺 跡

建 馬 場 遺 跡

松 木 田 遺 跡

1982. 3

鹿兒島県教育委員会

# 序 文

九州縦貫自動車道（えびの～鹿児島）建設に伴う始良郡始良町小瀬戸、松木田遺跡、始良郡加治木町建馬場遺跡の発掘調査は、昭和46年8月20日から昭和46年12月15日までの間実施し貴重な発見をしました。

その後、昭和56年度に整理を行い、ここに「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X」として発刊することになりました。

県教育委員会では、この報告書が文化財保護のため広く活用されることを願っています。

発刊に当たり、日本道路公団はじめ始良町・加治木町教育委員会及び調査に協力していただいた地元の方々に対し、心から感謝の意を表します。

昭和57年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 井之口 恒 雄



緑釉陶器(針書きした「伴家」)

## 例 言

- 1 この報告書は、九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設に伴う小瀬戸遺跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団からの受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆は次のとおりであるが全体的指導は河口貞徳が担当した。

第I章～第VI章第1節～7節, 総括 戸崎勝洋

第VI章第8節 立神次郎

なお、青磁、白磁、須恵器等については小田富士雄氏（北九州歴史博物館主幹）植物種子は田川日出夫氏（鹿児島大学教授）に鑑定と指導を依頼し、墨書土器の撮影については鹿児島県警察本部鑑識課に依頼した。

- 4 出土遺物については名時代を通して一連番号としたので、挿図番号、図版番号は一致する。

## 目 次

序 文	(3) 鉢…………… 30
例 言	(4) 环…………… 34
第I章 序 説…………… 1	(5) 皿…………… 38
第1節 調査に至る経過…………… 1	(6) 蓋…………… 38
第2節 調査の組織…………… 1	(7) 瓦器質土器…………… 38
第3節 調査の経過…………… 2	5 内黒土器…………… 39
第II章 遺跡の位置及び環境…………… 4	6 墨書土器…………… 42
第III章 調査の概要…………… 7	7 刻書土器…………… 42
第IV章 層 位…………… 10	8 須恵器…………… 45
第V章 遺 構…………… 14	9 青磁・白磁…………… 51
第1節 歴史時代…………… 14	10 緑釉陶器…………… 53
1 建物跡…………… 14	11 その他の陶磁器…………… 53
2 溝状遺構…………… 16	第2節 鉄製品…………… 55
3 井戸跡…………… 17	第3節 木製品…………… 55
第VI章 遺 物…………… 24	第4節 土 錘…………… 57
第1節 土 器…………… 24	第5節 紡錘車…………… 60
1 縄文式土器…………… 24	第6節 瓦…………… 60
2 弥生式土器…………… 24	第7節 土 馬…………… 65
3 その他の土器…………… 24	第8節 石 器…………… 66
4 土師器…………… 29	第VII章 総 括…………… 67
(1) 甕…………… 29	小瀬戸遺跡井戸I内出土種子の同定について…… 70
(2) 埴…………… 29	

## 挿 図 目 次

第1図 小瀬戸遺跡周辺地形図…………… 6	第10図 井戸I・II平面断面実測図…………… 18
第2図 小瀬戸遺跡地形図…………… 8	第11図 井戸I内出土遺物実測図…………… 19
第3図 グリット配置図…………… 9	第12図 井戸I内出土遺物実測図…………… 20
第4図 土層断面図…………… 11	第13図 井戸I内出土遺物実測図…………… 21
第5図 土層断面図…………… 12	第14図 井戸I内出土井戸樁…………… 22
第6図 遺構全図…………… 13	第15図 井戸II内出土遺物実測図…………… 23
第7図 建物跡平面図…………… 14	第16図 縄文式土器拓影…………… 25
第8図 建物跡平面図…………… 16	第17図 縄文式土器拓影・実測図…………… 26
第9図 井戸I内出土遺物実測図…………… 17	第18図 弥生式土器実測図I…………… 27

第19図	弥生式土器Ⅱ・その他土器実測図	28	第35図	青磁・白磁実測図	52
第20図	土師器(甕)実測図	31	第36図	緑釉陶器実測図	53
第21図	土師器(埴)実測図	32	第37図	その他土器実測図	54
第22図	土師器(埴・鉢)実測図	33	第38図	鉄製品実測図	55
第23図	土師器(坏)実測図Ⅰ	36	第39図	木製容器実測図	56
第24図	土師器(坏)実測図Ⅱ	37	第40図	土錘実測図Ⅰ	58
第25図	土師器(坏・皿・蓋)瓦器質土器	38	第41図	土錘実測図Ⅱ	59
第26図	内黒土器実測図Ⅰ	40	第42図	紡錘車実測図	60
第27図	内黒土器実測図Ⅱ	41	第43図	平瓦実測図Ⅰ	61
第28図	墨書土器実測図Ⅰ	43	第44図	平瓦実測図Ⅱ	62
第29図	墨書土器Ⅱ・刻書土器実測図	44	第45図	平瓦実測図Ⅲ	63
第30図	須恵器(埴・瓶・甕)実測図	47	第46図	丸瓦・宮田ヶ丘窯跡採集瓦実測図	64
第31図	須恵器(瓶)実測図	48	第47図	土馬出土状況	65
第32図	須恵器拓影	49	第48図	土馬実測図	65
第33図	須恵器拓影	50	第49図	石器実測図	66
第34図	須恵器(底部)実測図	51			

## 表 目 次

表 1	小瀬戸遺跡及び周辺遺跡	5	表 8	墨書土器出土区一覧表	42
表 2	建物跡Ⅰ計測表	15	表 9	刻書土器出土区一覧表	42
表 3	建物跡Ⅱ計測表	15	表10	須恵器出土区一覧表	46
表 4	甕出土区、層一覧表	29	表11	青磁、白磁出土区、層一覧表	51
表 5	埴・鉢出土区、層一覧表	30	表12	土錘計測表	57
表 6	坏、皿出土区、層一覧表	35	表13	紡錘車計測表	60
表 7	内黒土器出土区・層一覧表	39	表14	瓦出土区一覧表	61

## 図 版 目 次

図版 1	遺跡遠景 遺跡近景	71	図版 9	縄文式土器(前平、点線文、深浦式)・縄文土器(深浦式、晩期)	79
図版 2	遺跡発掘風景・遺構出土状況	72	図版10	弥生式土器	80
図版 3	井戸Ⅱ出土状況・井戸Ⅰ内(井戸枠、木製容器)出土状況	73	図版11	土師器(甕、埴)	81
図版 4	井戸Ⅰ内(木製容器)出土状況、土馬出土状況	74	図版12	土師器(鉢、坏)	82
図版 5	遺物出土状況	75	図版13	土師器(坏、皿、蓋)	83
図版 6	遺構検出状況	76	図版14	内黒土器	84
図版 7	井戸Ⅰ内出土遺物	77	図版15	墨書土器	85
図版 8	井戸Ⅰ(井戸枠)、井戸Ⅱ内出土遺物(下)	78	図版16	墨書土器	86

図版17	刻書土器	87	図版22	土錘	92
図版18	須恵器	88	図版23	紡錘車・平瓦	93
図版19	須恵器	89	図版24	平瓦・丸瓦・宮田ヶ丘窯跡出土瓦	94
図版20	青磁・白磁・その他土器	90	図版25	土馬	95
図版21	その他土器・刀子・釘・木製容器	91	図版26	井土 I 内出土種子	96

# 第1章 序 説

## 第1節 調査に至るまでの経過

九州縦貫自動車道は、昭和43年3月6日第18回国土開発幹線自動車道建設審議会において、九州関係各路線とともに鹿児島県内では、加治木～鹿児島間の整備計画が決定された。ついで昭和43年4月1日建設大臣から加治木～鹿児島間25kmについて、日本道路公団に対して、工事施行命令が出された。

日本道路公団では「日本道路公団の建設事業等、工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、埋蔵文化財の取扱いについて協議を求めた。これに対し鹿児島県教育委員会では昭和43年12月17日～昭和44年1月20日の間、県内の考古学研究者を調査員に依頼して分布調査を実施し、26個所の周知の遺跡について範囲確認を行った。

路線はこの報告をもとに決定されたが、路線内の未確認の遺跡については、再度昭和46年1月分布調査を実施し、その結果・小瀬戸遺跡等7ヶ所の遺跡が発見された。

県教育委員会は、この結果をもとに日本道路公団とそれらの遺跡の取扱いについて協議する発掘調査について鹿児島県考古学会（会長河口貞徳氏）、鹿児島県史蹟調査会（会長河口貞徳氏）等に協力を依頼した。

昭和46年8月10日日本道路公団と県教育委員会は委託契約を結び、小瀬戸遺跡を昭和46年8月20日から発掘調査することとなった。しかし、調査体制が充分でなかったため、発掘用具の確保、発掘方法、発掘期間、調査員の確保等に問題点を内包してのスタートとなった。

その後、文化財行政の組織の拡充、遺跡の全面発掘が確立されるに及んで調査は軌道にのることとなった。

## 第2章 調査の組織

調査主体者		鹿児島県教育委員会
調査責任者	社会教育課長	寺 師 次 夫
調査主任	県文化財専門員	河 口 貞 徳
調査員兼総務	社会教育課文化係長	盛 園 尚 孝
調査員	県立指宿高校教諭	河 野 治 雄
	私立鹿児島実業高校教諭	林 敬 二 郎
	鹿児島市立南小教諭	出 口 浩
	私立鹿児島高校教諭	酒 勾 義 明
	有明町立野方小教諭	大 野 重 昭



調査員 内之浦町立内之浦中学校教諭 戸崎勝洋  
立神次郎  
尾上道雄  
有元彰順

調査補助員 中間研志（鹿児島大生）、弥栄久志、青崎和憲（別府大生）、本田道輝（鹿児島大生）、石神幸郎、徳留孝次郎（鹿児島大生）、中村耕治（明治大生）楠原郁子（鹿児島大生）、福岡啓造、上赤富士夫（鹿児島大生）中島哲郎（鹿児島高卒生）

### 第3節 調査の経過

発掘調査は昭和46年8月20日から昭和46年11月2日まで行った。

当初部分発掘調査を予定していた遺跡も発掘が進むにつれてピット群、溝状遺構、土師器等が検出されるにいたり、遺跡の全面発掘が記録保存のために必要欠くべからざるものとなり、調査団、県教育委員会、日本道路公団は再々にわたり協議を重ねた。

その結果、埋蔵文化財についての認識を再確認し、契約変更により遺跡の全面発掘を行うことで意見の一致をみたので、発掘調査を続行することとなった。

したがって当初予定した面積 860㎡は、3050㎡に拡大された。

調査の経過は以下略述するとおりである。

#### 日記抄

- 昭和46年8月20日（金）～8月22日（日）  
調査団、補助員、作業員現地集合。発掘方法、班編成ののち草刈り。縦貫自動車道中心杭（S T A54+20）を中心に10m×10mグリッド設定、1グリッド2.5m×2.5mに細区分。表層掘り下げ。土師器片、溝状遺構を一部検出。
- 昭和46年8月23日（日）～8月29日（日）  
日本道路公団福岡支社来訪、溝状遺構、ピット群検出のためグリッド掘にきりかえ。  
3層上面に遺構検出される。ピット中に瓦、土師器が出土するものもある。A-II区より深浦式土器出土・B-III区に針書きによる緑釉陶器「伴家」出土。墨書・刻書土器相ついで出土。ベルト除去。県立川内高校生参加。
- 昭和46年8月30日（月）～9月5日（日）  
B-III、IV区掘り下げ。調査員のうち、5名が新学期のため帰省したので班を再編成

B-IV、D-IV、C-III区掘り下げ。遺構、遺物実測。写真撮影用ヤグラ組み。

- 昭和46年9月7日(火)～9月12日(日)

遺構、遺物実測。壁面の土層断面図作成。遺物は2層上面に集中して出土。橋口達也氏(九州大学)等来訪し遺跡の平面測量。A-III区完全に掘り下げ。

- 昭和46年9月13日(月)～9月19日(日)

B、C-V、C-II区掘り下げ。土馬ピット中より出土(A'-III、a'-11)。A'-V区に地形観察のためトレンチ設定、掘り下げ。

- 昭和46年9月20日(月)～9月26日(日)

井戸(E-III、IV区)掘り下げ。埋土中より瓦、土師器等出土。A'-IV区及び壁面とりはずしを行う。

井戸発掘中は湧水が多く困難をきわめたが、井戸発掘というめずらしい作業に、喜々として取組んだ。

- 昭和46年9月27日(月)～10月3日(日)

C-V、A'-II区掘り下げ。断面実測。井戸(C、D-IV区)掘り下げ、地表下2.5m～3mのところの木片発見。しかし、湧水の水圧強く素掘りでは危険となったため矢板を組むこととする。G-IV区拡大。

- 昭和46年10月4日(月)～10月10日(日)

井戸(C、D-IV区)掘り下げ。矢板を四方に組み、ポンプアップしながら掘り下げ。井戸中に大木を半截しくり抜いた井戸枠2圈、木製容器、種子(ヒヨウタン、モモ)を検出する。D、E、F-V区にやり方を組む。

- 昭和46年10月11日(月)～10月17日(日)

取上げた井戸枠、木製容器の実測・A～C-V区やり方組みののち平面実測。A'-I区掘り下げ。B'-I区設定。D-II、III区平面実測。A、B-V区平面及びピット断面実測。F-III区掘り下げ。A～C-I区遣り方組み。

- 昭和46年10月18日(月)～10月24日(日)

A'-I、B'-I、II、A、B、C-I、D-II、III、E-II、III区平面実測。G-III、IV区掘り下げ。F、G-III、IV区遣り方組み。壁面実測。終日実測。

- 昭和46年10月25日(月)～10月31日(日)

壁面実測。G-III、IV区拡張、縄文土器片等出土。地形平板測量、盛土排除のためにシヨベルカー導入(始良町より借用)。遺跡全景写真撮影のために、ピット、溝の涇に石灰をまき他の面の清掃。写真、残存遺物とりあげ完了。井戸枠を鶴丸城の濠に搬送。

- 昭和46年11月1日(月)～11月2日(火)

後始末。次の発掘地の吉田町へ送る用具の収納、点検、小瀬戸遺跡はすべて完了。

## 第2章 遺跡の位置及び環境

小瀬戸遺跡は、鹿児島県始良郡始良町小瀬戸に所在する。

遺跡地の所在する始良町は、鹿児島県のほぼ中央部の薩摩半島の基部、鹿児島湾奥に位置する。地形を概観すれば、町の东北部には始良カルデラによって形成され、輝石安山岩、角閃安山岩、溶結凝灰岩などを基盤とする烏帽子岳、その南東部には長尾山があり、溝辺、加治木町境となる。西部に天ヶ鼻等の山が連なり、その末端は火口壁となり鹿児島湾に続く。また南部は鹿児島湾をへだてて現在も活動を続ける桜島を望む。

平野部はこれら三方の山々に抱かれたかたちで鹿児島湾沿いの南部に発達した沖積平野である。この平野は始良郡溝辺町に源をもつ山田川と、薩摩郡祁答院町及び始良郡蒲生町を経て流れる蒲生川が合流した別府川が北部に、南部には鹿児島郡吉田町に源をもつ思川によって形成されたもので、海岸線より約2kmの狭い沖積平野である。

始良町はこの2つの河川に狭まれた海岸部から北部山岳地帯にかけて南北に細長い田園の町である。しかし近年は鹿児島市のベッドタウンとして、大型団地、個人住宅の建設が進み、人口は増加の一途をたどっている。

小瀬戸遺跡は沖積平野の基部、城山（建昌城）の裾に位置する。

このあたりは標高約11mの微高地で、遺跡は北方から延びた微高地の末端近くにある。従って、東、西、北は比高差約1～2mをもって水田に接するが、東側は小さな谷状の凹みを隔てて再び標高約11～12mの微高地となる。小字名「小瀬戸」は東側の小さな瀬戸状の地形に由来したものと思える。

次いで、小瀬戸遺跡の周辺の遺跡について概観したい。

本遺跡の南約500mに位置する南宮島遺跡は昭和51年発掘調査が実施され、縄文時代前期末～後期中葉におよぶ土器や石器や、円形、楕円形、長楕円形の土壇が100基（推定）も検出されたほか、溝状遺構、加工木材が出土した。萩原遺跡は昭和51年から昭和52年にかけて3回にわたり調査が実施され住居址多数や土器類が出土し古墳時代の集落址の解明に寄与した。

この他、昭和28年7月河口貞徳氏によって調査された鍋谷遺跡は、塞ノ神式土器が出土し、以後塞ノ神式土器の標本として多くの専門誌に紹介されている。

そのほか町の南部の保養院を含めた一帯は弥生時代から古墳時代にかけての一大集落が予想されるほど多量の遺物が散布する。

また、本遺跡周辺も西ノ妻遺跡等の周知の遺跡が所在する。本町の遺跡は、別府川や思川添いの微高地に立地するものが多く知られている。

これ等先史時代の遺跡のほか、歴史時代の遺跡も多い。

小瀬戸遺跡の東側約500mの山地は室町・戦国時代の山城「建昌城」である。本城は享徳3年（1454年）島津季久と子忠康が築城されたと伝え、下って寛永10年（1633年）には、島津藩本城の候補ともなった。

北方約1kmの位置には本報告書にも掲載した宮田ヶ丘窯跡が保存状況も良く残されている。

また慶長年間に始った薩摩焼は頭初、宇都窯で始まった。その後薩摩焼は藩主の鹿児島移城に伴い窯も鹿児島へ移窯したが、元位院窯、八日町窯等その背景は受け継がれた。

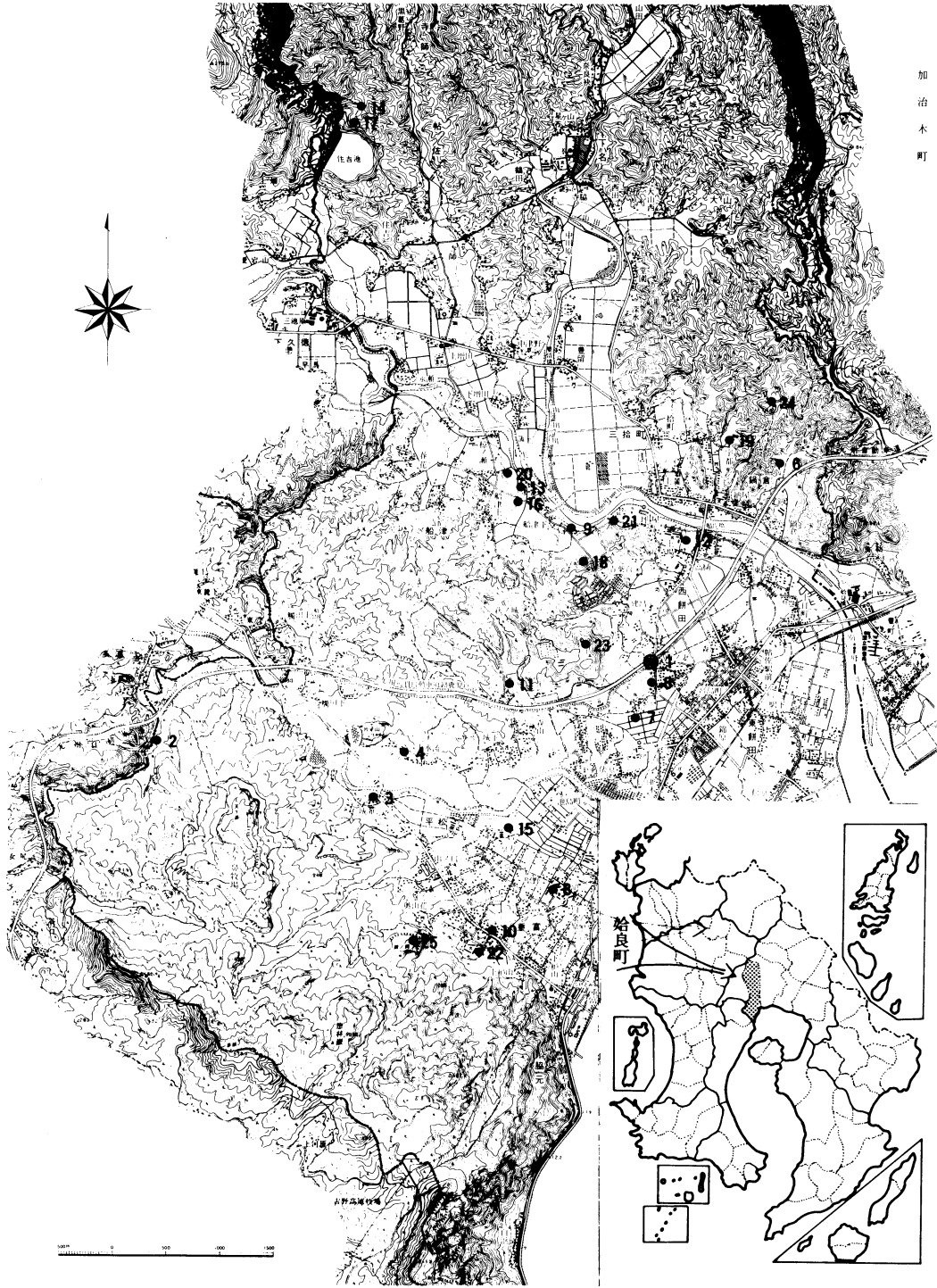
なお本遺跡を含む帖佐地方は「むしろ」、「かます」作りを業とする者が多く、帖佐の名も、これの収納を司どる役所の帖佐職に由来するともいう。

いずれにしても先史時代から歴史時代に至るまで多くの遺跡が残る始良町である。

番号	遺跡名	所在地	時代	文献
1	小瀬戸	始良町西餅田小瀬戸	歴史	本報告
2	鍋谷	始良町重富鍋谷	縄文	「市町村別遺跡地名表」鹿児島県 1977
3	稲荷	平松原方橋 平松荷	〃	〃
4	古屋敷	平松上水流敷 古屋	〃	〃
5	西ノ妻	西餅田西ノ妻	歴史 縄文	〃
6	鍋倉洞窟	帖佐鍋倉	縄文	〃
7	南宮島	西餅田南宮島 字上田山野	縄文 歴史	南宮島遺跡(始良町教育委員会)1976年3月
8	保養院	堅野県立 鹿児島保養院	弥生	1に同じ
9	船津	帖佐船津	〃	〃
10	立野	平松立野	〃	〃
11	森山	重富森山	〃	〃
12	上場	西餅田 上場羽追	〃	〃
13	馬場追	船津馬場追	〃	〃
14	住吉	住吉竹下	〃	〃
15	萩原	平松 4590	古墳	萩原遺跡(始良町教育委員会) 1978年3月 (〃) 1980年3月
16	馬場追	船津馬場追	弥生	1に同じ
17	住吉神社	住吉竹下	歴史	〃
18	宮田岡	船津富田岡	〃	〃
19	古帖佐焼窯址	帖佐鍋倉宇都	近世	小山富士雄他「薩摩焼の研究」
20	小野元立陀窯址	船津北辰原	〃	〃
21	古帖佐	帖佐坪屋	〃	〃
22	平松城址	平松星原	中世	「始良町郷土誌」1968
23	建昌城址	西餅田建昌	〃	〃
24	平安城址	帖佐鍋倉宇都	〃	〃
25	岩劔城址	平松奥山花	〃	〃

表1 小瀬戸遺跡及び周辺遺跡

加  
治  
木  
町



第1図 小瀬戸遺跡周辺地形図

### 第3章 調査の概要

小瀬戸遺跡は別府川と思川によって形成された沖積平野の基部、標高約10.6mの微高地で、遺跡の東側は用水路を距てて約1mの比高差をもって人家に続き、南、西、北側は遺跡とほぼ同じ高さで水田地帯となっている。遺跡の所在する土地は畑地で、遺跡面積約3000㎡である。

九州縦貫自動車道の中心杭に従えばS T A 54+20を中心とし、左右にそれぞれ30mの範囲である。

調査はまず荒地となった畑の除草から始めた。調査実施にあたって、10m四方を単位とするグリッドを設定することとし、縦貫道路の中心杭S T A 54+20を中心に東側に30m、西側に40m南側に22m、北側に27mの範囲に区画した。そしてS T A 54+20より東へ20m、北へ30mの線を基準線とし、北隅より西へA～G、東へA'、B'、南へI～VとしA～I、A～II区と呼称することとした。またこの大グリッドを2.5m×2.5mの小グリッドに分割し、さきの基準点よりa～Z、1～20等の記号を用いA-I、a-1区と呼称し区画名を表わすこととした。

発掘調査は調査員を6班に編成し、A-I、C-I、E-II、E-V、C-V、A-IV区に分散、小グリッドから掘り下げを開始した。

遺物はI層に近世陶磁と混じって土師器、須恵器が出土しはじめ、II層になると、土師器、須恵器、青磁、瓦などが多量に出土した。さらにIII層上面に調査が進むと、各区ともピット、溝状遺構の検出が相ついだ。そこで発掘区をこれまでの小グリッドから大グリッドに切り換え遺跡の全体把握に努めることとした。

またG-III区に縄文式土器が出土したため、あらたに70㎡を拡張することとした。

この間、新学期の始まりとともに調査員が職場に復帰したため班を再編成。遺跡の拡大と、工期の関係で、発掘の中断が予想されたが、文化財保護行政の強化等の対策を講じることで、対処することが見込まれたために、発掘調査は続行された。

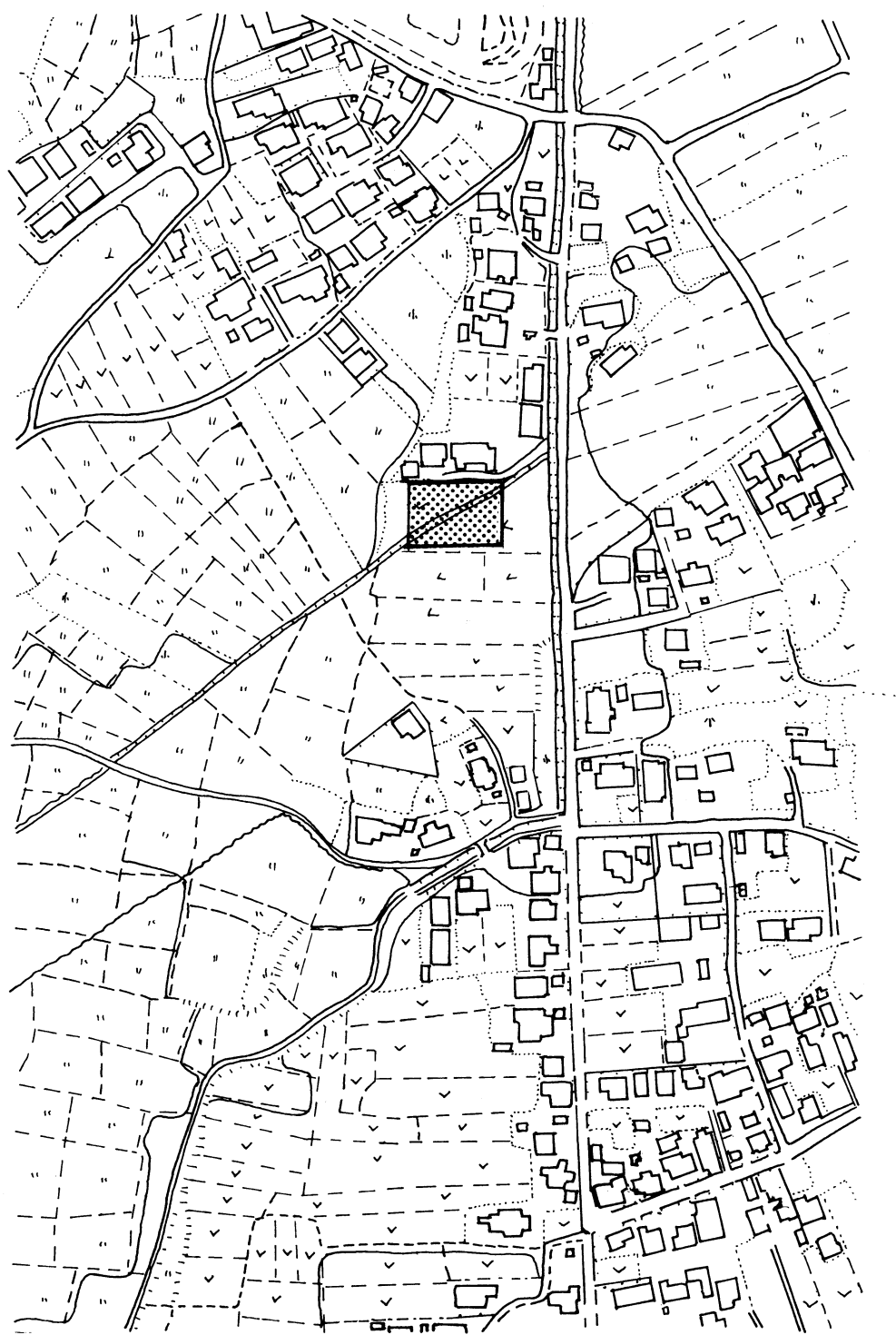
発掘調査は、本県でははじめての規模の大きいもので、しかも、県内の先生方も多数加勢に来られての調査であった。

調査の結果、遺跡は奈良時代～平安時代にかけての生活址が主体で、F、G区の一部には縄文時代の遺物も散見された。

縄文時代の遺構は確認できなかったが、遺物は前平式土器、(縄文早期)、深浦式土器(前期該当)、夜臼式土器(晩期刻当)等の土器と石鏃が出土した。

弥生時代の遺物は須玖式土器(中期該当)、磨製石鏃1点が出土した。遺構は確認されるに至らなかった。

本遺跡の主体をなすものは歴史時代で、遺構はF、G-II区の一部を除き全面に検出された遺構のうちピット群はIII層を切りこみ、径40cm～20cmのものが主体で、ピット中には土師器、瓦、礫等を包蔵するものもあった。ピットより復元できる建物はE、F-IV、V区の2棟にすぎなかったが、多数のピットから推察すると相当数の建物と、数次にわたる建替えがあったも



第2図 小瀬戸遺跡地形図



第3図 グリッド配置図



のと推定される。

溝状遺構は15条検出された。このうち東西に走るもの3条、南北に走るもの12条となり、圧倒的に南北に走る溝が多い。しかしこれ等の溝状遺構で区画されたと理解されるものはなく、生活址の復元は困難であった。

また溝状遺構の新旧がわかるものは溝状遺構1と2、3、7と5、6である。

遺構は幅20cm～40cm、深さ10cm～50cmを測る。溝内からは土師器、瓦、礫等の破片が出土した。

これ等の遺構のほか、C、D-Ⅳ、(1、m-15、16)区及び、E-Ⅲ、Ⅳ、(t-12、13)区に井戸跡が検出され、このうちの1基には木製の井戸枠、木製容器、土師器、刻書土器、瓦、礫等のほか、ヒヨウタン、モモ等の種子が出土した。

遺物はⅡ層の黒色土層を中心に遺跡全体にまんべんなく出土したほか、井戸、溝、ピット内にも出土した。

これ等の遺物は土師器(甕、埴、鉢、坏、皿、蓋)、瓦器質土器、内黒土器、墨書土器、刻書土器、須恵器、青磁、白磁、緑釉陶器等である。これら遺物のうち、「仲家」「大伴」「原」「雄」等の墨書、刻書土器が目撃されたほか、B-Ⅲ(1-12)区出土の緑釉陶器には「伴家」と針書するものが出土し、衆目の的となった。

井戸より出土した種子は当時の食生活の一端をうかがわせ、使用した木は植生の再現に役立つなど多くの成果を復た。

## 第4章 層位

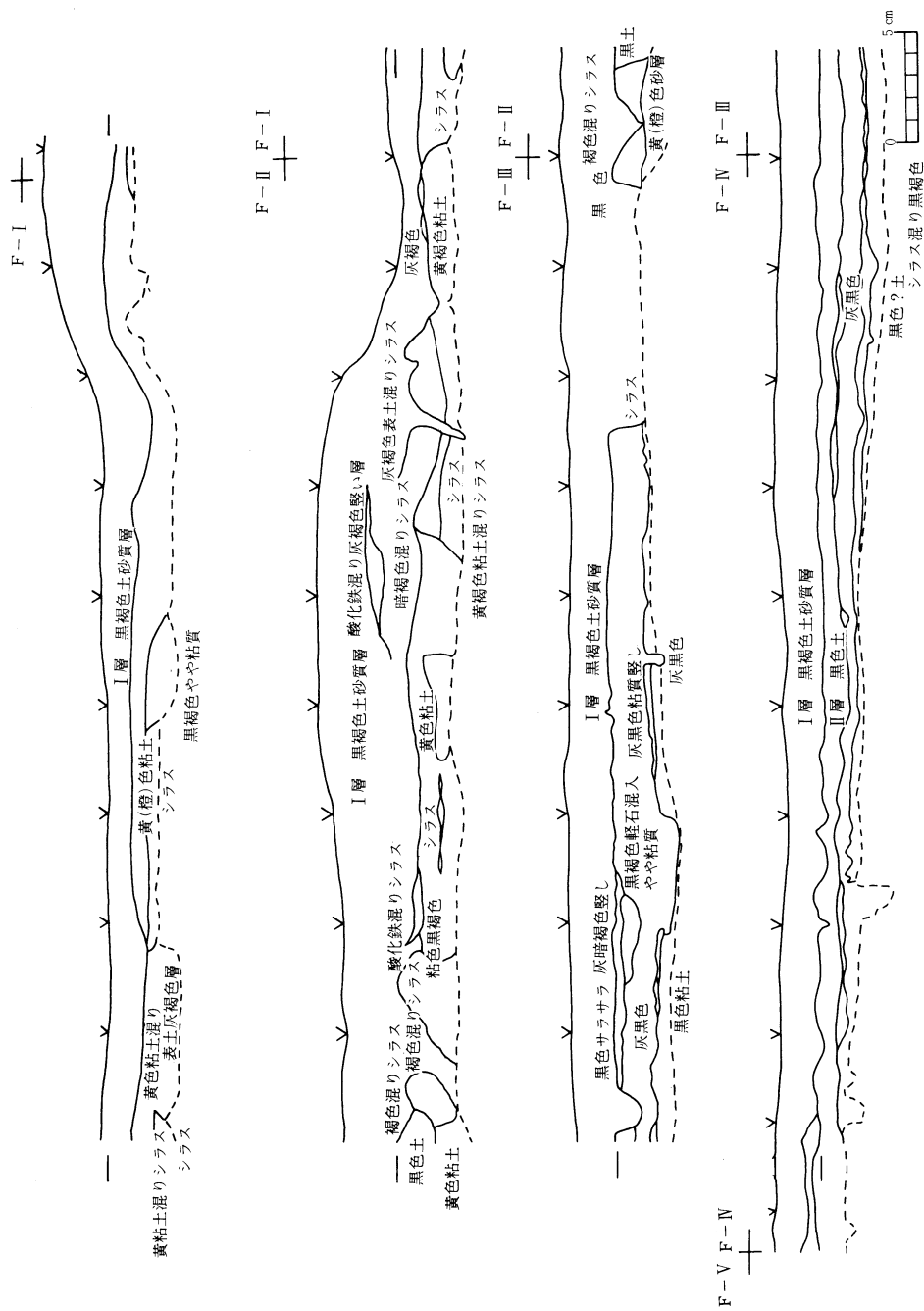
本遺跡は最高点で標高10.9m、最低点で10.1mを測り、その比高差は0.8mとなる南へ延びる平坦な小台地先端部の畑地、西側は0.5～0.7mの差をもって水田、東側は1mの比高差をもって再び小台地へ連なるため、遺跡の表層面はわずかな傾斜をもつものの平坦である。

I層は灰褐色を呈し、やや砂質ぎみである。遺跡の北側B～D-I区の土層観察によれば、土層の厚さは20～40cm内外となりほぼ水平に堆積する。F-I～V区においても、後世の土盛りを除きほぼ水平に堆積する。

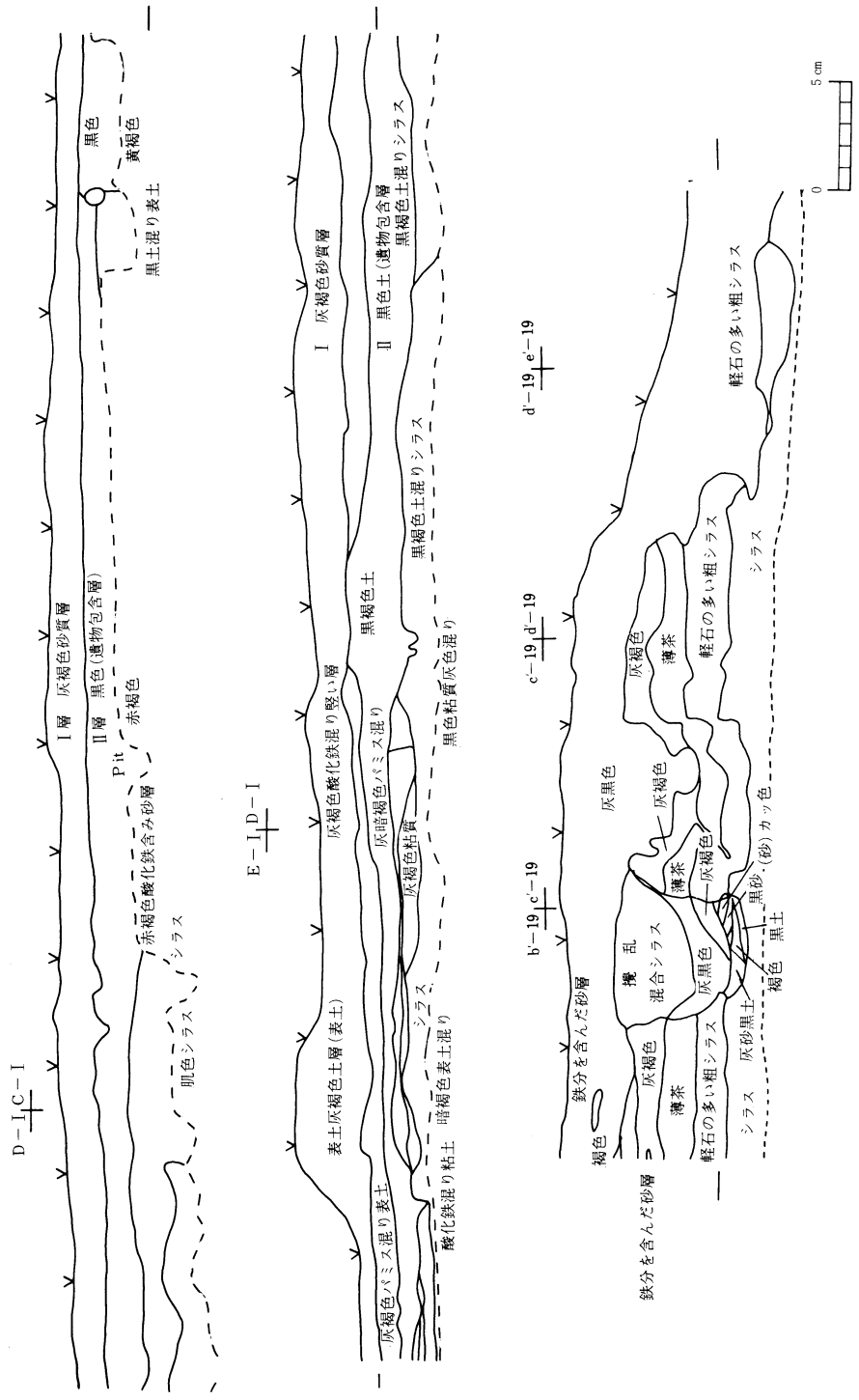
この層より土師器、須恵器、瓦等が出土するが、近世陶器等も出土する。

Ⅱ層は黒色を呈し、やや砂質ぎみである。I層と同様にほぼ水平に堆積し、層の厚さは20～40cmを測る。安定した遺物包含層である。遺構はこの層より掘り込まれたものと思えるが、黒色のためその上面での把握は難しく、下位のⅢ層上面での検出とならざるを得なかった。Ⅲ層は、砂質のシラス土層を基調とするが、安定した所は少なく、パミス混り、黄褐色土混り、あるいは黒褐色土混りとなる。F-I～Ⅳ区ではシラス、B～D-I区ではシラス混りの黄褐色土層となる。

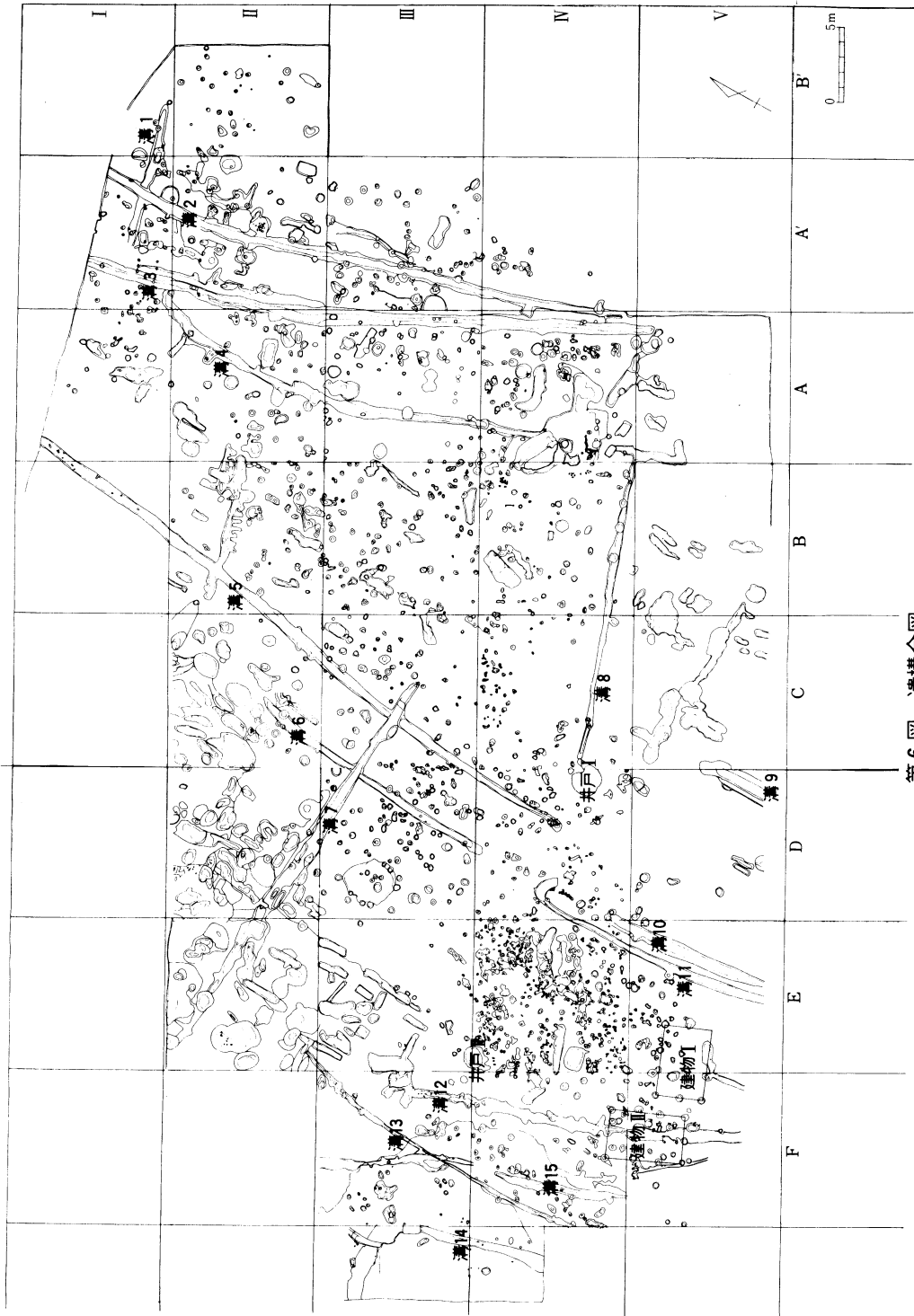
また土層確認のためb'、C'、d'-19区にトレンチを入れた結果、台地端はシラスを基調に斜面に向かい混在した土層が確認され、自然の崩壊を思わせた。



第4図 土層断面図



第5図 土層断面図



第6図 遺構全図

## 第5章 遺 構

### 第1節 歴史時代

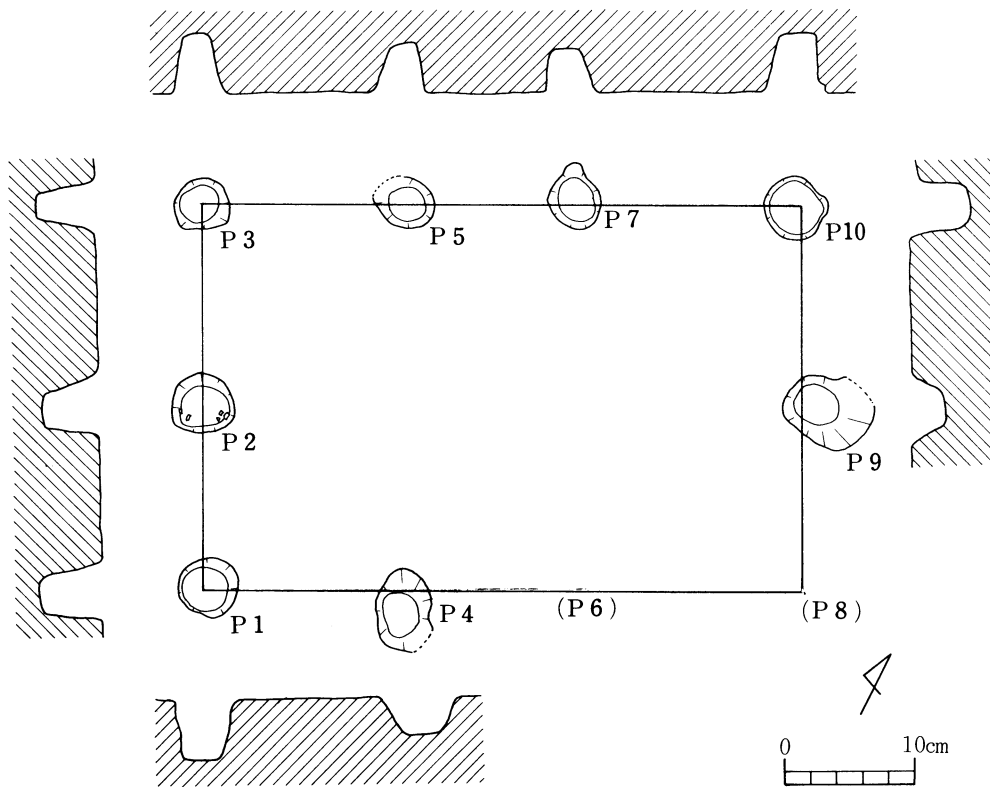
#### 1 建物跡

##### (1) 建物跡I (第7図・表2)

建物跡はE、F-V (S~u-17~19) 区に検出され、梁間2間(3m)×桁行間3間(4.65m)の長方形を呈している。建物の桁行はN70°E方向である。柱穴の掘方は、円形プラン6個、楕円形プラン2個である。ピット6、8は調査中検出できなかった。柱穴径は45cm~60cm、深さ27cm~48cmを測る。ピット2には小礫の根石5個が検出された。

##### (2) 建物跡II (第8図・表3)

建物跡IIはF-IV、V (u~w-16~18区、建物跡Iの西側に隣接する。梁間2間(3.15m)×桁行間(4.7m)の長方形を呈する。建物の桁行はN24°W方向である。柱穴の掘方は円形プランで、径は40cm~55cm、深さは19cm~64cmを測る。この建物の深さは20cm内外が多いが、ピット7は64cmの深さである。



第7図 建物跡I平面図

(単位cm)

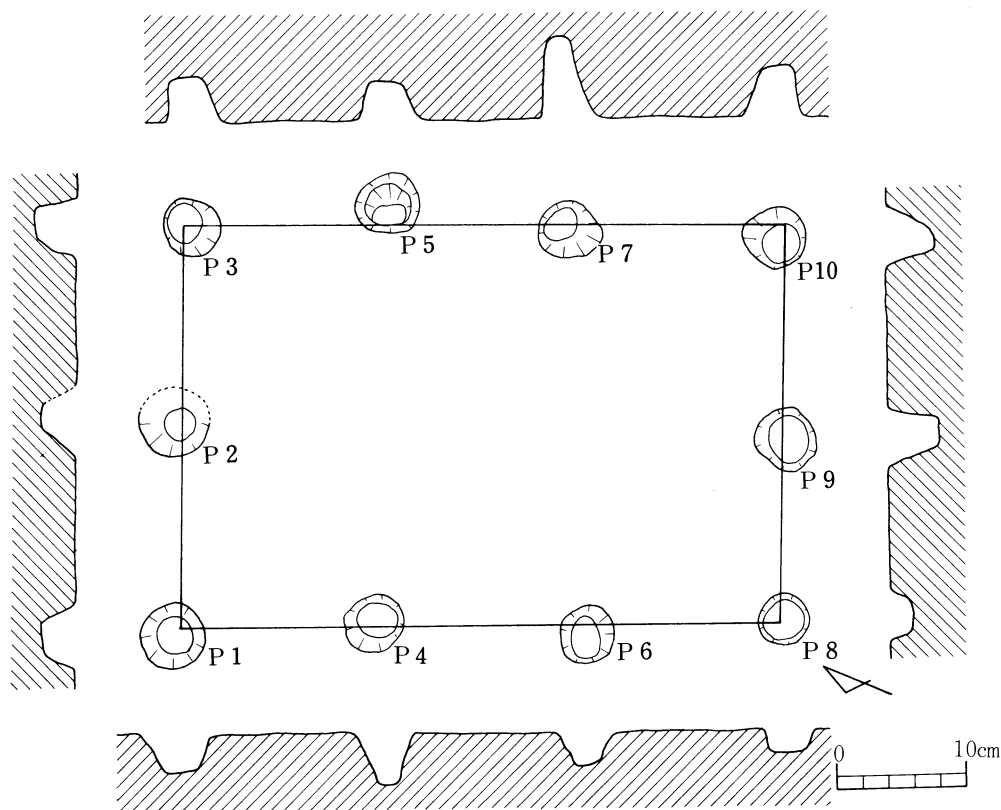
2間×3間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P 1 ~ 2	145	300	P 1 ~ 4	150		1	48	50	45	円形
						2	44	50	48	〃
2 ~ 3	155		4 ~ (6)			3	47	45	40	〃
						4	38	64	42	〃
4 ~ 5		320	(6)~(8)			5	39	47	40	長楕円形
						(6)				
6 ~ 7			2 ~ 9		470	7	35	50	42	円形
						(8)				
8 ~ 9	160		3 ~ 5	160	465	9	27	66	48	楕円形
						10	47	50	49	円形
9 ~ 10			5 ~ 7	130						
			7 ~ 10	175						
平均	153.3	310		153.7	467.5		40.6	52.8	44.3	

表2 建物跡I計測表

(単位cm)

2間×3間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	掘り方
P 1 ~ 2	160	315	P 1 ~ 4	150		1	30	52	50	円形
						2	28	55	53	〃
2 ~ 3	155		4 ~ 6	160	470	3	33	45	42	〃
						4	40	46	44	〃
4 ~ 5		315	6 ~ 8	160		5	29	50	46	〃
						6	25	47	42	〃
6 ~ 7		310	2 ~ 9		465	7	64	49	45	〃
						8	19	40	39	〃
8 ~ 9	140	300	3 ~ 5	160	470	9	40	50	48	〃
						10	26	45	45	〃
9 ~ 10	160		5 ~ 7	140						
			7 ~ 10	170						
平均	153.8	310		156.7	468		33.4	47.9	45.4	

表3 建物跡II計測表



第8図 建物跡Ⅱ平面図

## 2 溝状遺構 (第6図・図版2)

溝状遺構は発掘区全域に15条検出されたほか、発掘区際に溝の先端とおぼしきもので路線外に延びるとされるものが数箇所確認された。

15条の溝は多少ずれるもののほぼ東西、南北に走り幅20cm~40cm、深さ10cm~50cmを測り、断面はU字形を呈する。

遺構内には、土師器、須恵器、瓦片のほか礫が出土した。これらの遺物は本遺跡出土の他の遺物と時期を同じくするものである。また溝状遺構の縦断面レベルの計測や観察によると、発掘中央区より路線外へ傾斜している。このことは発掘区が台地の中央部で、東部を除き段差をもって傾斜する。即ち路線内発掘区は本遺跡のほぼ中央部分であったことを立証したことになる。各溝間の新旧、時代差等によるグルーピングはできなかったが、数箇所、数条については溝間の切合いによって確認された。溝1と2、3、7と5、6等がこれである。溝1は、2、3により切られ、溝7は、5、6によって同様に切られる。しかしこれら溝の相互関係については判明しなかった。また他の遺構との関連については、溝8の先端は井戸Ⅰに接することから井戸Ⅰの排水に利用されたものである。この溝は東走りA-Ⅳ(d-16)区でほぼ直角に曲がり溝4となり北走する。溝にも井戸Ⅱとの関係が相起される。しかし他の溝について、ピット、建物跡との関連は明確にはできなかったし、溝によって区画されたとされる地域の設定等についても不明な点が多かった。

### 3 井戸跡

#### (1) 井戸Ⅰ (第9～14図)

井戸ⅠはD、C-Ⅳ、1、m-15、16区。遺跡のほぼ中央部、南寄りに、Ⅲ層上面に検出された。周辺にはピットも検出されたが上屋等を確定するには至らなかった。井戸の北東より東方に走る溝は井戸の排水に利用されたものと思われる。

井戸は上面で径 1.8mの略円形、下面で径 1.2mを測る。井戸枠は中心よりやや南に配置し、それぞれの井戸枠は20cmの間隔がある。井戸枠上端は井戸上面より 2.1m測り、湧水点はほぼこの位置であった。井戸枠の埋設部分は埋土及び湧水のために不明である。

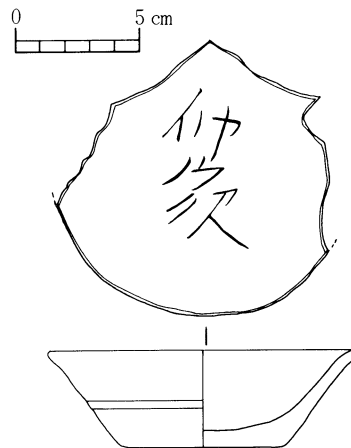
井戸内出土遺物のうち木製容器は井戸枠の中央部、井戸上面より - 2.5mの位置に横位に出土した。

出土遺物のうち刻書土器 (第9図、第29図-1) は井戸内埋土中に出土した。見込内にヘラ書きで「仲家」と刻書する。瓦は2、17の2点出土した。2は長さ37.5cm、最大幅27.5cm、最小幅23.9cmを測る平瓦の完形品である。文様は表面が布目、裏面が太目縄目叩文で縁は面どりしている。詳しくは瓦の項で記述する。17はやや小ぶりの瓦で焼成時の変形がみられる。

須恵器は瓶 (第13図18) のほか小片が出土した。18は口縁部が欠落するが、平底の瓶で器面は斜位の平行叩き目を施し、底部際は 2cm内外によりヘラでそぎ落している。土師器は埴 (3)、坏 (5～14)、内黒土器 (4) が出土した。5は口径12cm、器高 5.4cm、底径 5.2cmを測るヘラ切りの埴で、口縁部はややいびつに焼上る。

15は蛇目高台をもつ越州窯系の青磁碗、16は玉縁口縁をもつ荊州窯系の白磁碗である。

これら土器類のほか、埋土中よりモモ 3個、ウメ 1個、イチイガシ 1個、ヤブニッケイ 2個、ヒヨウタン 32個が検出された。



第9図 井戸Ⅰ内出土遺物実測図

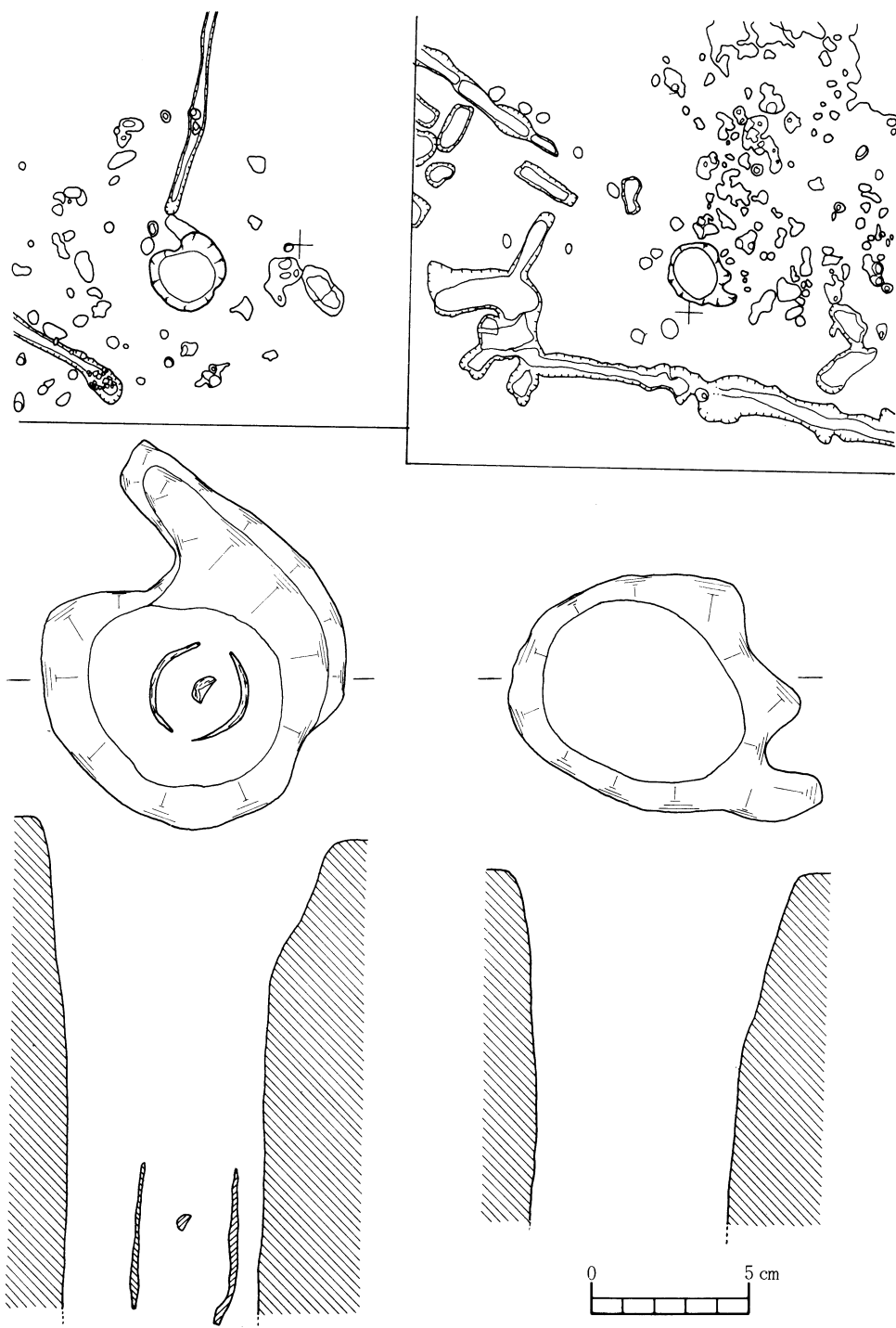
#### (2) 井戸Ⅱ (第10、15図)

井戸Ⅱは、E-Ⅲ、Ⅳ、t-12、13区。遺跡の西端に位置する。井戸の西側には小ピット及び凹凸のはげしい地表面が続き、西側約 2.5mには先端をu-11区に南北に走る溝がある。

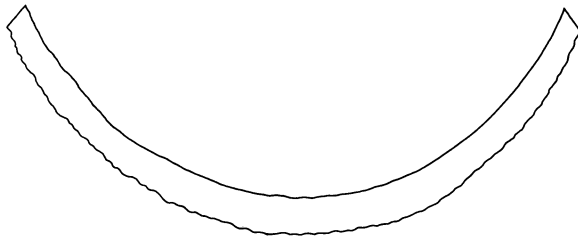
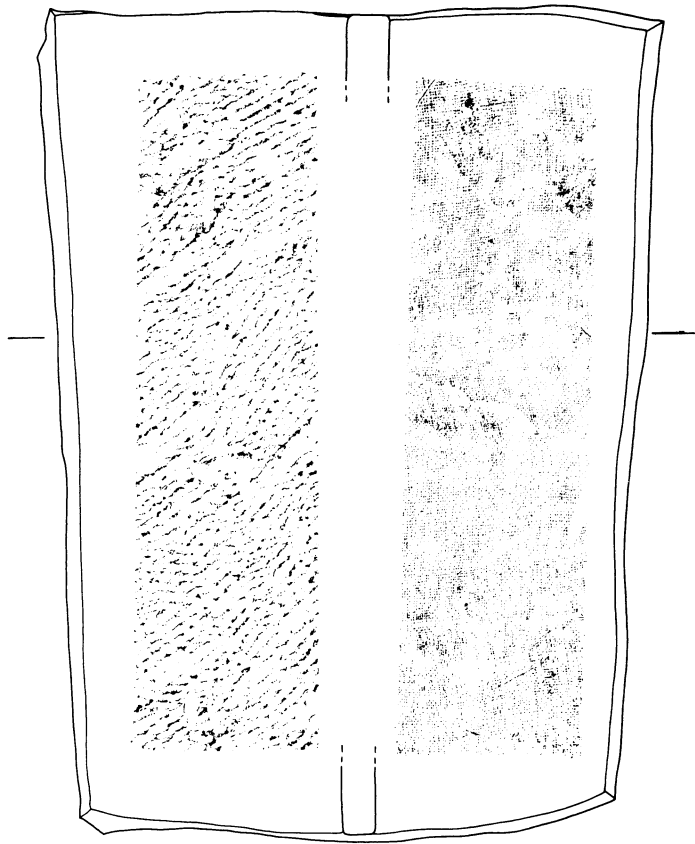
井戸は 1.5m× 1.7mの楕円の平面形を呈し、下位は径 1.2mとなる。地表より約 1mで湧水が激しく、発掘は 2.2mの地点で中止した。井戸枠は検出されなかった。素掘の井戸である。

遺物は土師器埴 (22、23)、坏 (24～28)、皿 (29～34)、口縁部 (35～37) が出土した。29は灯明皿である。38は須恵器埴である。瓦はいずれも小破片で実測可能なものは1点であった。細目縄目叩文の丸瓦である。

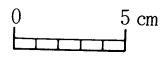




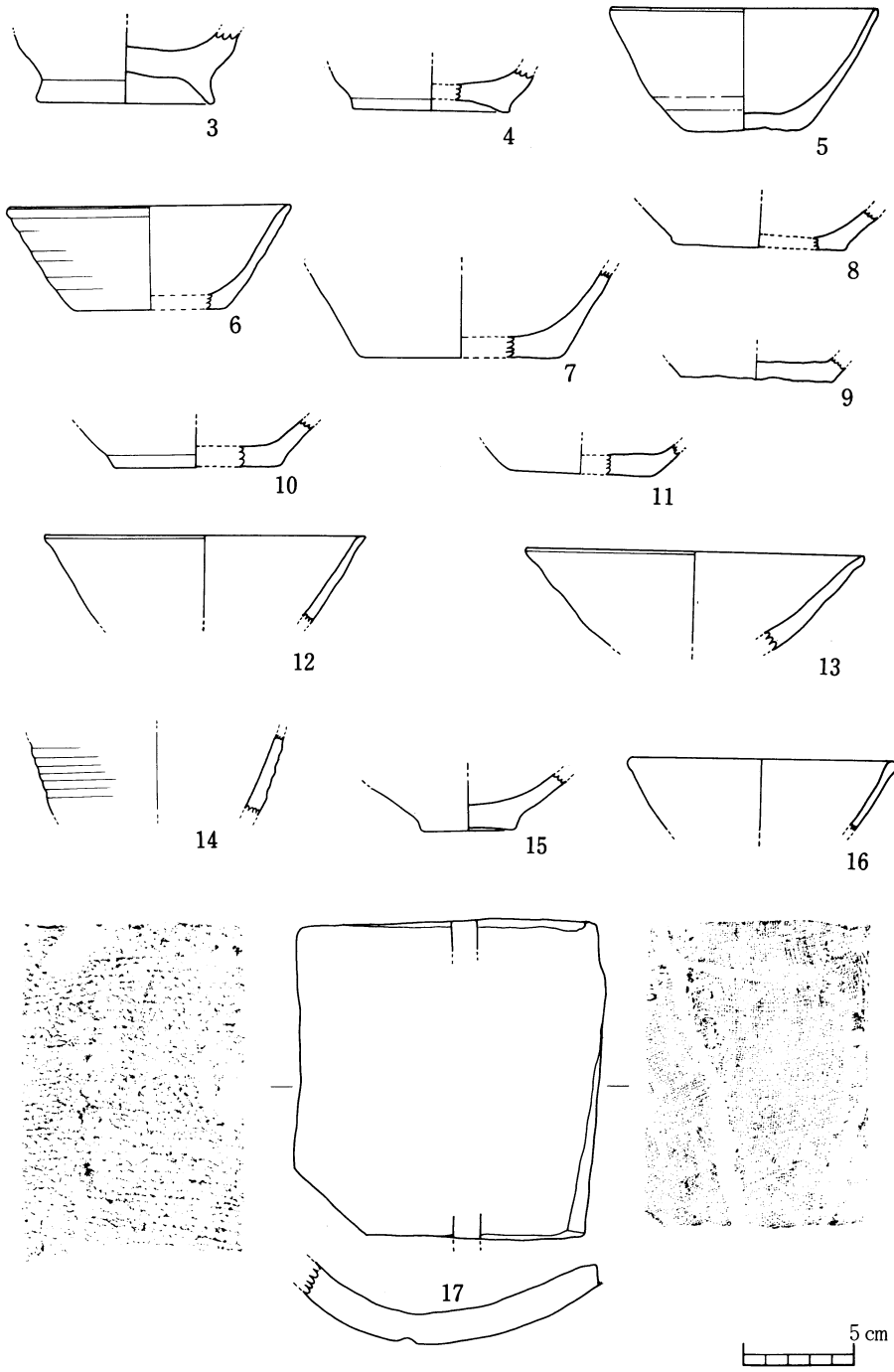
第10図 井戸 I・II平面・断面実測図



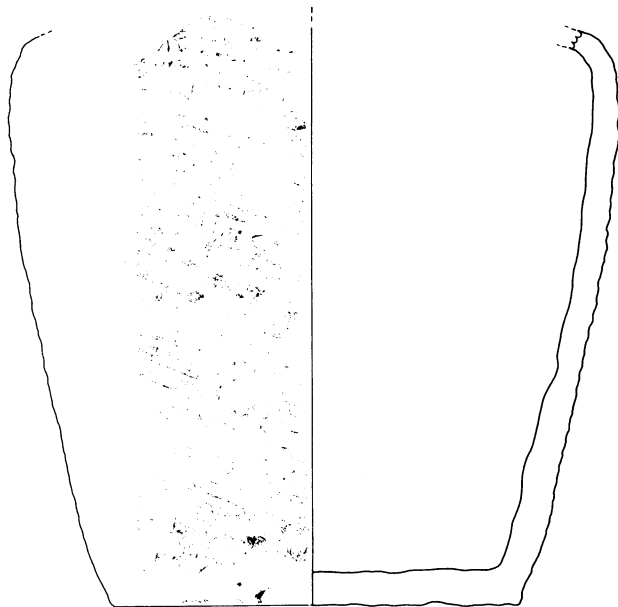
2



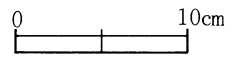
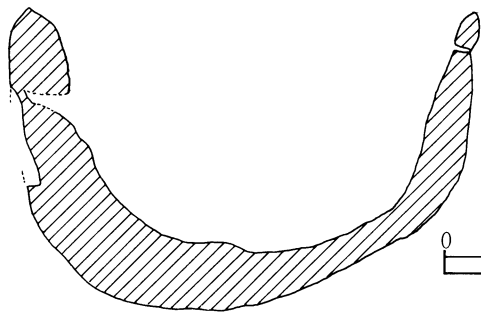
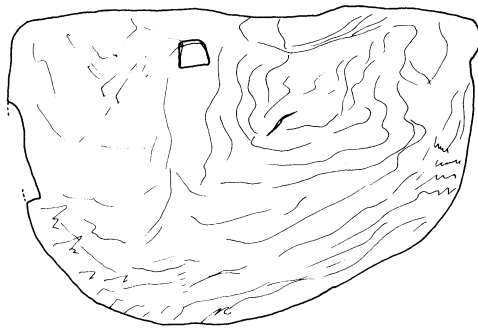
第11図 井戸 I 内出土遺物実測図



第12図 井戸 I 内出土遺物実測図

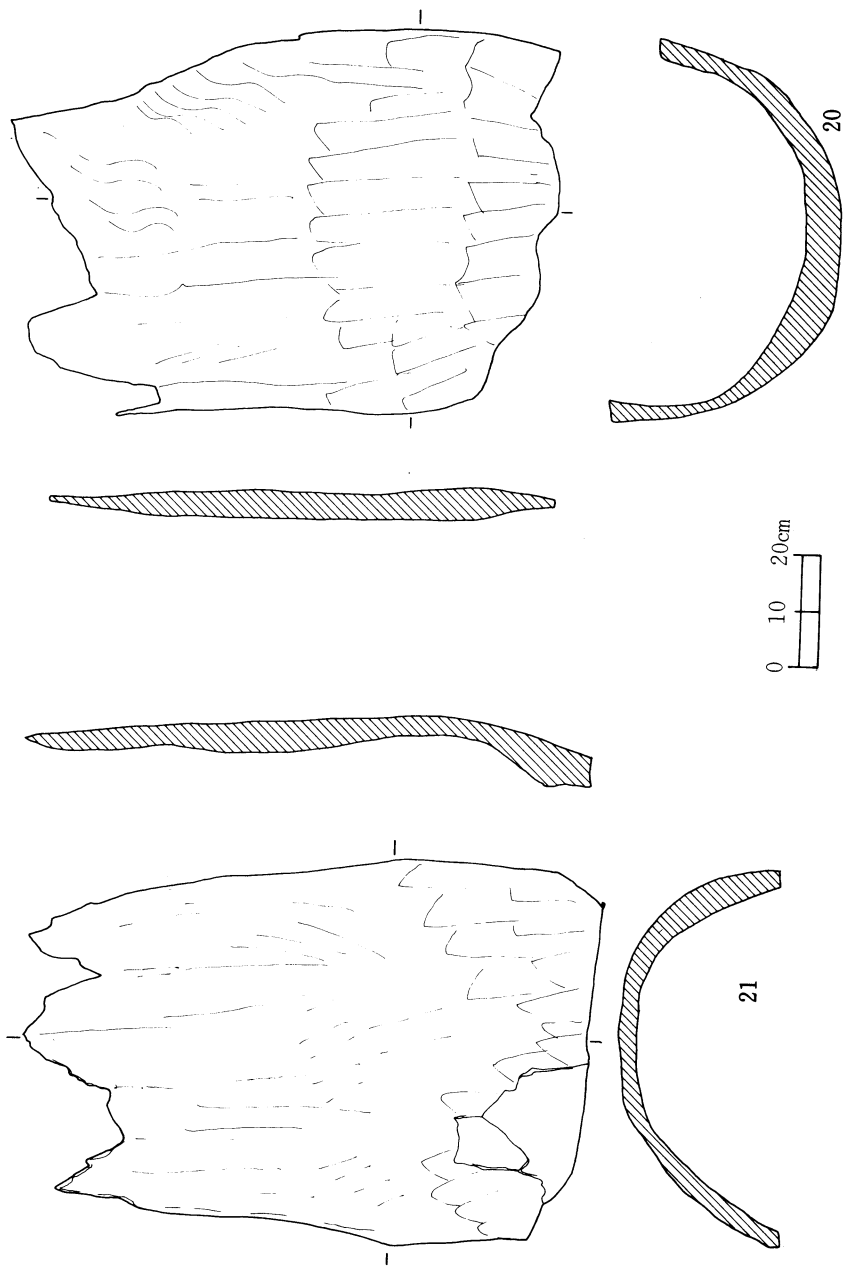


18

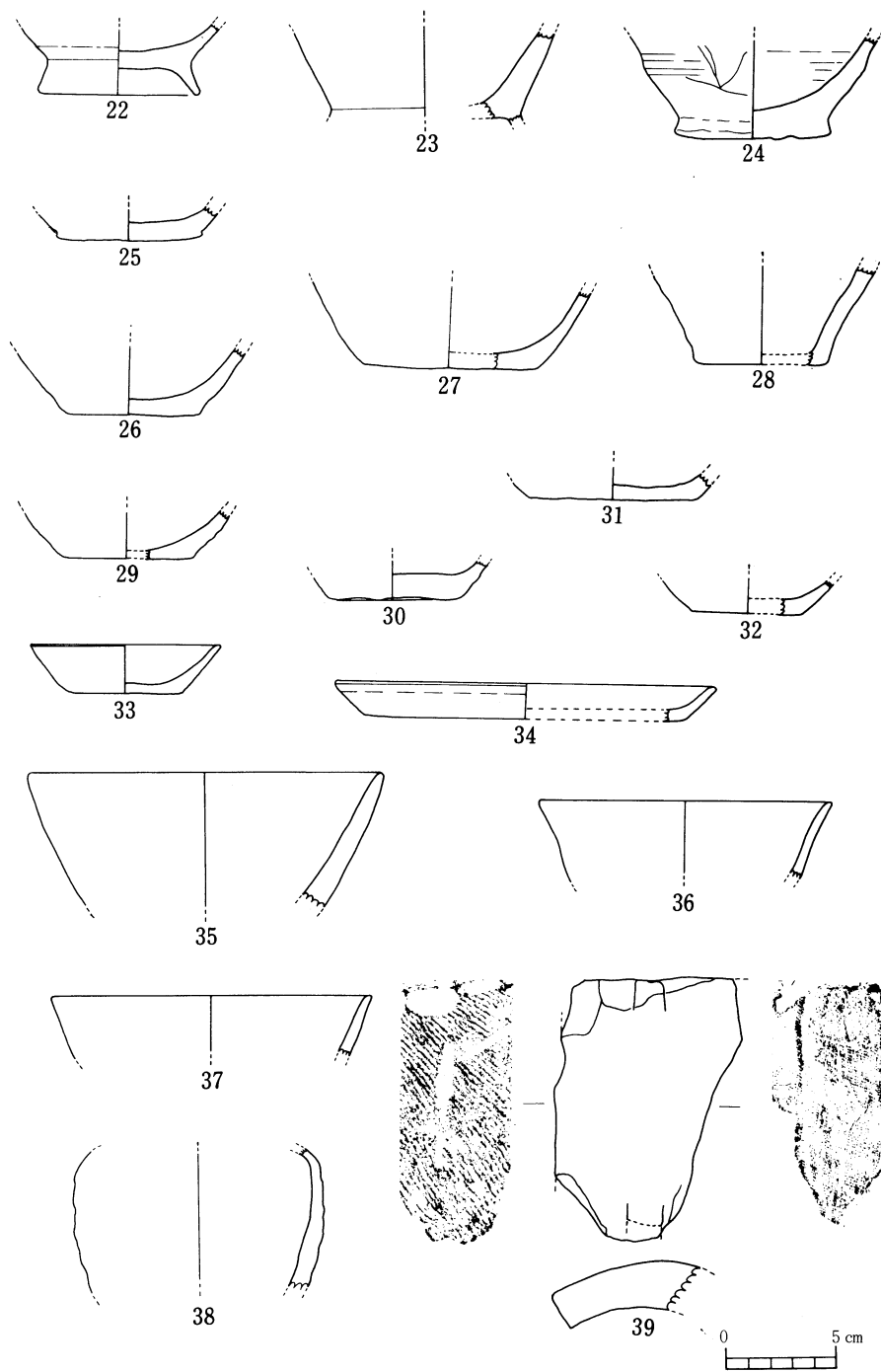


19

第13図 井戸 I 内出土遺物実測図



第 14 图 井戸 I 内出土井戸粹



第15図 井戸II内出土遺物実測図

## 第6章 遺物

### 第1節 土器

#### 1 縄文式土器（第16, 17図, 図版9）

縄文式土器は遺跡の西端におもに出土した。

40は内外面に貝殻条痕を施し、器外面には貝殻縁による縦位の施文があることから前平式土器である。色調は黒褐色を呈する。41～46までは点線文土器である。41は平坦な口唇部にヘラ状工具で不規則に刻目を施し、外面にはヘラ状工具で斜位の沈線を施したのち貝殻縁により点線文を施す。口縁部内面も同様な点線文を施す。42は外反する口縁部付近の土器片でヘラ状工具の施文はなく点線文だけのもので、43, 44, 46も同様である。色調は41, 42, 45が黒褐色、43, 44, 46が茶褐色を呈する。

47～51までは深浦式土器である。47はやや内弯気味の口縁部片で、器面には放射状のみみずばれ状の凸帯を貼付け、刻目を施す。放射状の空間にはヘラ状工具により沈線文を施す。内面には口縁部下に5条の貝殻縁により押捺した連点文が施されている。黒褐色を呈する。

48は直口する口縁部で、外面は47と同様の凸帯を貼付けた後、放射状の凸帯に添って1条の沈線文を施す。平坦な口唇部には刺突連点文を施す。

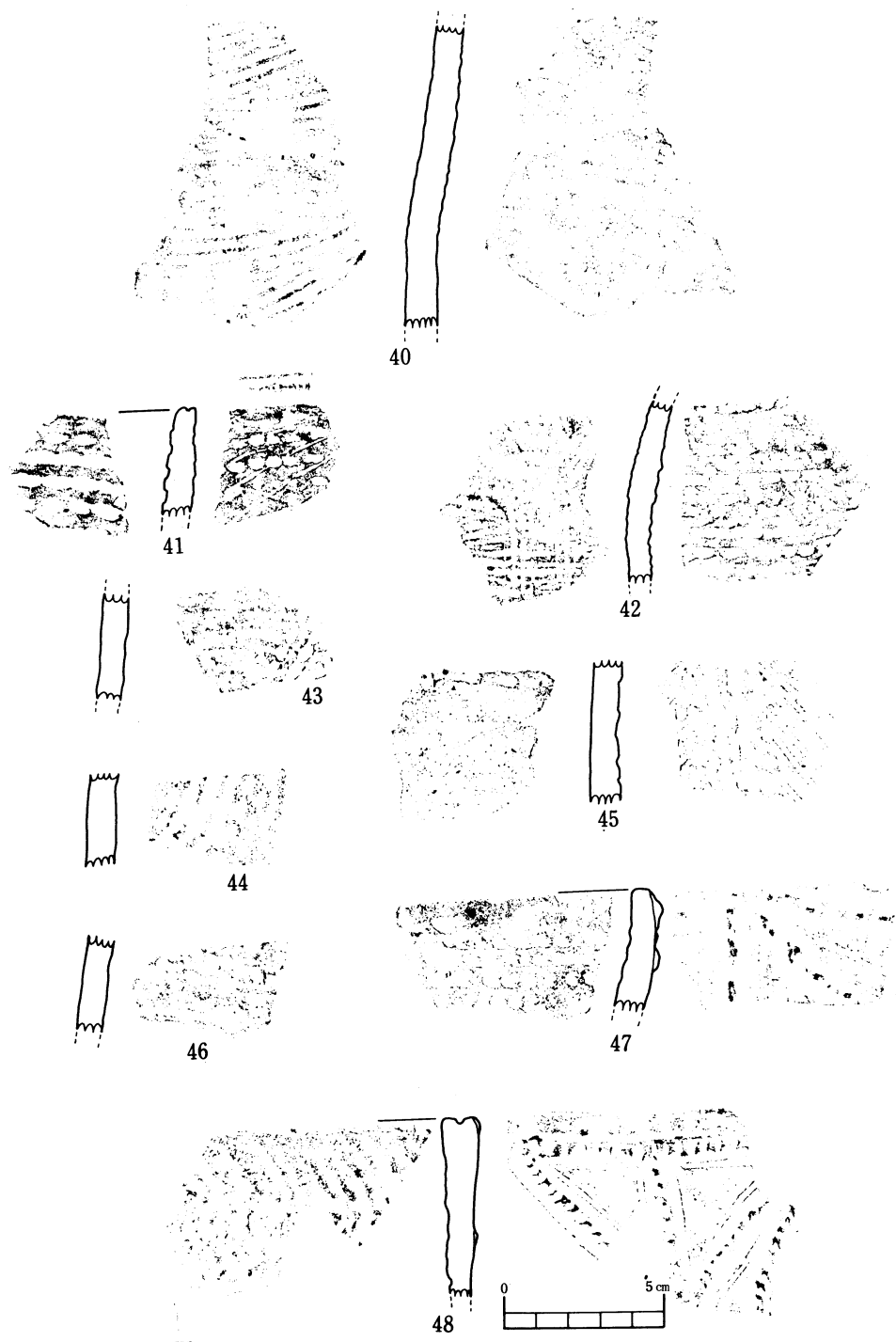
52～56は晩期に属する土器片である。52は口縁部に低い押圧文を施す凸帯を有するものである。53も同様である。54, 55は肩部で稜がつき、54には押圧文の凸帯となる。56は復元口径22.2cmを測り山形突起を有する浅鉢形土器である。くの字に内弯する肩部には断面三角形の凸帯を貼付け、山形突起の下位あたりでは凸帯を交叉させ、リボン状となる。口縁部及び、内面はヘラ研磨している。

#### 2 弥生式土器・3 その他の土器（第18, 19図・図版10）

57～79までは弥生式土器である。57はやや内弯する口縁部に平坦な口辺部を張付ける。この口辺部はわずかに器内部に向って突出する。平坦な口辺部下には断面三角形の凸帯が1条廻る。口辺部内面には粘土のはみ出し部分があり、口辺部を張付けた痕跡がうかがわれる。復元口径30cmを測り色調は薄い茶褐色を呈す。58も同様な器形である。59～64までも平坦な口辺部を有し、口径が最大幅を示すものである。65は胴部からゆるやかに外反したものに平坦な口辺部を形成するものである。66～68は上記土器に属する凸帯片である。弥生時代中期の土器である。

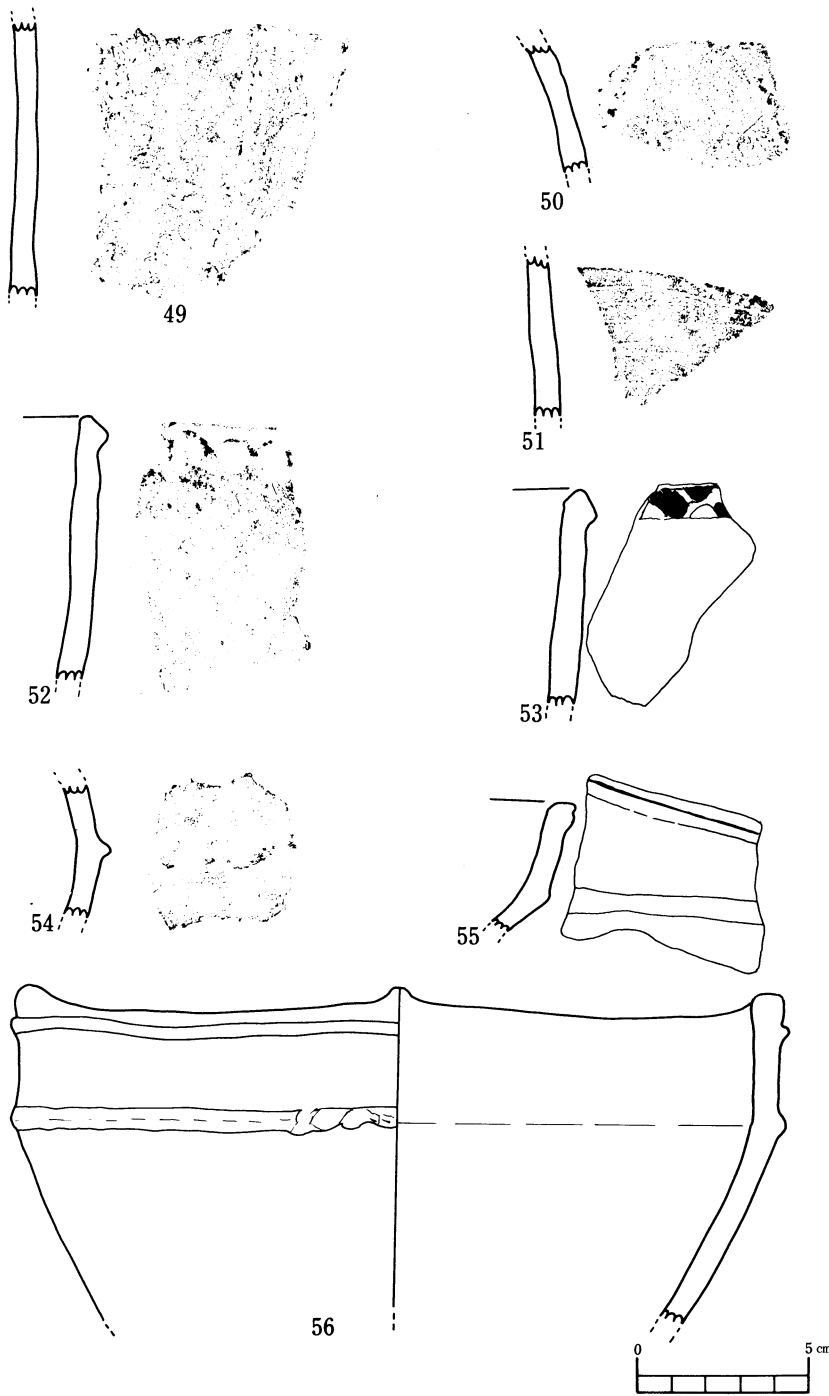
69は壺形土器の凸帯で、凸帯に沈線を廻らし器面には丹が塗りこめられる。薄手で焼成は良い。70は底径8.6cmを測る平底の底部で、胴部は直線的に外反する。71は中空の底部である。

72は壺形土器の口縁部で、肩部以下を欠く、器面には板状工具による調整痕が縦位にみられる。73は肩部に段差が付き凸帯状を呈する壺形土器片である。76～78は壺形土器片、79は絡状凸帯をもつ甕形土器片である。80は器面がヘラ磨きされた高坏の脚部。81は口径5.3cm、器高4.3cmを測る手づくね土器、82は手づくねの土器の脚部である。

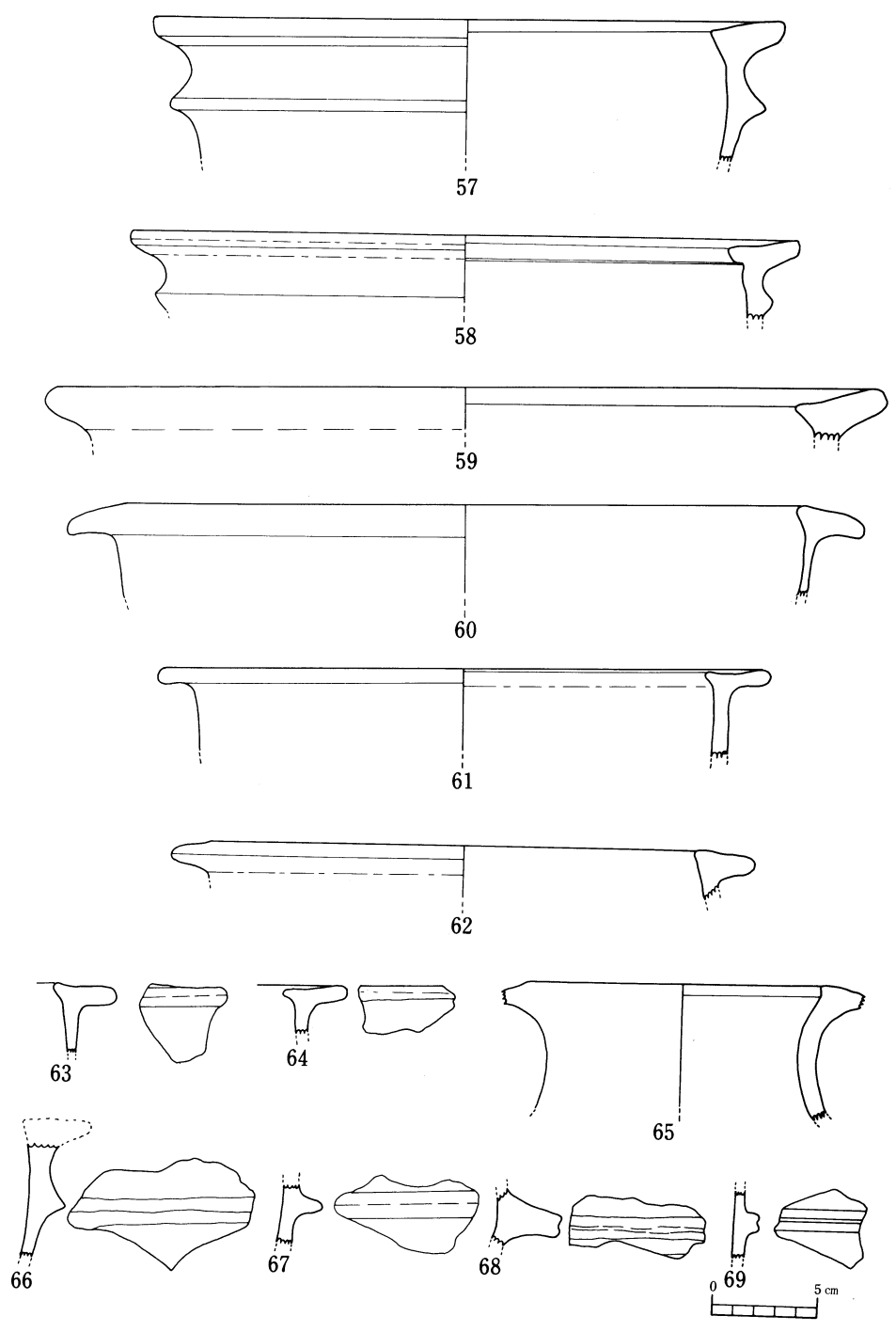


第16図 縄文式土器拓影

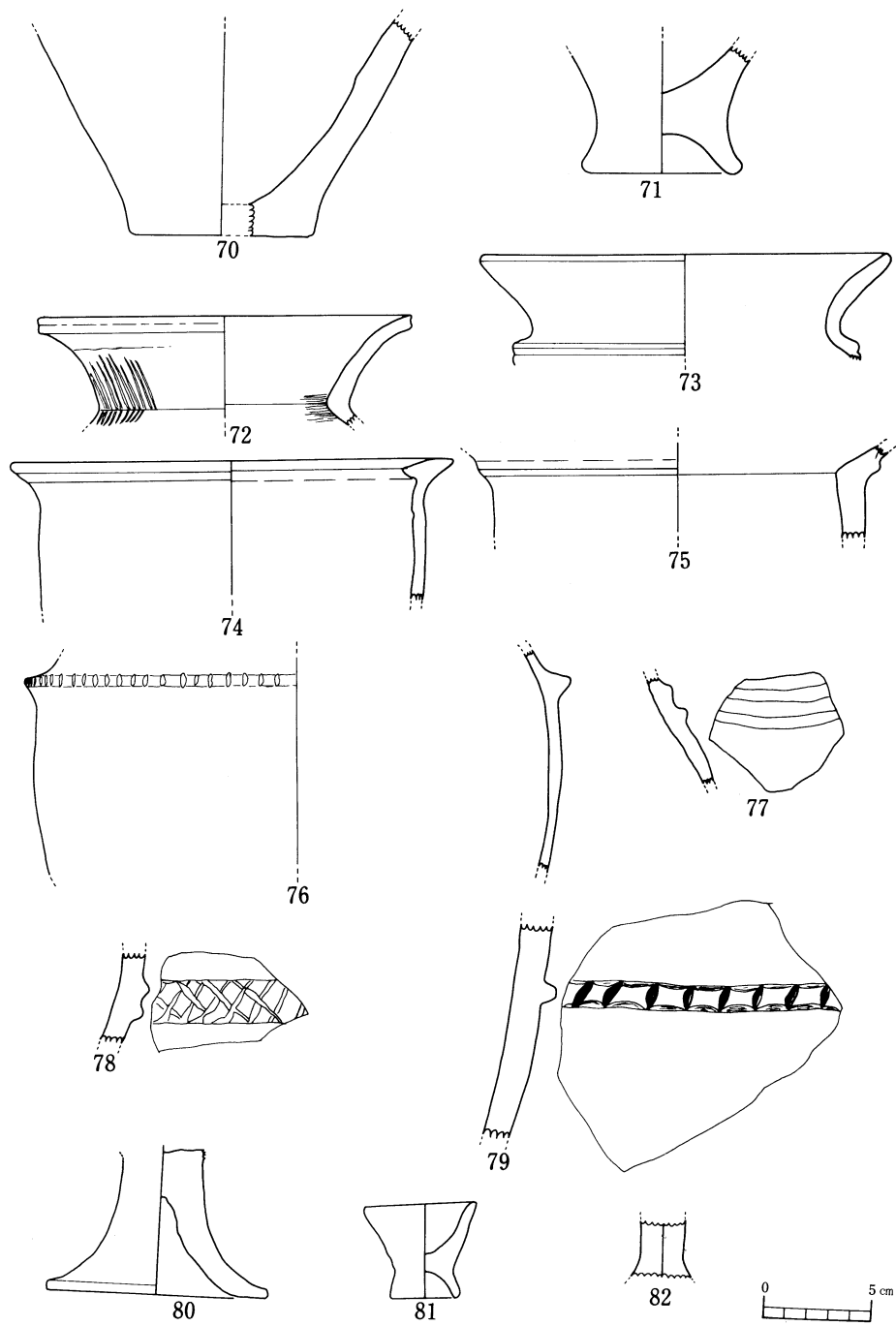




第17図 縄文式土器拓影・実測図



第18图 弥生式土器实测图 I



第19図 弥生式土器Ⅱ・その他土器実測図

### 3 土 師 器

#### (1) 甕 (第20図、図版11)

口縁部がくの字状に外反し、長胴形の胴部をもつもので、底部は不明である。口縁部は外反する部分が長いものと、短いものがある。83, 84は内面に稜をもち外反する。口唇部は舌状にすぼまるものと、やや平坦に調整したものがある。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂粒を含み粗い。内外面の調整は、83の内面は口唇部が横位の刷毛目、胴部以下は粗いヘラ仕上げとなる。84は外面胴部以下は縦位に板目状、口縁部は横位の刷毛目を施す。内面は83と同様である。

85~91までは内側に稜をもたない器形のものである。胴部からなだらかに外反する口縁部は口唇部で丸くすぼまる。色調は茶褐色を呈するが87~91の器面には媒が付着し黒色となる。胎土は88を除き粗い。内面は口縁部はていねいな横位の刷毛目、胴部は粗いヘラ仕上げである。外面は刷毛目仕上げであるが86, 88, 91は胴部に板目を施す。

表4 甕出土区・層一覧表

(単位cm)

番号	出 土 区	層	口径	番号	出 土 区	層	口径	番号	出 土 区	層	口径
83	B-III, l- 9	ピット	26.4	86	F-I u, m-14	2	34	89	B-II, a- 7	2	30
84	B-III, g- 11	2	30	87	D-III, h-12	ピット	27.2	90	F-III, x-12	2	26.2
85	E-IV, f- 15	2	26.5	88	B-IV, f-14	2	31.2	91	B-IV, p-10	ピット	23

#### (2) 埴 (第21, 22図・図版11)

本遺跡出土の埴は高台を有するものを総称した。出土区もほぼ遺跡全域におよぶ。器形は0.5cm内外の低い高台から1cm内外の高台を有するものに、体部は直線的に外反するものと、やや弯曲して立上るものとに類別できる。口径は20cm~12cmの範囲に含まれる。

92~101は低い高台を有するものである。この類の高台は底部内外面をひき出すか、削り出すことで低い高台をつくり出す技法をとる。胎土、焼成ともに良好である。ことに94は赤褐色に焼きしまり堅緻な埴となっている。

器体は底部より直線的に立ち上り、口唇部で舌状にすぼまる(92~96)ものと、やや弯曲して立ち上るもの(97~101)に分類され、内外面はいずれも刷毛目仕上げである。

102~131は1cm内外の高台を有するものであるが、高台もやや垂直に立つもの、直線的に開くもの、やや内弯しながら開くものがある。器体は直線的に立ち上るものと弯曲するものに類別できる。

102はC-IV, l-12区に出土したもので、口径12cm、器高5.7cm、底径6.2cmを計る。やや厚手の高台は立ち、端面は丸くおさめる。色調は乳白色を呈するが、口縁部内面は黒褐色に変色している。胎土焼成ともに良い。器面は内外とも横位のナデ仕上げである。

104は大型の埴で口径16.6cm、器高7.8cm、底径8.4cmを計る。A-III, b-11区に出土した高台と埴部の接合部は、接合時の調整が不十分なために段差が認められる。高台は外反し、端部はヘラ状工具で調整しまとめる。器体は外反し口唇部は舌状にすぼまる。器面調整は内外面とも

ナデ仕上げであるが、内面にはうず巻き状の沈線が底面より左巻きに1条せり上がる。色調は茶褐色、黒褐色のほか赤褐色も呈し一定しない。内面には媒が付着する。

107~129, 130は口縁部底部を欠くために全体の形状は不明である。

130は口径15cm、器高7.2cm、底径8.2cmを計る。高台はやや外びらきにふんばり、端部は丸味をおびる。器体は口縁部でわずかに立上る。内外面とも刷毛目仕上げである。色調は茶褐色を基調とするが、外面は黒色ないし、黒褐色に変質している。

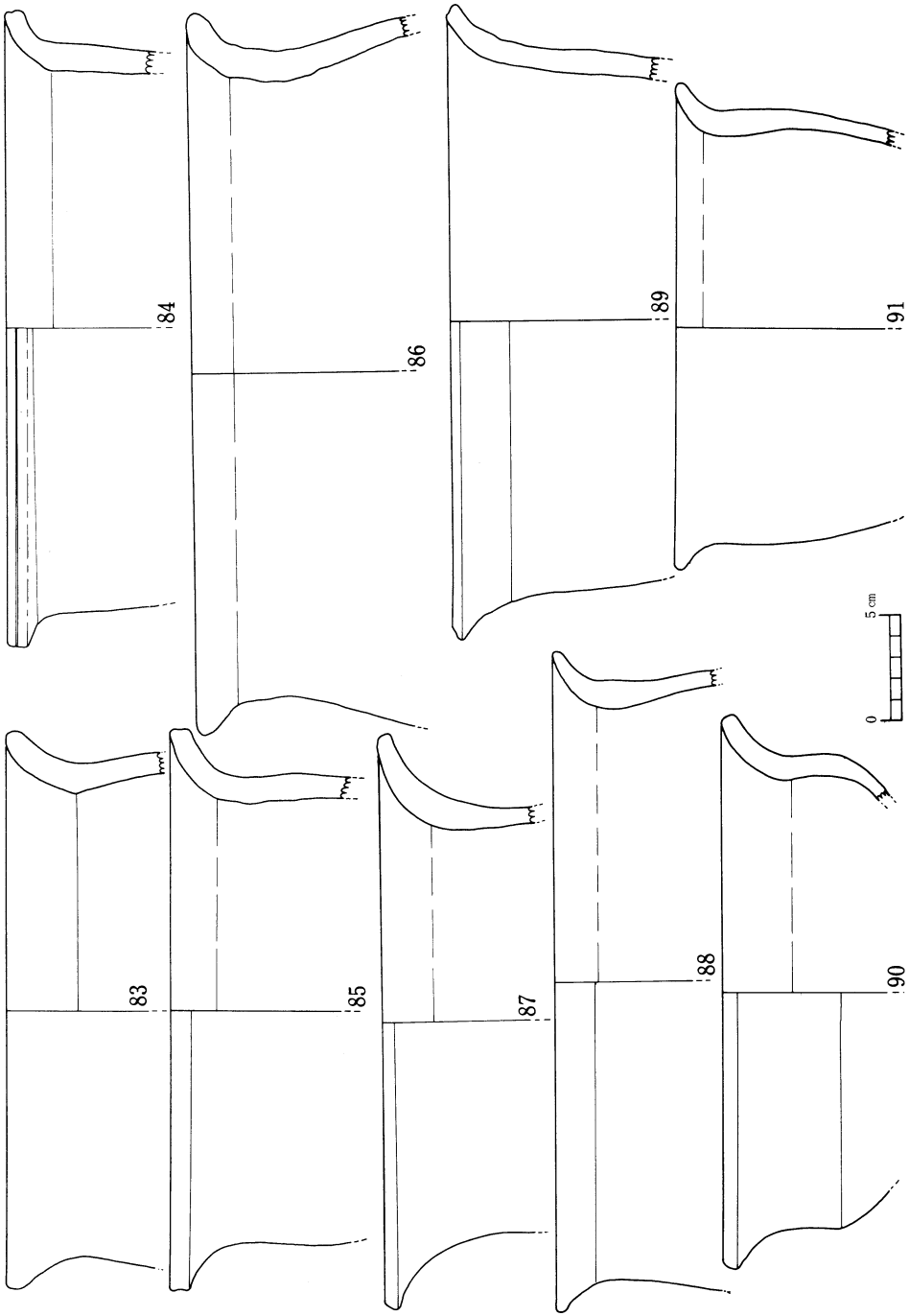
### (3) 鉢 (第22図・図版12)

鉢で復元できるものは3点であったが、破片は他にも出土した。132, 133は内黒土器で口径はそれぞれ22cm, 23.9cmを測る。底部は欠損し不明である、132は外面に粗い刷毛目が残る。134は口径24cmを測る。内面はていねいなヘラ仕上げ、外面は粗い刷毛目で仕上げ、胴部以下は黒色の色調を呈する。胎土、焼成とも良好である。

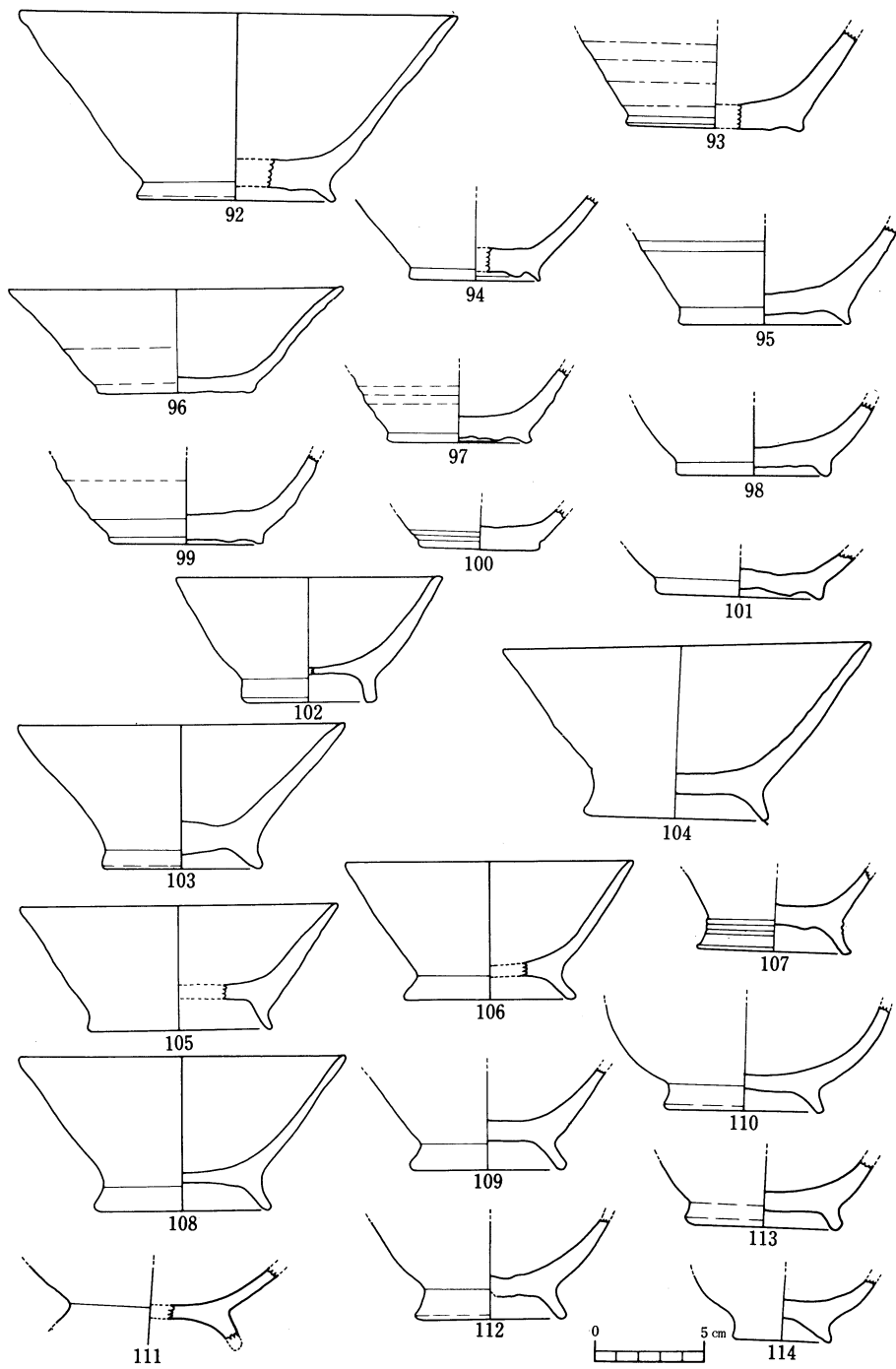
表5 壙・鉢出土区・層一覧表

(単位cm)

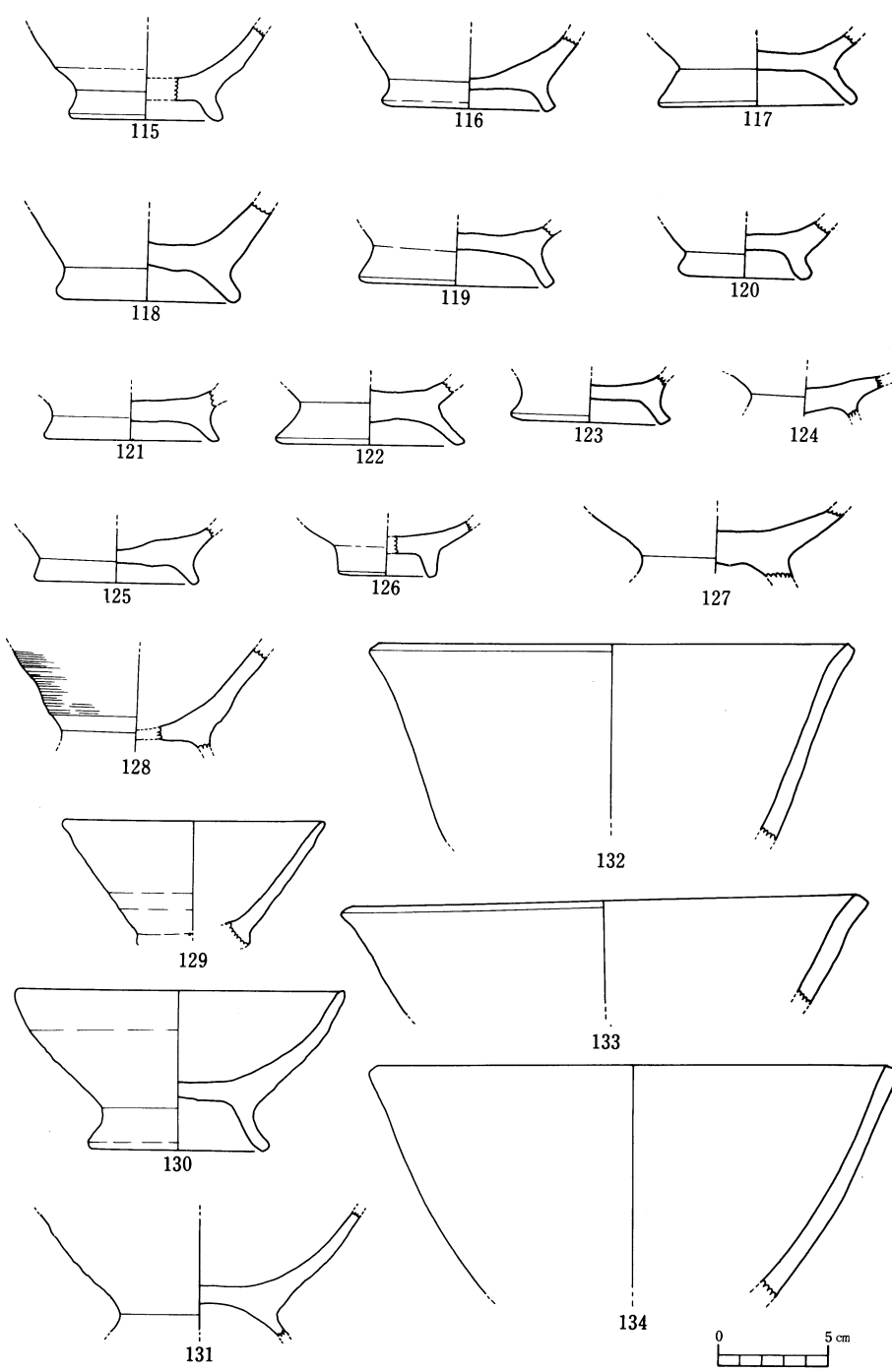
番号	出土区	層	口径	器高	底径	番号	出土区	層	口径	器高	底径
92	C-IV, b-16	2	20	8.5	9.0	114	DW, (P-16, 2)				4.4
93	C-W, l-15	2			8.0	115	D-W, Cm-15	2			7.1
94	F-III, u-12	2			5.8	116	C-III, k-12	2			7.7
95	A-IV,	ピット			7.8	117	F-IV, u-14	2			9.0
96	D-IV, m-15	落込み	15.2	4.8	7.2	118	A-T, a-4-2	ピット			8.4
97	C-IV, k-lの壁	2			6.6	119	B-III, f-12	2			6.8
98	F-III, u-11	2			7.0	120	C-II, i-8	2			8.0
99	G-I, v-y-14	3			7.0	121	B-III, 8-12	1			8.0
100	A-IV, d-14	II			5.4	122	B-III, 8-9	2			8.6
101	D-II, D-11-1	表・採			7.6	123	B-III, g-12	2			7.2
102	C-IV, 2-13	2	12	5.7	6.2	124	B-IV, g-14	2	-	-	-
103	B-III, c-11	2	14.8	6.6	7.3	125	B-21, f-12	2		-	7.4
104	A-III, b-11	2	16.6	7.8	8.4	126	G-III, y-11	1			4.4
105	B-IV, h-13	1	14	5.7	8.4	127	G-III, y-11	3	-	-	-
106	D-IV, m-15	落込み	13	6.3	7.8	128	C-III, l-12	2	-	-	-
107	B-N, f-14	2			7.0	129	F-IV, x-B	2	12.0		
108	B-III, n-9	ピット	14.8	7.1	8	130	B-III, t-9	ピット	15.0	7.2	8.2
109	F-IV, W-14	2			7	131	B-III, e-11	2	-	-	-
110	B-III, f-11	2			7.3	132	D-IV, m-14	2	22.0		
111	B-III, l-12-2	ピット			6.8	133	D-IV, m-14	II	23.9		
112	B-III, e-12	2				134	D-IV, m-15		24.0		
113	F-IV, x-14	2			7.2						



第20図 土師器(甕)実測図



第21図 土師器(埴)実測図



第22図 土師器(碗・鉢)実測図



#### (4) 坏 (第23～25図・図版12, 13)

坏は表層からも出土したが、主体は2層で、遺跡全域に出土した。溝状遺構、ピット、井戸跡等に関連して出土したのもあった。

口径11.0cm～15.4cmの範囲のもので、底部は188の糸切底を除き、すべてヘラ状切底である。器形は直線的に開くもの、やや弯曲するもの、弯曲したのち口唇部が外反するものに大別できるが、出土地点、層位関係、遺構等による変化は把握できない。

この坏には、墨書、刻書を有するものがあるが、これらについては項を改めて記載することにした。また146は片口の坏である。135は口径11.4cm、器高3.9cm、底部8.2cmを計る。底部端はていねいな仕上げのための角度をもって器体は立ち上る。口唇部は平坦となる。色調は茶褐色を呈し、胎土、焼成ともに良い、小ぶりの坏である。

137は口径17.4cmを計るもので坏類では大形に属するものである。乳白色を呈し胎土、焼成ともに良い。

138～148までは比較的深い坏である。このうち146は口径12.6cm、器高5.0cm、底径6.3cmを計る片口の坏である。底部はヘラ起しののちの整形がなされないため底部端の粘土がはみ出し不定形である。器面は横位の刷毛目仕上げで、色調は茶褐色を呈する。片口部は両方より一気につまみ出したのち、口唇部をわずかに調整しているにすぎない。胎土は砂粒を含まず良好である。

149～160までは比較的浅い坏の一種であり、口縁部は開き口唇部はわずかに外反して舌状にすぼまるのが特徴である。161～163らは、器体が弯曲して立ち上り、底部径はやや小さい。161は口径11.6cm、器高4.4cm、底部5.4cmを計り、D-II、n-11区のピット中より出土したものである。163は厚手に仕上げられた坏で、器内外面の調整も粗く、底面も平坦さに欠け、底面端も不整形である。色調は底部より口縁部にかけて黒色、一部茶褐色を呈する。5は井戸I内より出土したものである。164～165は部厚い器壁を有する浅い坏であるが、167、168は皿の類に入るかもしれない。ともに内外面とも黒色となり、灯明皿に使用されたものである。ことに168の内面は火熱のため剥落部位があり、黒色化が著しい。

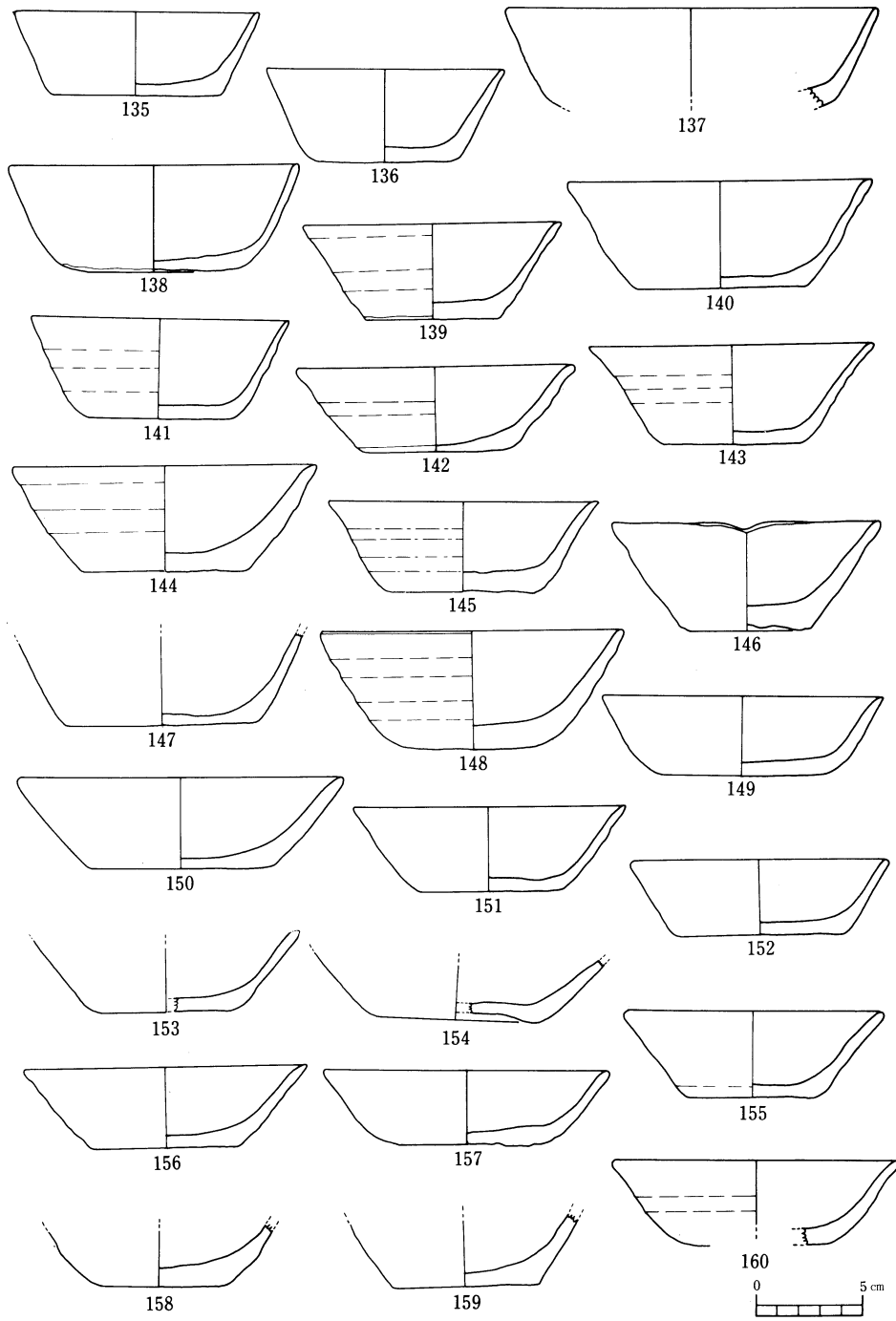
173～187までは0.5cm内外のわずかな高台状のものを有するものである。しかし、高台となりきらず、単に底部端に粘土碗がはみ出したものとみられる。一般にやや厚手の壁厚である。173は口径12.6cm、器高5.2cm、底部径6.0cmを計り、底部は貼付け状を呈する。器体はやや弯曲して立ち上る。色調は灰色を呈し、胎土、焼成はともに良い。174、176、181等の底部は高さが0.7～0.8mm程となりより高台状となる。しかし、前述の碗(第21図92～101)にみられるように、底部を引き出すか、削り出すことによって低い高台を作り出すものと違い単に底部面が部厚く肥厚したことに起因するものと思われる。

なお、170は外面をヘラ磨きした赤褐色の土師器(坏)であるが、内面に朱を塗り付けている。188は口径15.2cm、器高4cm、底径8.8cmを計る坏で、本遺跡出土のうち唯一の糸切底である。

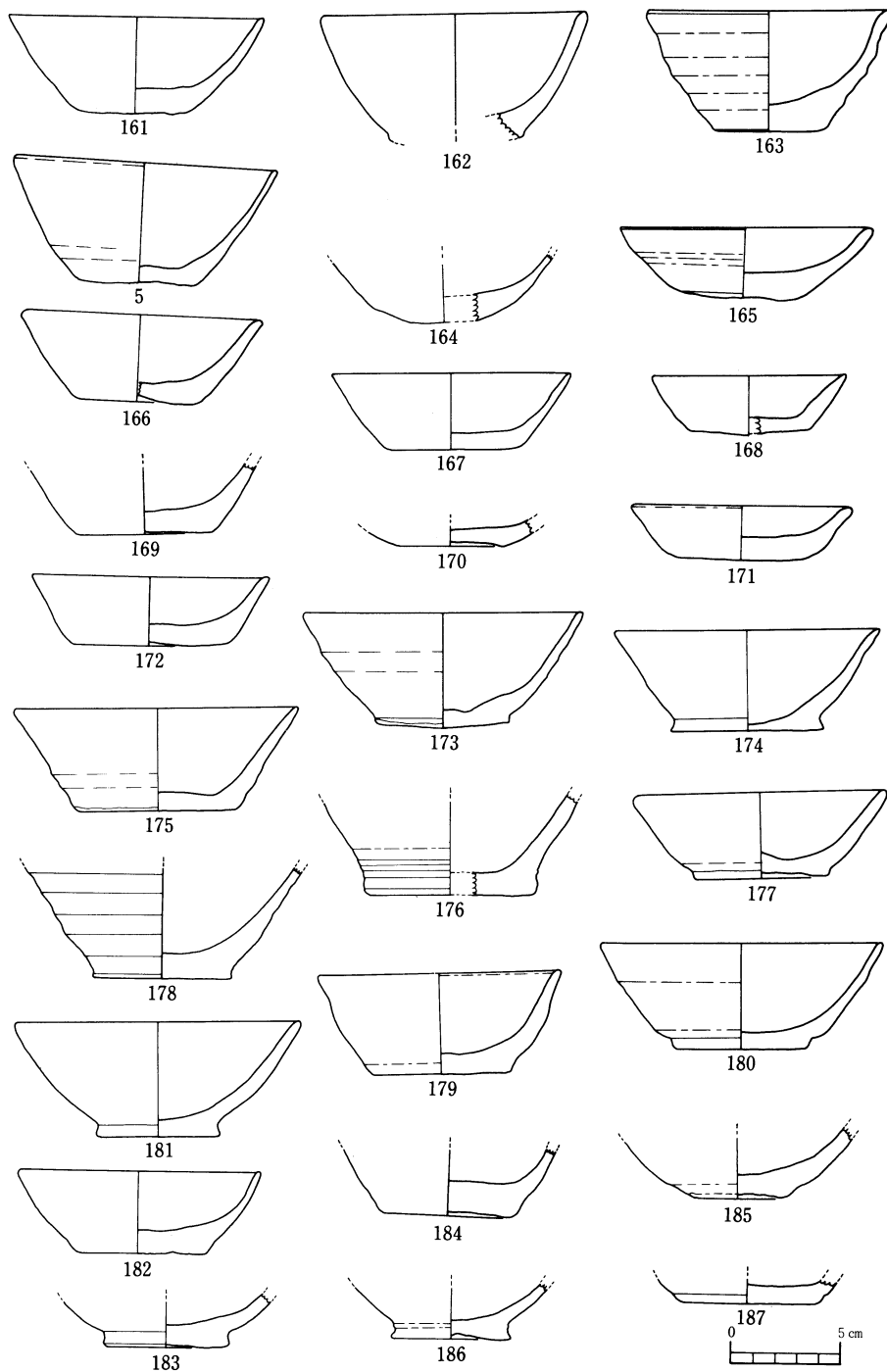
表6 坏・皿出土区・層一覧表

(単位cm)

番号	出土区	層	口径	器高	底径	番号	出土区	層	口径	器高	底部
135	D-II, m-12	2	11.4	3.9	8.2	168	X-10	2	8.8	2.7	5.6
136	D-IV, a-12		11.2	4.4	7.2	169	A-II, d-8	ピット <sub>8</sub>			6.2
137	C-III, D-III	2	17.4			170	A-III, g-14	II			3.5
138	C-IV, K-13-14	2	13.6	5.0	9.0	171	C-I, V-i-15	2	10.0	2.5	6.0
139	F-IV, X-14	2	12.0	4.4	6.4	172	C-IV, K-16	2	10.8	3.2	7.2
140	A-II, b-3	2	14.2	5.0	8.2	173	C-II, i-8	2	12.6	5.2	6.0
141	F-IV, X-14	2	12.0	4.7	7.2	174	D-IV, n-13	2	12.0	4.6	7.0
142	D-V, p-18	2	13.0	4.0	7.2	175	C-IV, h-15	2	13.0	4.6	7.8
143	D-IV, o-15	2	13.2	4.6	6.8	176	C-I, k-l	2			7.8
144	C-IV, l-15	2	14.2	5.0	8.0	177	b-IV, c-12	2	11.6	3.9	6.2
145	A-III, d-9	ピット	12.6	4.3	7.4	178	B-IV, h-13	2			6.4
146	B-IV, n-9	ピット	12.6	5.0	6.3	179	A-III, c-13	2	11.0	4.6	6.4
147	C-III, l-12	2			9.2	180	C-II, i-8	2	12.8	4.8	6.2
148	F-IV, X-14	2	14.2	5.5	7.0	181	B-IV, g-15	2	13.0	5.3	5.8
149	D-III, m-12	2	13.2	3.7	8.0	182	B-III, l-21	1	11.0	3.8	6.2
150	D-I, m-2	1	15.4	4.2	8.8	183	A-II, b-7	ミソ <sub>2</sub>			5.8
151	C-III, k-11	2	12.6	4.0	7.2	184	B-II, j-8	2			6.2
152	F-IV, V-14	2	12.0	3.5	8.0	185	B-III, l-12	2			4.8
153	B-IV, k-15	2			7.0	186	A-II,	ミソ <sub>2</sub>			5.4
154	D-IV, n-14	2			7.8	187	B-II, j-8	2			6.6
155	C-III, b-12	2	12.2	4.1	6.8	188	表面採集		15.2	4.0	8.8
156	D-IV, m-15	落込	13.2	3.8	7.0	189	D-IV		14.0	2.8	12.4
157	F-IV, u-14	2	13.4	3.5	8.0	190	O-III, n-12	2	13.0	2.6	10.0
158	F-III, x-10	2			6.5	191	B-II, e-8	2	11.6	2.8	6.2
159	D-V, n-17	2			7.0	192	D-I, o-2	1	14.8	1.5	11.0
160	B-IV, f-15	2	13.4	4.0	7.0	193	F-III, x-9	2	12.6	1.5	9.5
161	D-III, n-11	2ピット	11.6	4.4	5.4	194	D-III, n-10	ピット <sub>2</sub>	11.0	2.3	4.8
162	A-IV,	ピット	12.2	6.0	6.2	195	F-III, x-9	2	12.6	1.5	9.4
163	A-III g-14	II	11	5.5	5.2	196	D-IV,		12.4	1.5	9.0
164	A-III, b-11	2			3.0	197	D-I, o-2	1	8.4	1.4	7.0
165	C-IV, i-13	2	11.6	2.2	5.4	198	B-V, e-8	2	11.0	2.9	7.0
166	C-IV, l-15	2	11.0	4.0	6.0						
167	C-IV, h-15		10.8	3.5	6.4						



第23図 土師器(坏)実測図 I



第24図 土師器(坏)実測図II

(5) 皿 (第25図・図版13)

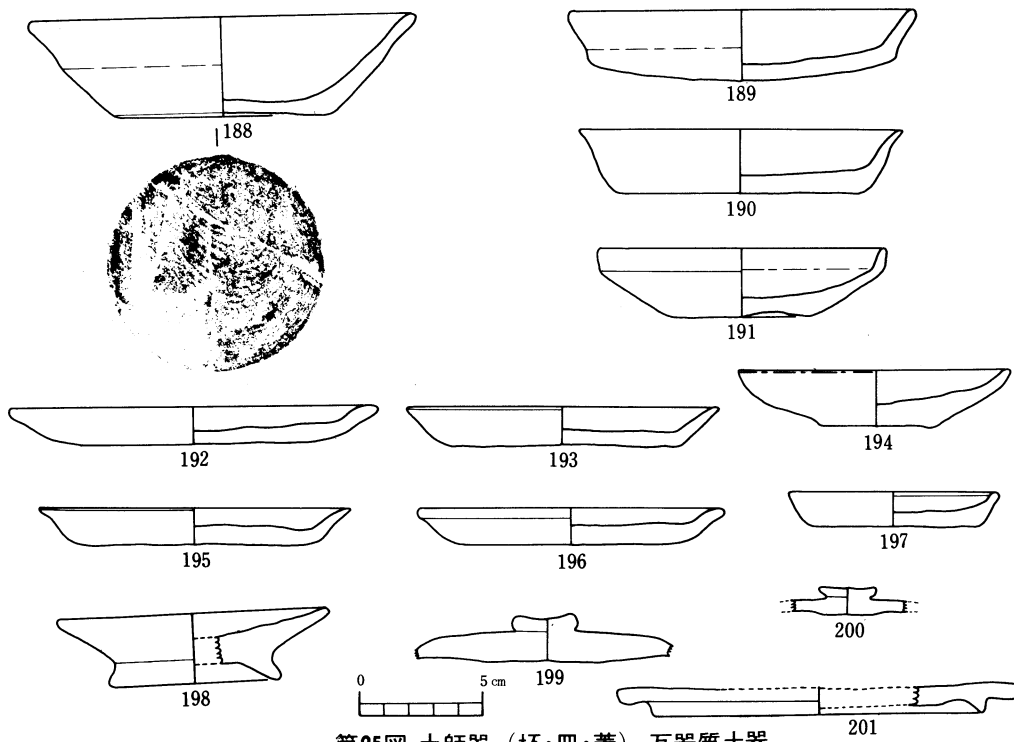
口径8.5cm~12.0cm、器高1.4cm~2.8cmを測る。底部は安定した平底、あるいは中心部がやや窪んだ不安定な平底、脚付のもので、器体は外反しながら口縁部に至る。口縁部はわずかに外反するもの(190, 195, 196)や191にみるように立ち上るものがある。194の底部はわずかにせり出している。197の糸切底の他はヘラ切底である。198は口径11cm、器高2.9cm、底径7cmを計る脚付皿である。肥厚した脚部から直線的に開き浅い皿部をつける。胎土、焼成ともに良好で、器面は刷毛目仕上げとなる。

(6) 蓋 (第25図・図版13)

土師質の蓋は2点出土した。199は天井部が平坦で、口縁端部をわずかに欠くが鈍い鳥嘴状を呈していたものと思える。頂部には中央部がややくぼんだ径2.5cmのつまみがつく。天井部には器面調整痕と思える沈線圏が一条巡る。色調は明かるい茶褐色を呈し、胎土、焼成ともに良い。200は灰色を呈すもので、頂部及びつまみが残存する。つまみは2.5cmで中央部はわずかにくぼむ。固く焼きしまり、胎土も良い。内外面ともなで仕上げである。

(7) 瓦器質土器 (第25図・図版14)

201は復元径16cmの円形で、周縁1.5cm内に0.6cmの突帯が一条巡る。上面は中央部付近にかけやくぼまり、表面の剥落が目だつ。円面硯か蓋か不明である。



第25図 土師器 (坏・皿・蓋) 瓦器質土器

## 5 内黒土器 (第26, 27図・図版14)

内黒土器は内面が黒い土師器を呼び、器形は壺、坏が主でわずかに鉢、皿がみられる。しかし完形は202のみで他は口縁部、底部のいずれかを欠き全体の形状は不明なものが多い。

出土地点は遺跡全体に及び、溝状遺構、ピット中にも若干出土した。

202は本遺跡出土内黒土器のうち唯一の完形品で、口径10.8cm、器高5.0cm、底径6.6cmを測る。高さ1cmの外開きの薄手の高台から弯曲して立ち上り、口縁部はほぼ垂直となり口唇部となる。外面は胴部より口縁部にかけてヘラ磨きされ、底部にかけては水引きによる仕上げとなる。内面はていねいなヘラ磨きでつやのある黒色を呈する。A-III, C-11区に出土した。203は肥厚した低い高台をもつもので、外面は赤褐色の色調を呈する。他の壺は高台の高い、浅いの差は認められるが、内面のヘラによる整形は同一である。

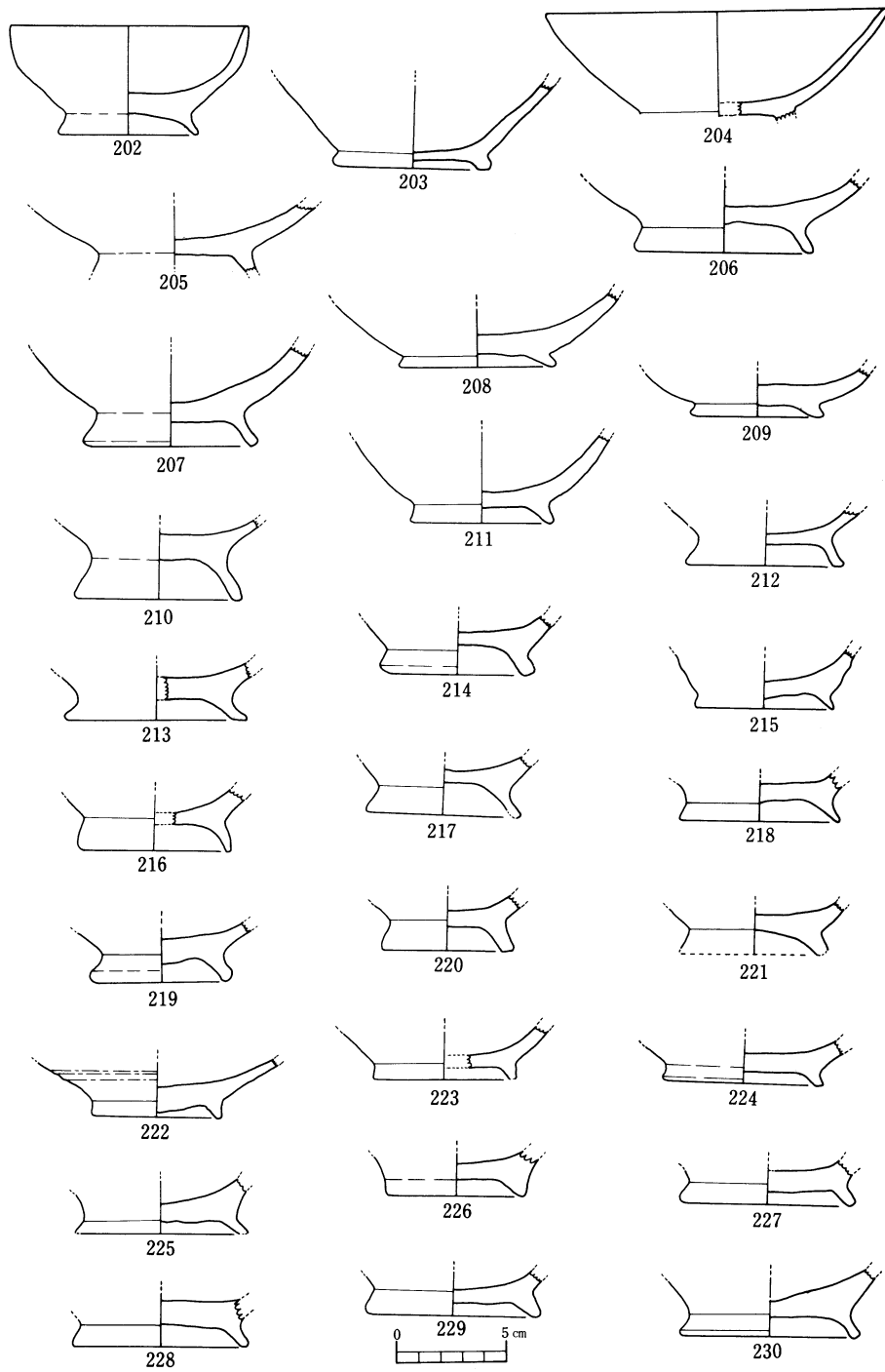
坏は壺に比較して出土点数は少ない。233は口縁部及び底部の一部を欠くため全体の形状は不明である。内面の黒色部は底部内面の剥落が著しい。茶褐色を呈し、胎土、焼成は良い。234~237も坏である。いずれも内面の黒色は鈍く、磨耗の度合いは強い。241は皿である。復元口径13.9cm、器高2.0cm、底径7.6cmを計る。内面はていねいなヘラ磨き、底部は粗い糸切底となる。

内面の黒色部分は媒等を付着し、ヘラ研磨したようにみられるが、断面観察等では付着した痕跡はなく、単に黒く焼けてしまっているにすぎない。また口縁部外面にも黒色部がはみ出たところもある。これらのことから、外面は酸化焰、内面は還元焰で焼成したものと考えられる。

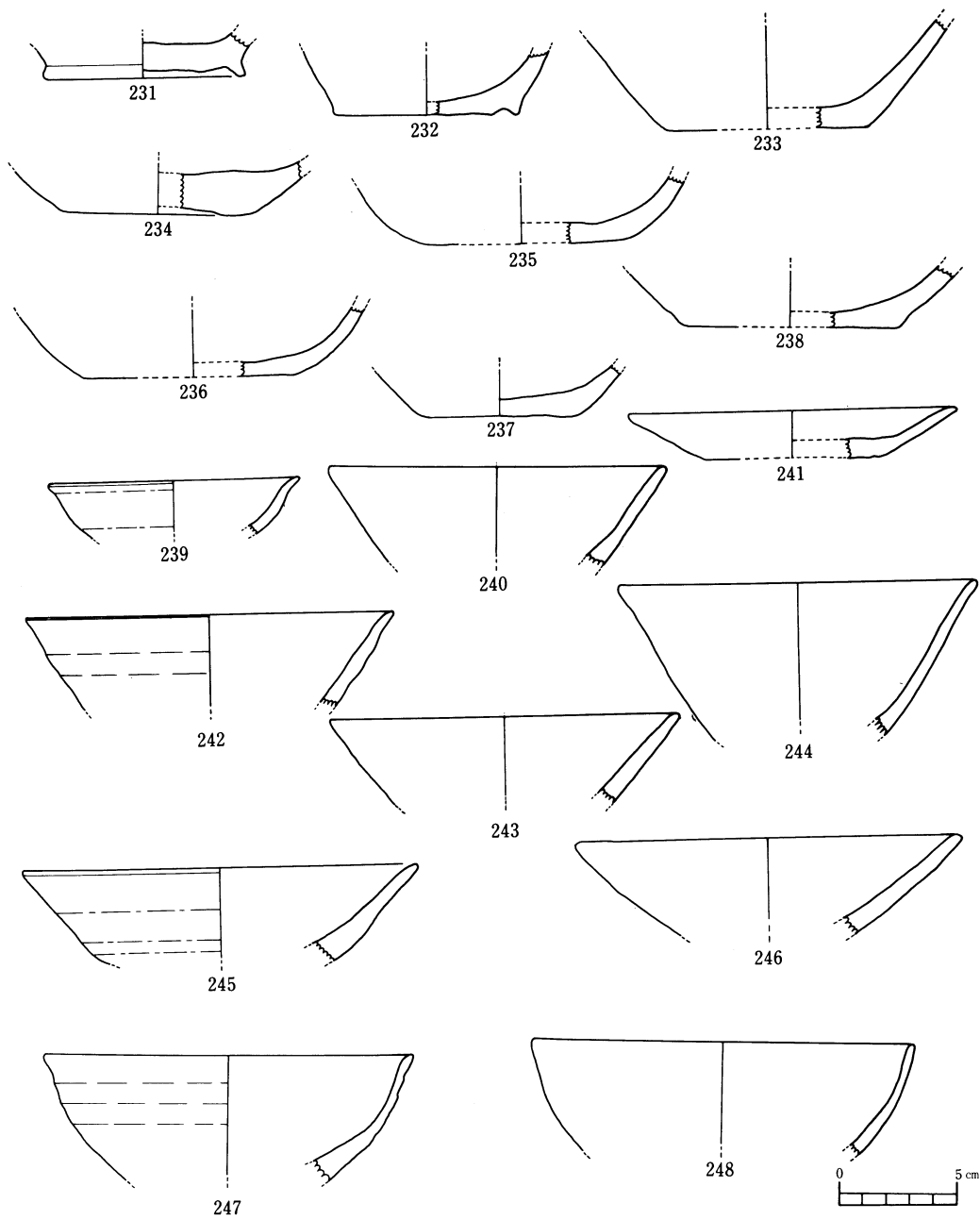
表7 内黒土器出土区・層一覧表

(単位cm)

番号	出土区	層	器形	番号	出土区	層	器形	番号	出土区	層	器形 その他
202	A-3, c-11	2	壺	218	A-II, d-5	溝	壺	234	A-II, g-13	2	坏
203	C-IV, k-15	2	〃	219	A-III, c-2	溝	〃	235	D-I, m-1	2	〃
204	G-I, f-14	3	〃	220	G-III, y-12	3	〃	236	D-IV, o-14	2	〃
205	G-III, y-11	2	〃	221	B-V, f-19	2	〃	237	D-I, m-2		〃
206	C-III, y-12	2	〃	222	G-I, y-13	3	〃	238	C-III, k-11	2	〃
207	A-III, b-33	2	〃	223	D-III, o-10	2	〃	239	B-III, g-11	2	〃
208	F-V, p-19	2	〃	224	F-IV, w-14	2	〃	240	採集		〃
209	C-II, i-8	溝	〃	225	A-II, d-7	1	〃	241	D-IV, n-13	2	皿
210	B-IV, 2-16	2	〃	226	A-V, b-17	溝	〃	242	F-IV, w-14	2	口縁 部片
211	D-IV, n-14	2	〃	227	F-IV, x-13	2	〃	243	R-IV, c-4	井戸	〃
212	F-IV, x-14	2	〃	228	A-III, b-13	2	〃	244	D-IV, m-15	ピット	〃
213	B-III, f-12	2	〃	229	B-IV, g-13	2	〃	245	C-II, l-5	2	〃
214	A-III, b-9	2	〃	230	C-IV, l-15	2	〃	246	D-III, o-12	2	〃
215	B-III, g-11	2	〃	231	F-IV, X-14	2	坏	247	B-III, b-12	2	〃
216	B-III, g-9	2	〃	232	G-I, y-14	3	〃	248	C-III, t-10	2	〃
217	A-V, L-17	3	〃	233	D-IV, N-16	2	〃				



第26图 内黑土器实测图 I



第27図 内黒土器実測図Ⅱ



6 墨書土器 (第28, 29図・図版15, 16)

墨書土器は19点出土した。出土地点はD-IV、n-15区に3点集中したほかは、統一性はなく、明確な遺構との関連をうかがわれるものもなかった。これは出土層(2層)は表層より深く、後世の攪乱をうけたことも起因したものである。

249は茶褐色の色調を呈する坏の胴部及び見込み面に肉太の行書で「仲家」と墨書する。胴部の「仲家」のうちイ扁が欠損しているが、見込み面の墨書と同一である。書体は「家」の字の字冠以下に特徴的な筆致を示す。

250~253は「原」と墨書する。250は口径16.2cm、器高5.6cm、底径6.6cmの大形の坏、胴部にやや小ぶりに「原」と墨書している。253~257は坏胴部に「雄」と墨書する。253は復元口径14.7cm、器高5.0cm、底径6.6cmの坏胴部にやや細字の墨書を記す。筆致は255と類似する。254及び253はやや肉太の筆致であるがいずれも達筆である。

258は口径11.3cm、器高4.6cm、底径5.8cmの深い小ぶりの坏胴部に「利」と墨書する。

259~262の墨書は残存部分が少なく判読できない。器形は坏が主体であるが、256は内黒土器、262は埴形の内黒土器である。263~266は表採資料である。

表8 墨書土器出土区一覧表

番号	出土区	層	器形	番号	出土区	層	器形 その他	番号	出土区	層	器形 その他
249	D-IV, n-15	2	坏	254	D-I, n-1	2	坏	259	C-IV, k-15	2	坏
250	D-IV, n-15	2	坏	255	D-III, m-11	2	坏	260	F-III, w-12	2	坏
251	C-III, l-10	2	坏	256	C-III, l-16	2	内黒土器	261	F-IV, v-13	2	坏
252	表面採集		坏	257	C-IV, t-16	2	坏	262	F-IV, x-16	2	内黒土器
253	D-IV, h-15	2	坏	258	B-V, f-14	2	坏				

7 刻書土器 (第29図・図版17)

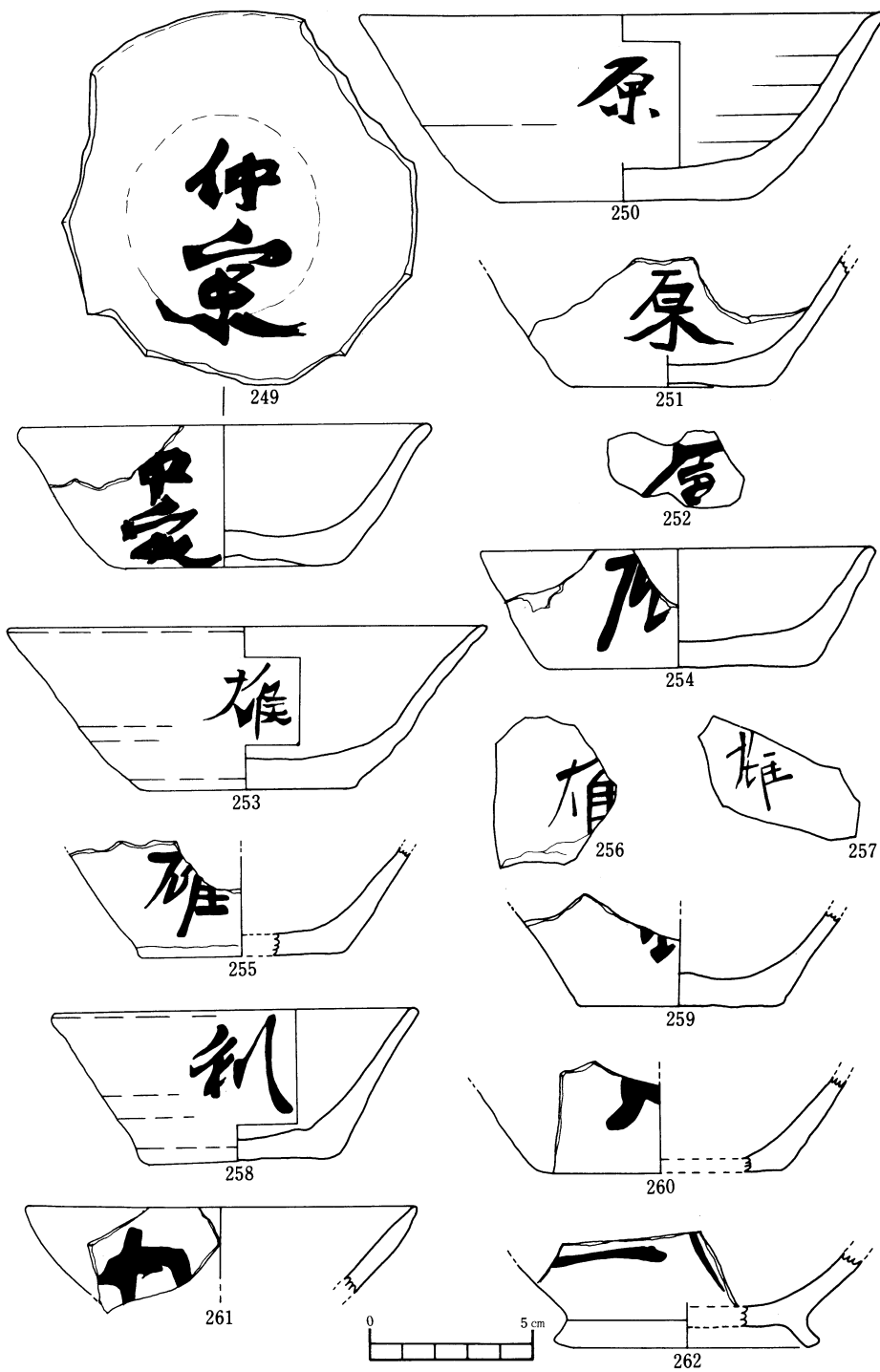
刻書土器は7点出土した。267は口径12.2cm、器高4.9cm、底径6.5cmを計る坏胴部に、ヘラ書きにより「仲家」と記す。1は口径12.5cm、器高3.8cm、底径6.2cmを計る坏で、見込みに267よりやや太く「仲家」と記す。井戸Iの埋土中に出土したものである。遺構より出土したものはこの1点である。いずれも焼成後に刻書され「家」に特徴的な筆致を示す。

268は見込みに「大伴」とヘラ書きによる刻書を残す。刻書部分はわずかに胎土が盛り上がった所も観察されるところから、焼成前の可能性もある。269は主要部分が欠損しているため判読は困難であるがイ扁から「伴」か「仲」家と推察される。270は緑釉陶器に針書きされたものである。第34図で詳述する。271は口縁部とは逆方向で刻書する「判」と読むか不明である。横位に「家」と読みとれ

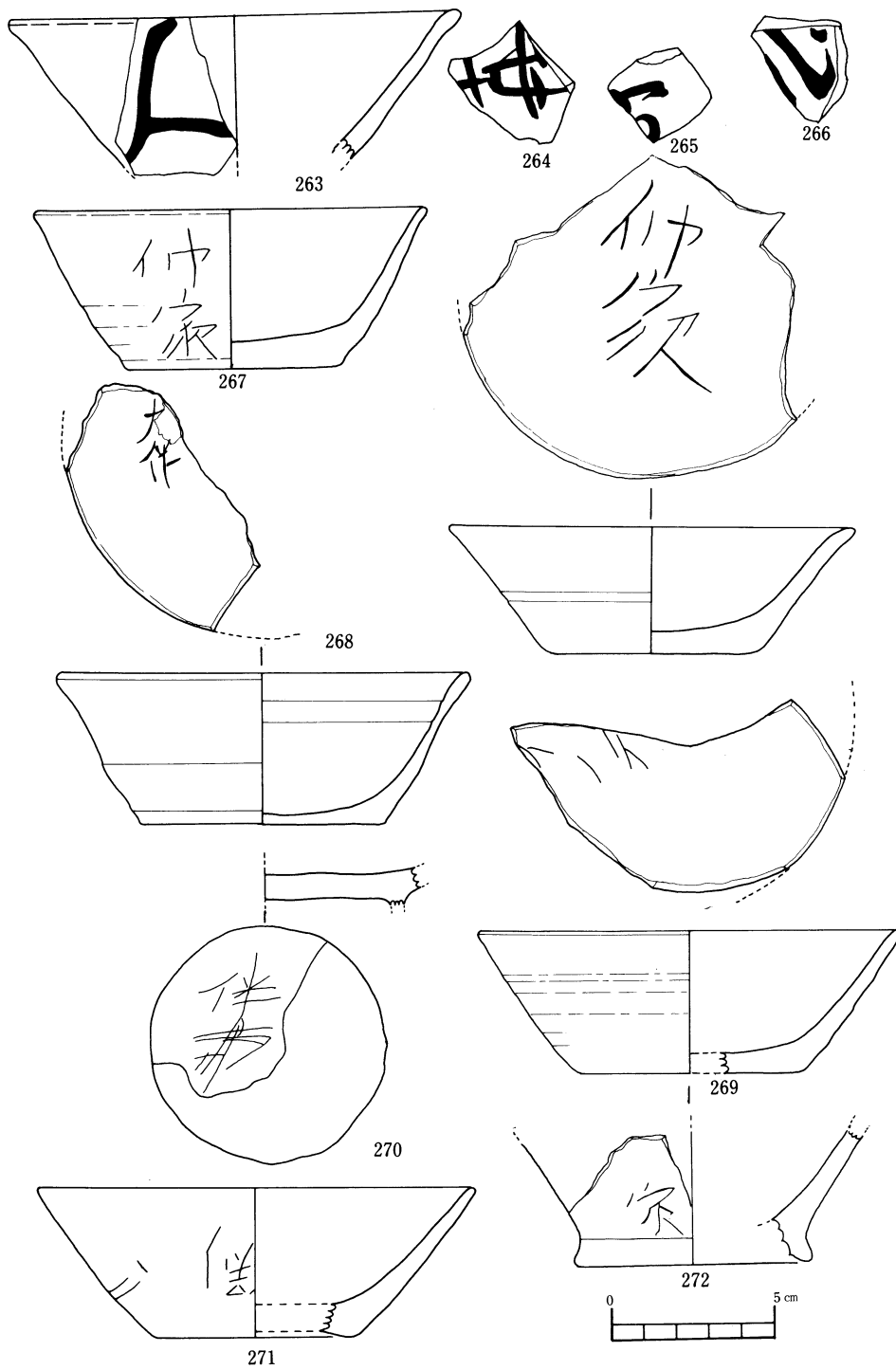
番号	出土区	層	器形	番号	出土区	層	器形 その他
1	E-III E-IV		井戸I埋土中 坏	270	B-III, l-12	1	緑釉陶器
267	E-V, t-15	2	坏	271	A-IV, g-14	2	坏
268	B-20, f-11	2	坏	272	G-I, v-14	2	内黒土器
269	D-III, n-11	2	坏				

るものがある。

表9 刻書土器出土区一覧表



第28図 墨書土器実測図I



第29図 墨書土器Ⅱ・刻書土器実測図

## 8 須 恵 器

### (1) 埴 (第30図・図版18)

273～276が埴の類である。272は口縁部、底部を欠損する。扁球形の胴部の最大径は 8.2cmを測る。器面は横ナデ調整である。274は平底で肩部が張る埴で器面は横ナデ調整である。257は底部である。ヘラおこしの底面は調整がなされず粗い。器面は横ナデ調整である。276の底面には「メ」のヘラ記号がある。

### (2) 瓶 (第30図・図版18)

18は口縁部が欠損するものである。平底からやや丸味をおびた器体は肩部で最大径を示す。器面は斜位の平行叩き目を施す。底部際は 2cm内外にわたりヘラでそぎ落したのち横ナデ調整を施す。内面は未調整のためおうとつが著しい。色調は外面が茶褐色、内面に濃い灰色を呈する。277は肩部で、外面に平行叩き目を施す。口縁部の接合が不十分なため内面に亀裂が走る278は外面に格子叩き目、底面に同心円状の叩き目を施す。内外面とも黒褐色を呈す。279は復元口径 11.3cmを測るもので、口縁部と頸部の境いに段が設けられ、浅い沈線が一条巡る。器面は横ナデ調整である。18は井戸 I 内より出土した。

### (3) 甕 (第30図・図版18)

280は復元口径30cmを測るもので、口縁部と頸部の境の稜の上位に巾広い沈線を一条巡らし外反して平坦な口唇部となる。下位には粗い波状文を一条巡らす。口縁部は横ナデ調整、頸部には平行叩き目を施す。口縁部には黒褐色の自然釉がかかる。282は復元口径30.5cmを測る。口縁部と頸部の境いは鈍く屈曲し、平坦な口唇部に外反する。色調は外面が黒色、内面は灰色を呈し、内外ともに横ナデ調整である。282は復元口径27.5cmを測る。口縁下はなだらかに弯曲する。色調は赤褐色を呈するほか、他は281と同様である。283は肩部内面に粗い同心円叩き目を施し、茶褐色の色調を呈する。

### (4) 壺 (第31図・図版18)

284は復元口径23.2cmを測る壺の口縁部である。短かい頸部と肩部の境より以下に縦位の平行叩き目を施す。内外ともに横ナデ調整で、色調は灰色を呈す。肩部内面には同心円叩き目を施す。285, 286はそれぞれ12cm, 24cmを測る。内外ともに横ナデ調整で灰色を呈する。

### (5) 耳付壺 (第31図・図版18)

290は復元底径17.5cmを測る平底に肩部の張った長胴がつく。肩部には扁平の耳が付く。外面は肩部より胴部にかけて平行叩き目が施されるが、底部付近及び肩部はヘラ削りで仕上げる。肩部から胴部にかけては自然釉がかかる。厚手の耳付壺である。289は外面に平行叩き目、内面に同心円叩き目を施す薄手のものである。287の内外面にはあめ色の自然釉がかかる。

### (6) 胴部片 (第32, 33図・図版19)

甕及び壺の胴部片を集成したものである。外面に格子目の叩き、内面に同心円叩き目、外面に格子目の叩き、内面に平行叩き目。外面に平行叩き目、内面に同心円叩き目。内外面とも平行叩き目の類がある。

外面の叩き目も幅の広狭がある。例えば290の格子目は0.5cm×0.7cmの長方形叩き目に対し293は0.4cm×0.3cm、303は0.3cm×0.3cmを測るもの等がある。

色調は灰色ないし灰色に近い褐色(291~297, 299~302, 305~308, 310~312)、茶褐色ないし赤褐色(303, 304, 309)、乳白色(298)を呈するものなどがある。

焼成は一般に良いが、298はやや軟質に焼ける。

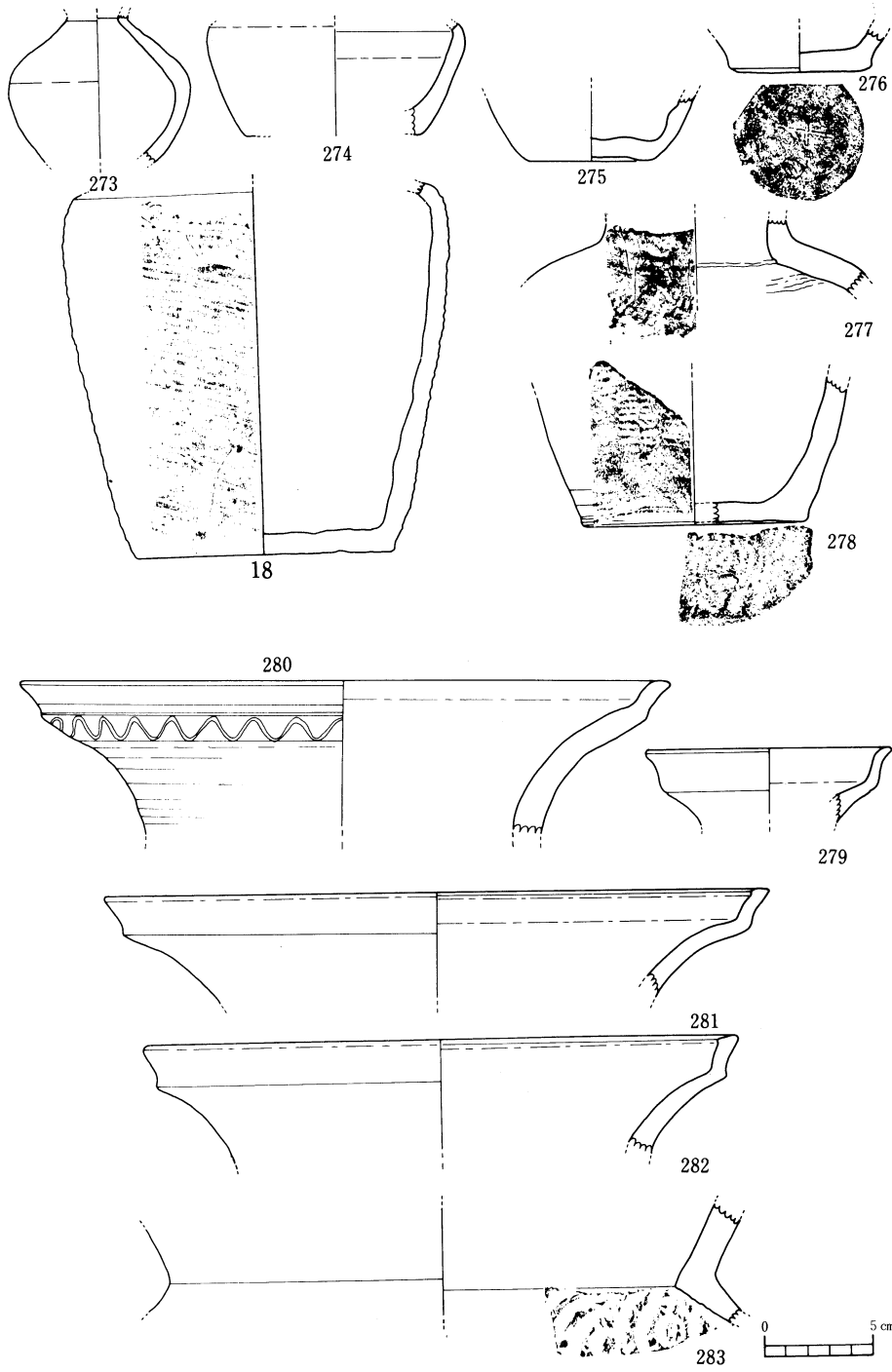
(7) 底部(第34図)

313は復元底径10.2cmを測り低い高台をもつ。器面は横ナデ調整し、色調は灰黒色を呈す。高台内は黒色の自然釉がかかる。314は復元底径9.8cmを測り、わずかに外反する低い付け高台をもつものである。色調は灰色で内外面とも横ナデ調整している。315は復元底径6cmを測り、直立する低い付け高台を有する。

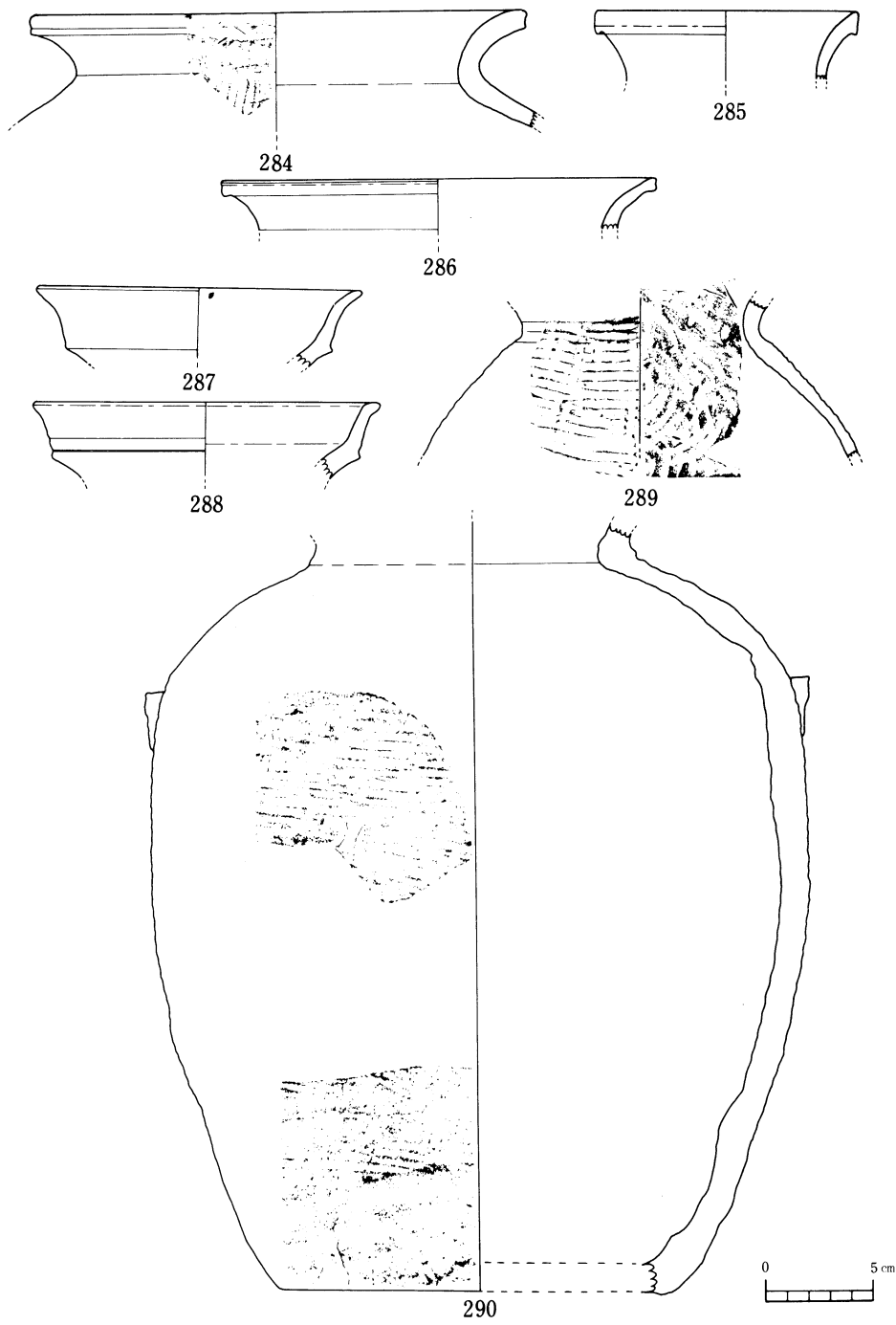
316~320までは平底である。いずれも横ナデ調整であるが317を除き仕上げは粗い。

表10 須恵器出土区一覧表

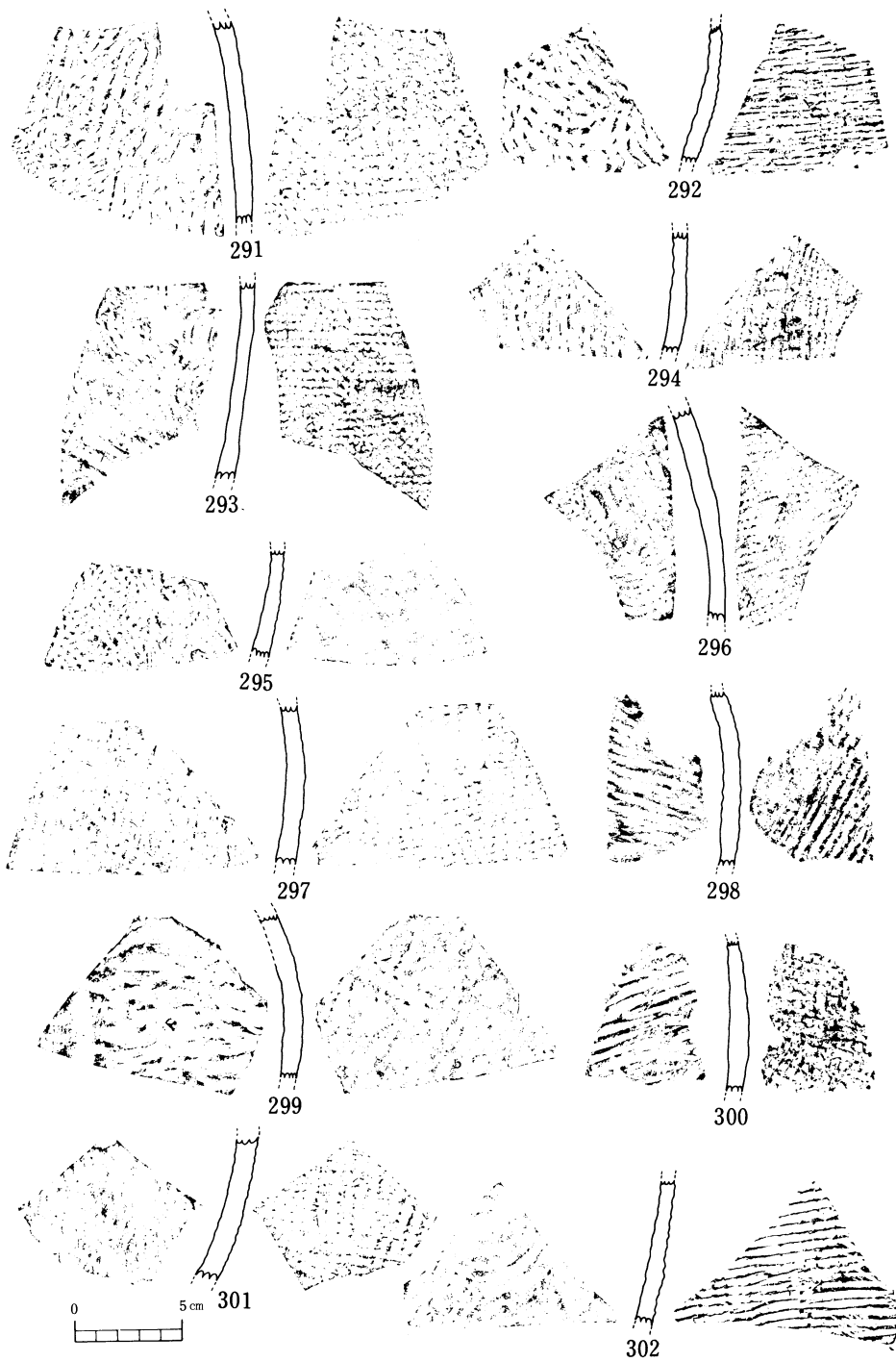
番号	出土区	層	器形	番号	出土区	層	器形 その他	番号	出土区	層	器形 その他
273	C-III, j-2	ミゾ	埴	290	B-II, g-8	2ピ ット	耳付壺	307	F-II, W-5	6	(胴部片)
274	E-V, q-17	9	〃	291	D-IV, (P10)II-9	1	(胴部片)	308	C-III, b-12	2	〃
275	B-II, g-6	ミソ内	〃	292	C-III, i-10 i-11	の間の カベ	〃	309	D-IV, p-15	2石中	〃
276	F-III, f-10	2	〃	293	C-II, l-11	2	〃	310	C-IV, i-13	2	〃
277	A-III, c-2	ミソ中	瓶	294	A-IV, a-13	II	〃	311	A-III, b-7	2	〃
278	B-II, h-8	2	〃	295	A-II, 2-5	2ピ ット	〃	312	C-III, h-12	2	〃
279	A-III, a-10	2	〃	296	C-IV, l-13	2	〃	313	I-III, n-11	2	(底部)
280	G-III, z-10	基盤	甕	297	F-III, x-11	2	〃	314	C-IV	2	〃
281	A-III, c-11	2	〃	298	F-II, x-12	2	〃	315	C-III, l-11	1下	〃
282	C-III, k-12	2	〃	299	F-IV, x-14	2	〃	316	A-V, l-17	1	〃
283	D-IV, p-15	2	〃	300	E-V, Q-17	1下	〃	317	D-I, n-1	2	〃
284	G-IV, y-14	3	壺	301	B-IV, g-13	2	〃	318	F-III, x-11	2	〃
285	C-IV, k-16	2	〃	302	B-III, f-11	2	〃	319	F-IV, x-13	2	〃
286	E-V, t-18	2	〃	303	C-III, h-9とk	1との 間カベ	〃	320	B-IV, g-10	ミソ	〃
287	D-V, m-17	ピッ ト中	耳付壺	304	D-III, m-12		〃				
288	A-III, b-12	I	〃	305	G-III, z-10	4下	〃				
289	A-III, c-9	2ミ ソ上	〃	306	B-III, c-10	2	〃				



第30図 須恵器(埴・瓶・甕)実測図

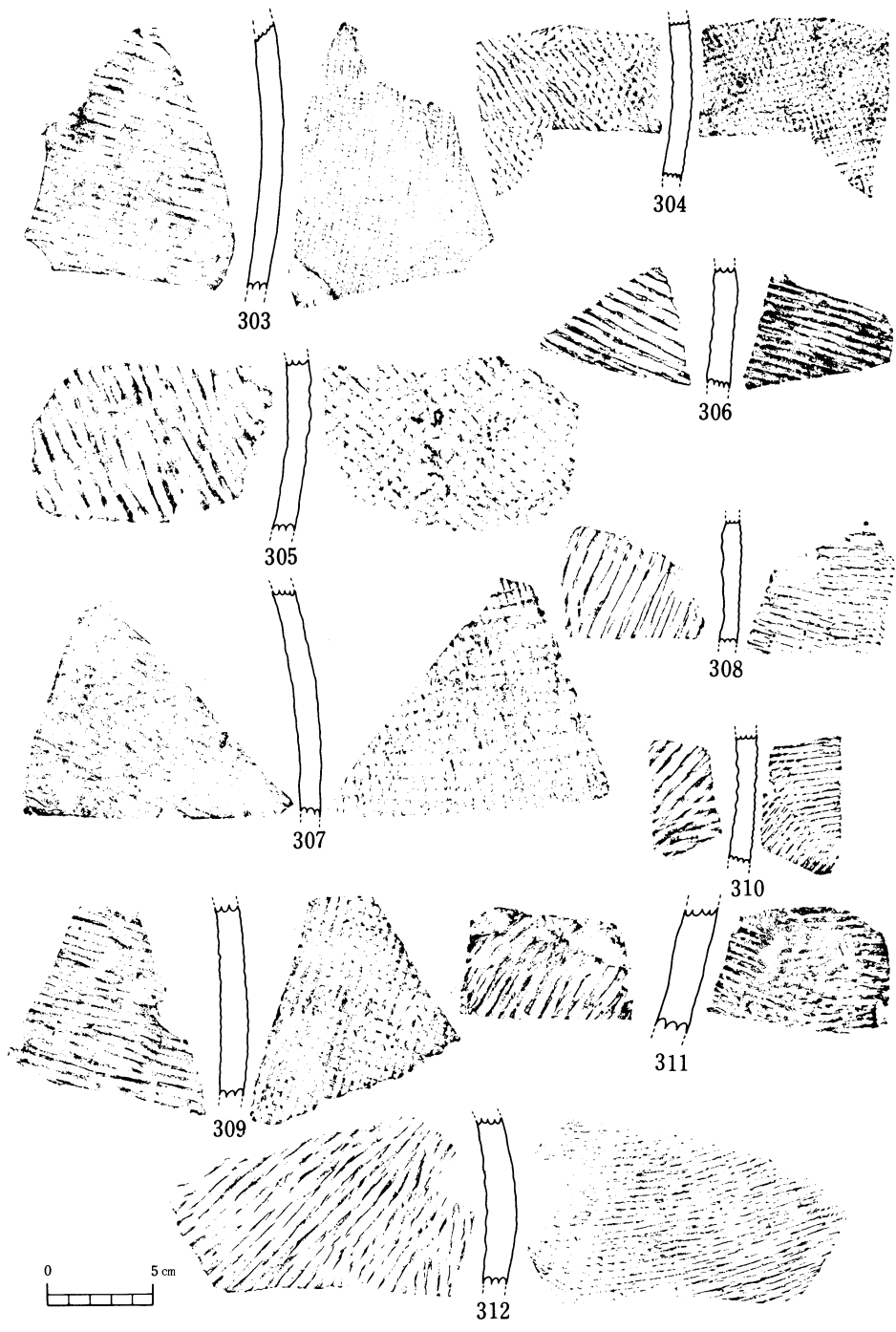


第31図 須恵器(瓶)実測図

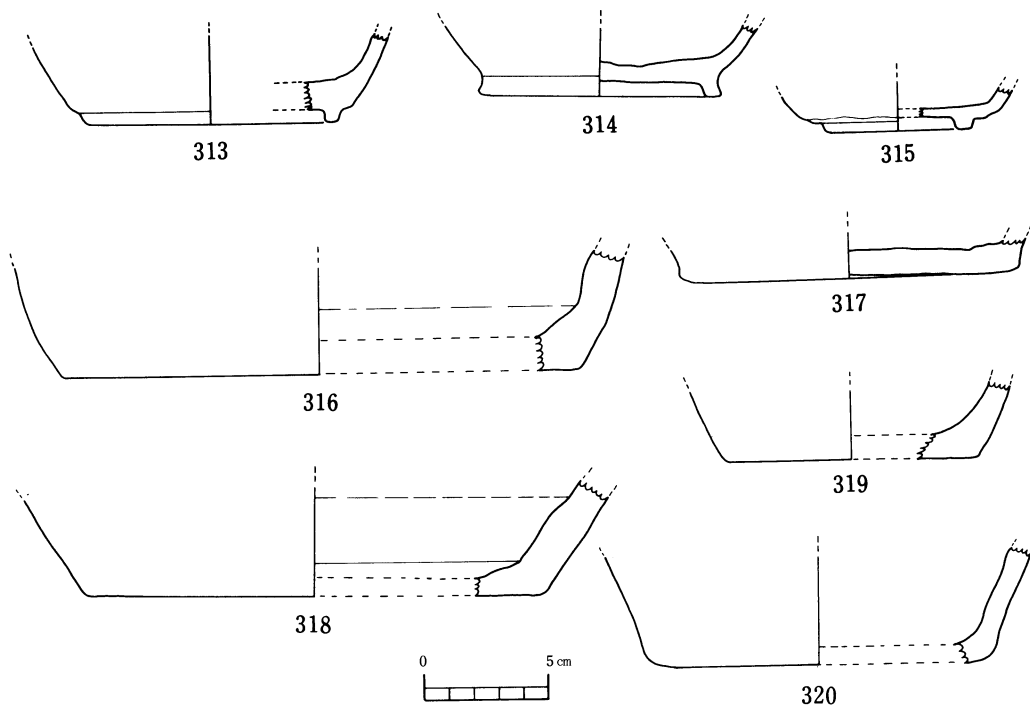


第32図 須恵器拓影





第33図 須恵器拓影



第34図 須恵器（底部）実測図

9 青磁・白磁（第35図・図版20）

中国産青磁には越州窯系、竜泉窯系、白磁は荊州窯系のもので出土した。

15は底径 4.3cmを測る蛇目高台の越州系碗である。釉は高台にまばらにかかるほかは全てかかり内外面とも貫入がみられる。高台には白砂の目あとが4ヶ所みられる。329は越州窯系で高台をもつ皿である。322, 323も越州窯系碗である。

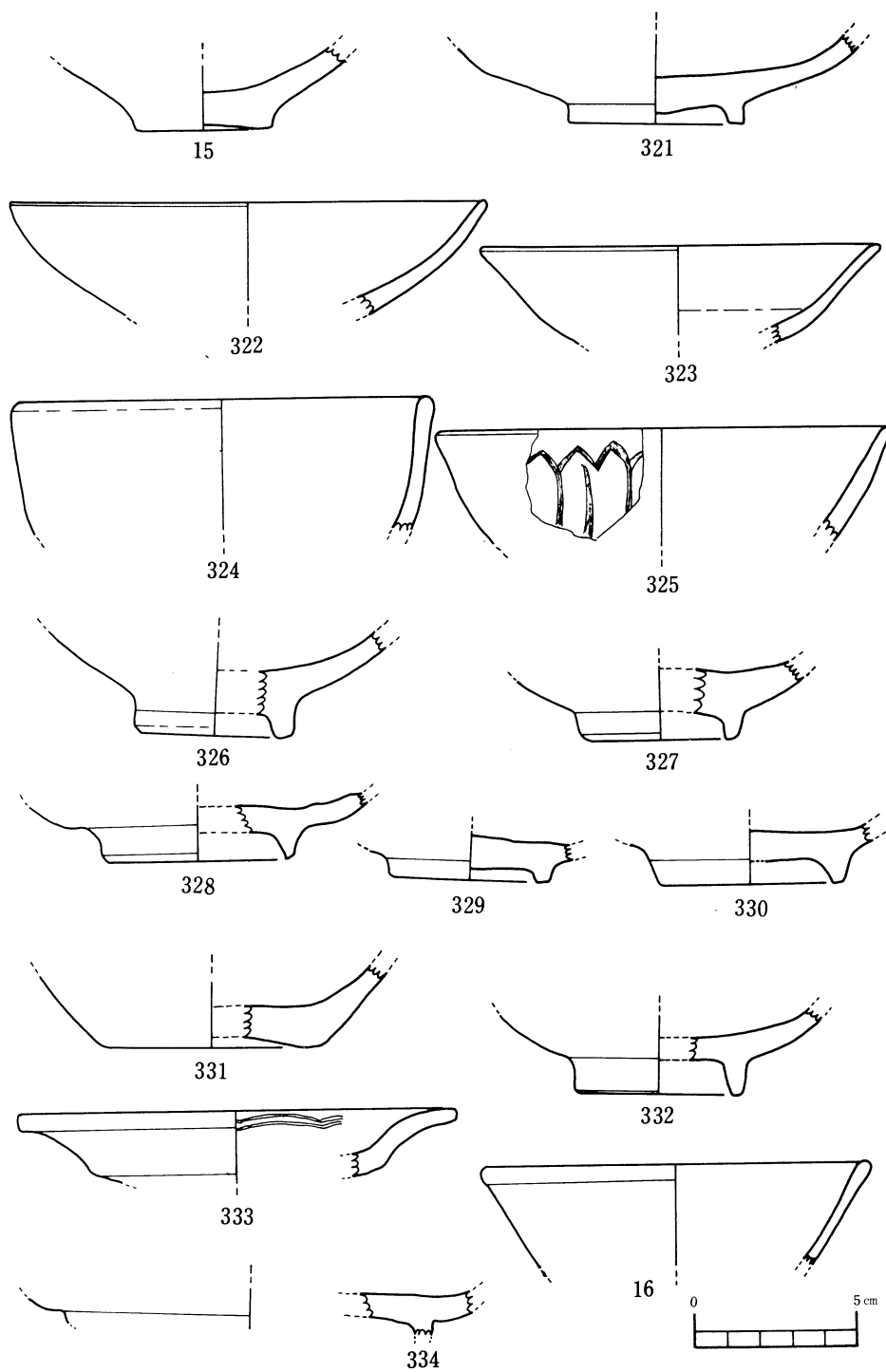
324~334までは竜泉窯系青磁で、325は復元口径14.1cmを測る碗で、器面には退化した蓮弁文が描かれ、粗い貫入が内外面にみられる。328~333は皿、334は盤である。

333は復元口径13.5cmを測る稜花皿で、口縁部内面には2条の波状文、下位には1条の唐草文が描かれる。粗い貫入もみられる。334は見込み及び高台内を除き釉がかかり貫入は粗い。

16は復元口径12cmを測る荊州窯系白磁である。口縁部は玉縁状となり薄手のつくりで、釉はうすくていねいにかかる。井戸I内より出土した。

表11 青磁・白磁出土区・層一覧表

番号	出土区	層	番号	出土区	層	番号	出土区	層	番号	出土区	層
15	D-IV・井戸の内		324	E-II, r-5	ピット	328	B-IV, g-14	2	332	E-IV, B-11	2
321	B-V, e-17	3	325	E-V, t-17	2	329	B-V, h-17	1	333	E-II, g-8	2
322	採集		326	F-III, IV-10	2	330	F-IV, V-16	2	334	E-II, S-6	2
323	c-IV, l-16	2	327	b-III, m-9	2	331	O-III, p-15	2	16	井戸I	

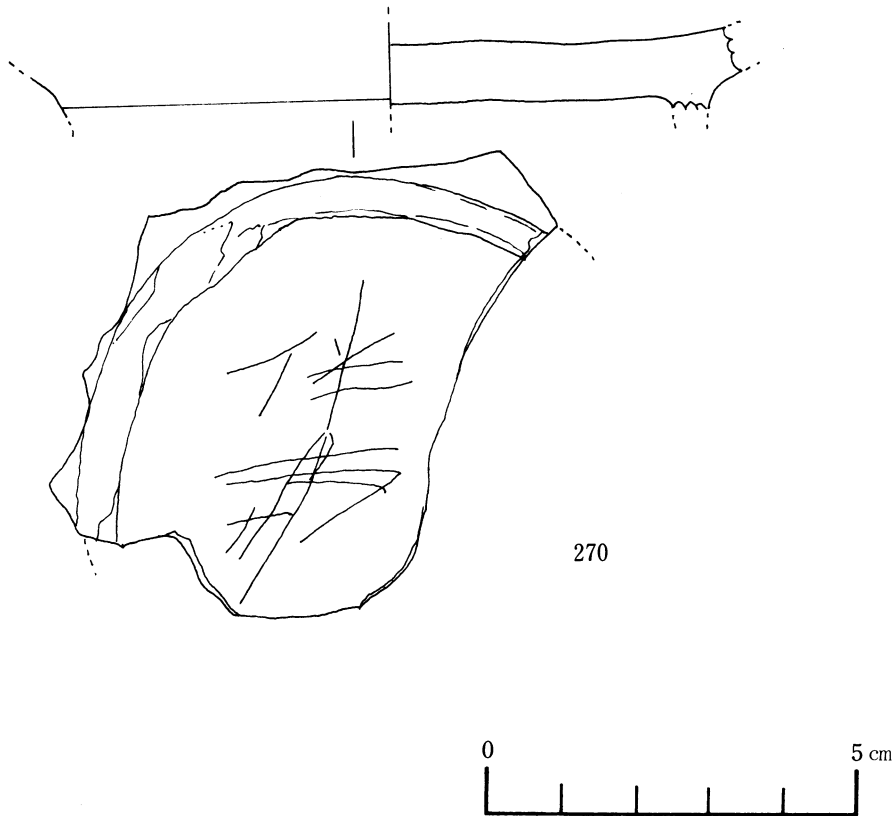


第35图 青磁·白磁实测图

## 10 緑釉陶器 (第36図・口絵)

B-III、e-12区表層中に出土した高台付皿である。

高台部を欠損するが、残存部の観察によれば低い高台と思われる。胎土は白色で軟質の土師系瓦質に焼ける。内外面とも緑釉が施されているが、内面は退色し土色を呈す。内底はうすく緑色がかかり、高台には釉はかからない。内底には緑釉のうえから「伴家」と針書きする。



第36図 緑釉陶器実測図

## 11 その他土器 (第37図・図版20)

その他の土器にはすり鉢、羽釜、天目、ふいご口、薩摩焼がふくまれるほか、図示できない小片の滑石製石鍋がある。

336は復元口径27cmを測る備前焼すり鉢である。あまり下方に拡張しない口縁部には一条の沈線が巡る。内面のかき目は肥厚した口縁部下に5条みられるが先端部のために確かな本数は不明である。色調は赤みが強い茶褐色を呈する。337は瓦器質の羽釜である。胴部に付くつば状凸帯の下方には媒が付着する。つば状凸帯の復元径は25. cmを測る。338及び339は薩摩焼碗である。見込みには重ね焼の痕がみられ338には茶色釉のあとに白濁釉がかかる。339の釉

は熔けきらず凹凸が著しく胎土も軟質である。

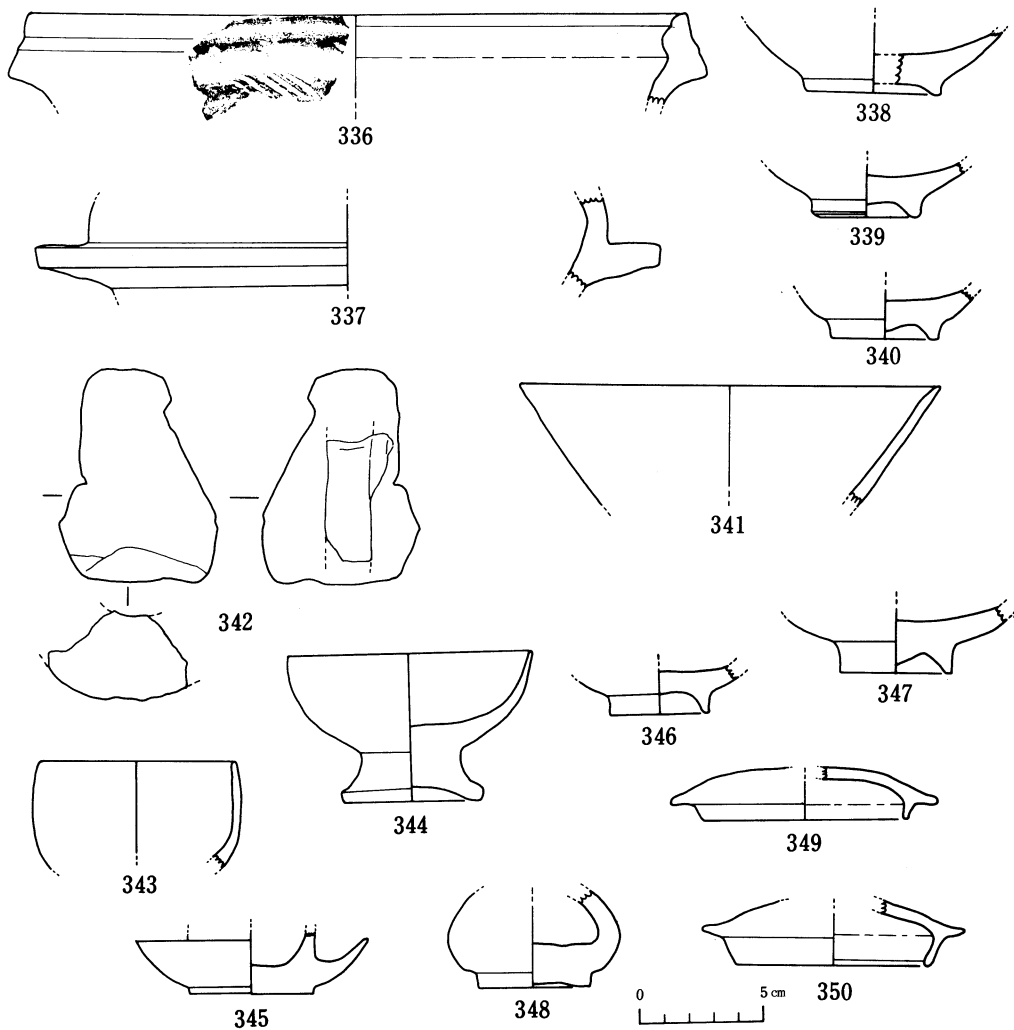
340 は天目碗の底部である。灰色の胎土に黒釉は高台際まで厚くかかる。高台は兜巾状である。341は茶褐釉がかけられるが下位には土見せを行う。微細な貫入は内外面ともはいる。

342 は土師器のふいご口である。破片であるため全体は不明であるが、中央孔がわずかに認められる。

343、348 は黒釉がかかり、343は猪口、348は糸切底をもつ茶入と思われる。窯は不明。

344、345、347 は褐釉を施すものでそれぞれ脚付杯、猪口受け台、碗であろう。窯は竜門司窯（鹿児島県姶良郡加治木町）であろう。346は白薩摩焼で内外面とも微細な貫入がある。

349、350 は黒薩摩焼系の苗代川窯の茶家蓋である。



第37図 その他土器実測図

## 第2節 鉄製品 (第38図・図版21)

鉄製品及び鉄片は多数出土したが、形状の判明するものは図示したものにすぎない。ほかに鉄滓も出土した。

351～353は刀子である。

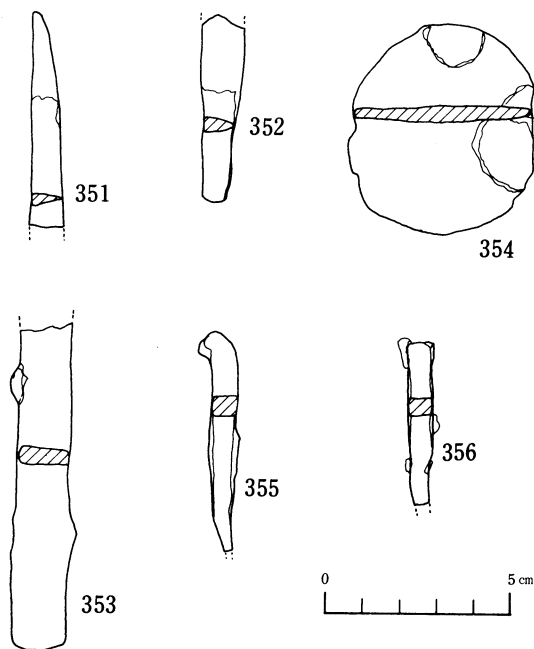
351は基部が欠損しているもので現存長6cm、身幅1cm、棟厚0.4cmを測る。鋒はふくら付きで細身の刀子である。

352は基部で現存長5cmを測る。茎尻は銹のため明確にはいえないが栗尻に似る。区部も不明である

353はやや大形の刀子で現存長8.6cmを測り、茎尻は栗尻となる目釘穴は不明である。

354は長径5.8cm、短径5cmの正円に近い楕円状をした、厚さ0.4cmの鉄製品である。用途は不明である。

355、356は断面矩形の角釘で長さはそれぞれ6cm、4cmを測る。いずれも頭部を折り曲げて頭とする。



第38図 鉄製品実測図

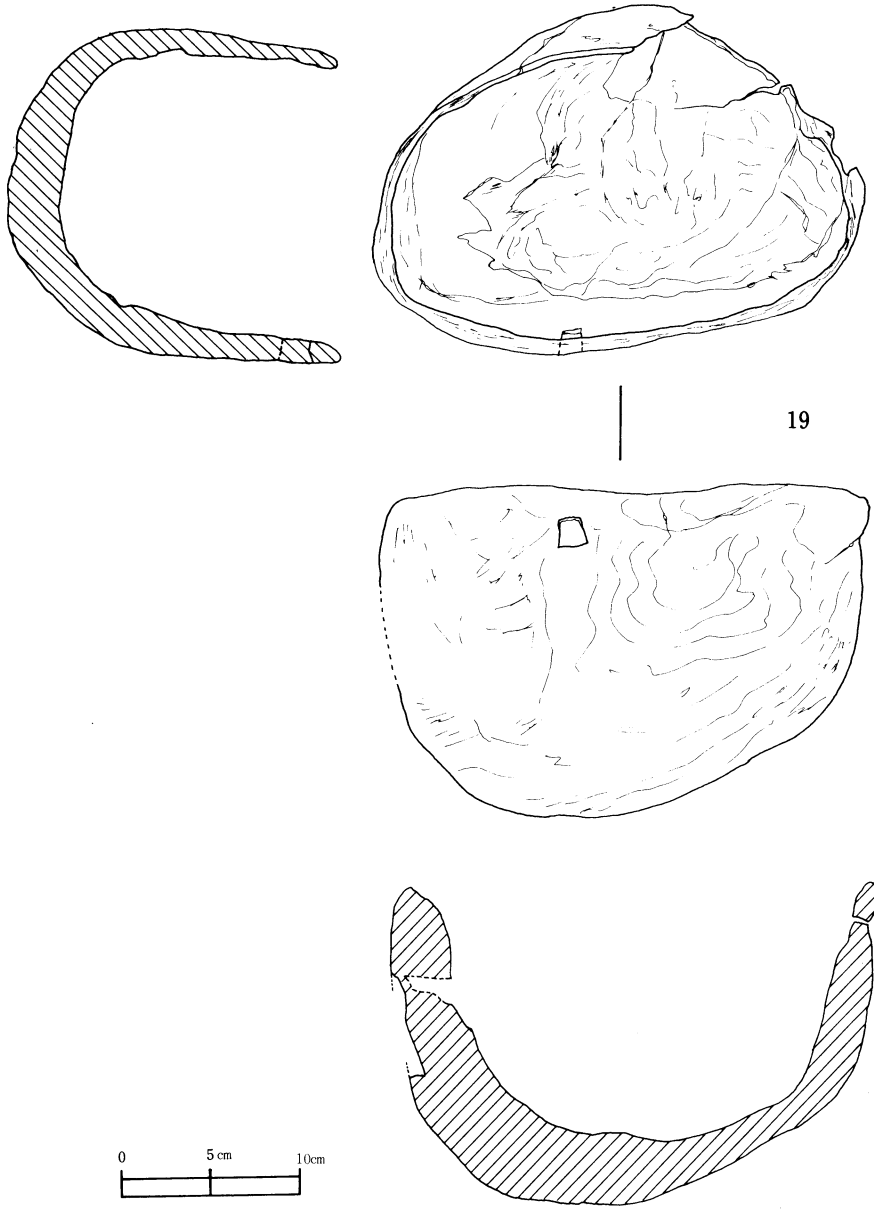
## 第3節 木製品 (第14、39図・図版21)

木製品には井戸I内より出土した井戸枠1対及び、同井戸出土の木製容器1点がある。

井戸枠は直径70cm程の広葉樹を半截し中心より表面にかけてくり抜き半円の枠を造り出す。

木表を基に木裏を上を用いる。1本の基は弯曲した木姿を活かし突起を作る。先端部は朽ちて全長は不明であるが、現存長は1m、0.98mをそれぞれ測る。

木製容器は長径26cm、短径17cmの平面形楕円、深さ17.5cmを測るものである。木目は曲線を呈することから木のこぶを使用し、内部をくり抜いたものと思える、測面には15cmの略台形の孔を穿つ。対面の孔は欠落して不明だが、おそらく対に孔をあけ、ひもか棒状のものを渡し、水汲み容器として使用したものであろう。



第39図 木製容器実測図

第4節 土 錘 (第40、41図・図版22)

土錘は29点出土した。土師質に焼けているが、灰色を呈するものもある。

形態は紡錘状26点、双孔棒状3点である

紡錘状土錘は中央部がふくらみ、両端がすぼまる形のもので、長径軸の中心部に孔を穿つ。

両端は切断したもののほか、丸くおさめているものも見られ一定しない。孔はほぼ一定方向から穿ち、両端からのものは見られない。

器面は指頭による整形である。土錘は長軸3cm～5.9cm、中央部最大径1.5cm～2.9cm、重さ7g～28gの範囲におさまる。しかし374、382のように小形のもの少数出土した。

双孔棒状土錘は3点であるが、いずれも一端が欠損し全長は不明である。短矩あるいは円形の断面をなし、両端に0.5cm内外の孔を穿つものである。

357～370までは灰色を呈する紡錘状土錘である。このうち357は出土土錘のうち大形のもので長径5.9cm、短径2.9cm、重さ28.4gを測る。孔も大きい。表面は凹凸が著しく不整形が見だつ。孔は一端から穿つためいき違いが無い。371～383は土師質を呈する紡錘状土錘である。製作技法は前述の土錘である。これらのうち374は長径3cm、短径1.9cm、重さ7.05gを測る小形のものである。

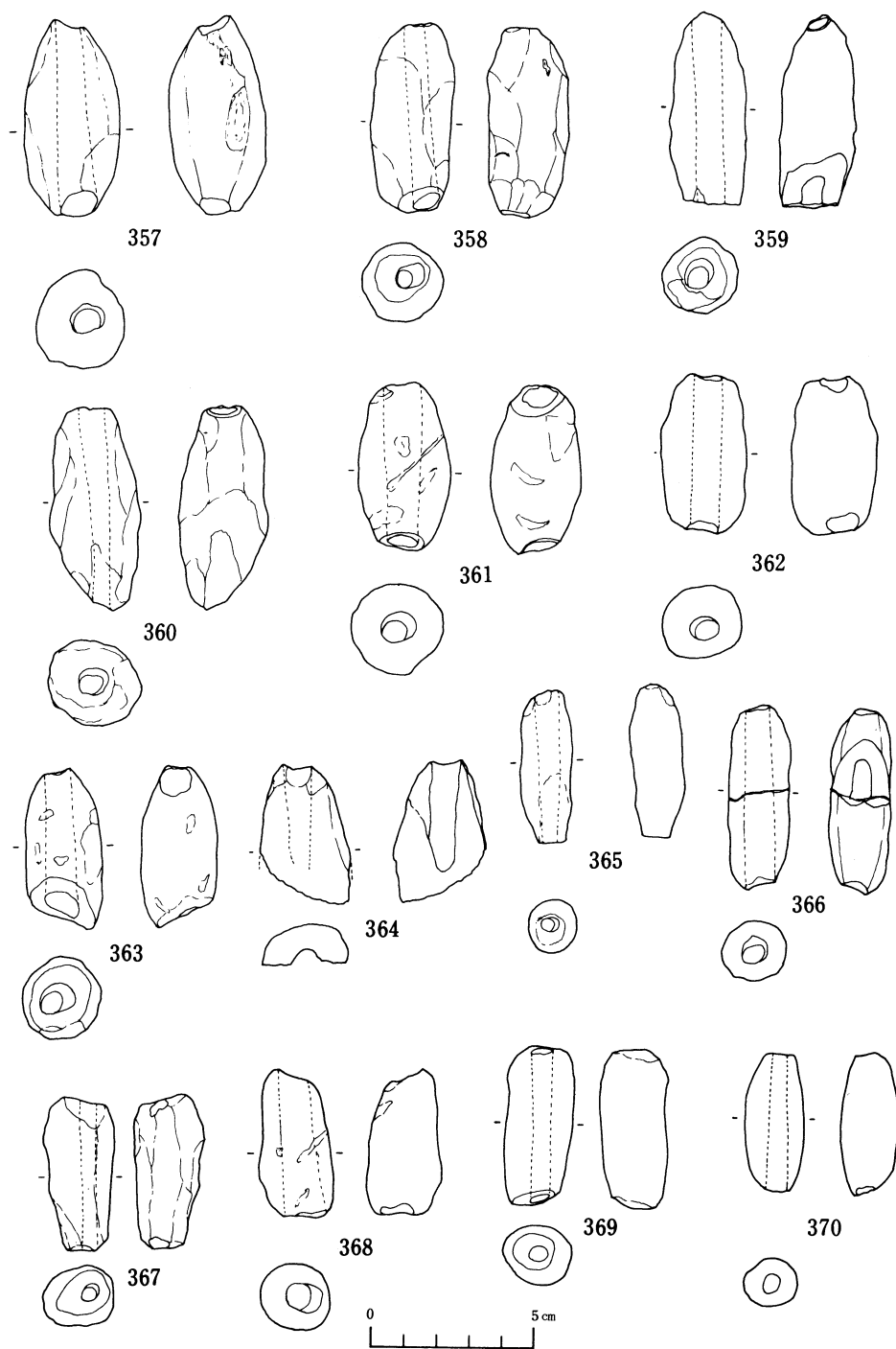
383～385は双孔棒状土錘であるが、いずれも一端が欠損し全長は不明である。このうち383は現存長5.5cmを測る。中央部は断面が円形に近いが、両端は扁平にして整える。孔はこの両端部にそれぞれ一個穿つている。色調は乳白色に近く胎土、焼成ともに良い。

番号	出土品	層	全長	径	重さ(g)	番号	出土品	層	全長	径	重さ(g)
357	B-III, e-9	ピット	5.9	2.9	28.4	373	B-V, f-17	I	3.9	2.3	11.4
358	B-III, f-9	2	5.8	2.5	23.5	374	採集		3	1.9	7.05
359	B-IV, f-13	2	5.9	2.4	20.75	375	B-III, e-12	2	5.3	2.3	17.55
360	E-II, t-i-1-20		6.2	2.8	22.	376	B-II, g-5	2ミゾ	4	2.1	10.95
361	B-III, l-12	1	5.2	2.9	22.9	377	B-III, e-10	1	3.9	1.8	9.55
362	C-IV, e-13	2	4.9	2.6	21.4	378	D-III, p-9	2	3.6	1.6	7.2
363	E-III, k-11	2	5	2.4	17.2	379	C-III, l-17	ミゾ中	4.5	1.9	7.25
364	B-III, l-12	2	4.3	2.8	7.2	380	C-V, i-18	3中	3.6	1.9	5.9
365	A-IV, a-14	2	4.6	1.5	8.05	381	採集		4	2.2	13.7
366	B-III, b-8	2	5.7	1.9	11.55	382	C-III, j-12	2	2.7	1.8	6.7
367	C-III, l-11	ミゾ	4.9	2.2	12.75	383	A-III, a-10	2	5.6	1.2	10.7
368	B-II, g-8	2	4.5	2.3	12.5	384	採集		2.5	1.6	4.7
369	B-III, f-10	2	4.9	2.1	15.7	385	B-III, f-10	1	3	1.5	6
370	B-4, e-13	2	4.2	1.8	12.05						
371	B-II, g-8	2	5	1.1	14.4						
372	A-II, b-6		5.3	2	15.5						

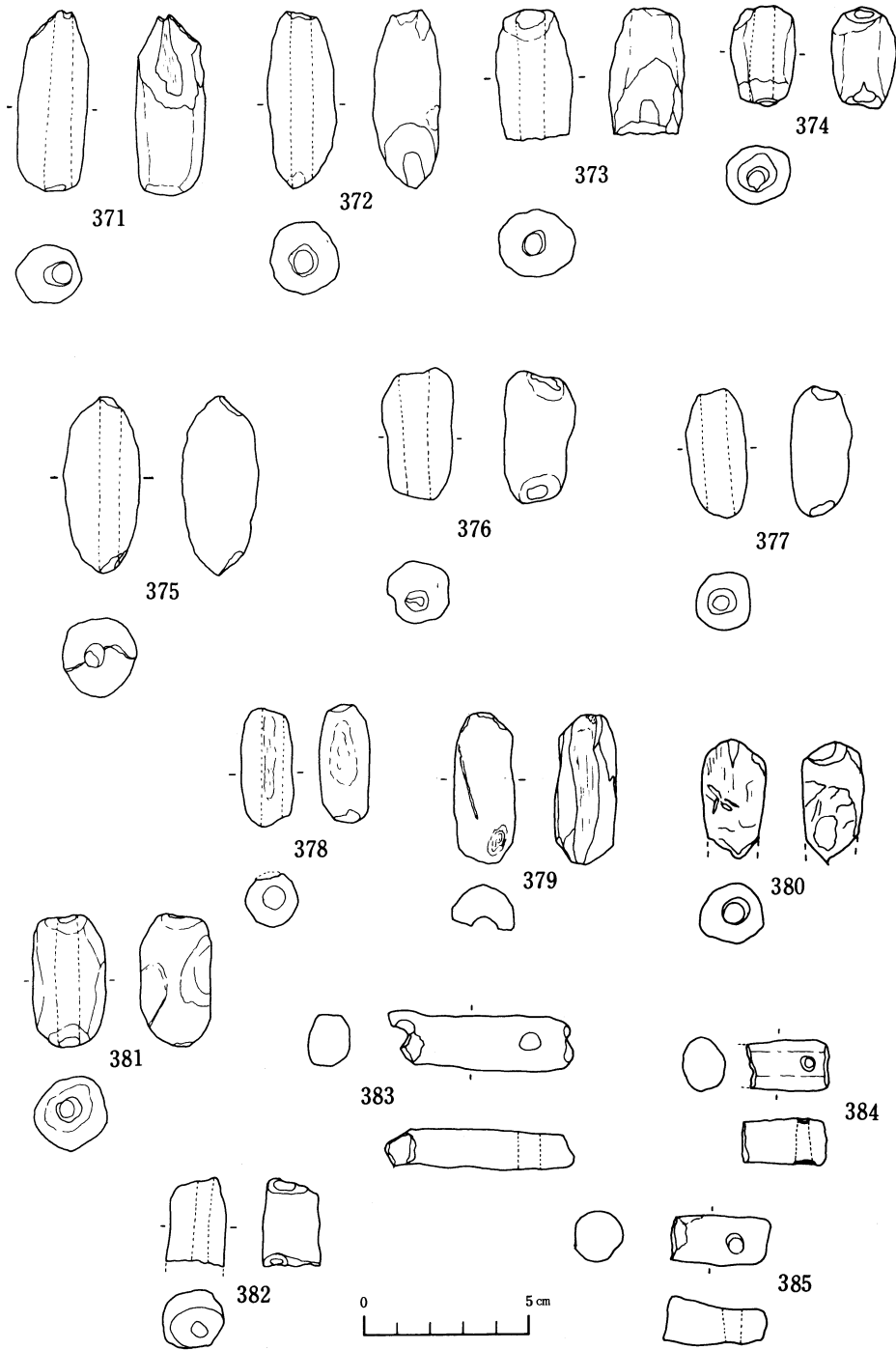
表12 土鐘計測表

(単位cm)





第40図 土錘実測図 I



第41図 土錘実測図Ⅱ

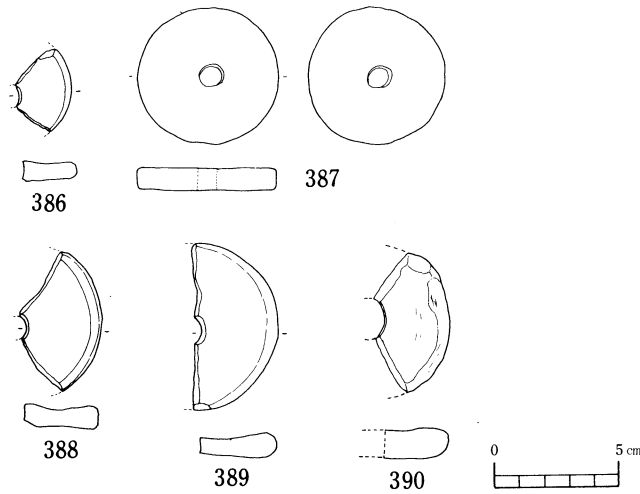
第5章 紡錘車 (第42

図・図版23)

紡錘車は5点出土した。

このうち完形品は 387のみで他は破片である。

一見すると土師器坯の底部を再利用したものにみえるが、中央の穿孔部、周縁のヘラあるいは指頭による器面調整は、明らかに焼成前であることがわかる。このうち 387は径5.6cm、厚み0.9cmを測る正円で、中央部に径0.8cmの穿孔がある。土師質で表面はていねいなナデ仕上げである。他は一部を欠損するが、製作技法は同一で復元径等は表示したとおりである。



第42図 紡錘車実測図

表13 紡錘車計測表

(単位cm)

番号	出土区	層	径	厚み	色調	番号	出土区	層	径	厚み	色調
386	F-I, V-V-13	2	5	0.8	茶褐色	389	B-IV, h-15	2ピット	6.8	1	茶褐色
387	D-V, P-8	2ピット	5.6	0.9	〃	390	A-III, a-b-11	2ミノ中	7	1.2	〃
388	A-II, C-8	2	7	0.9	〃						

第6節 瓦 (第43~46図・図版7, 23, 24)

瓦は遺跡全体から出土したが少片が多く実測可能なものは少量であった。種類は平瓦が圧倒的に多く、少量の丸瓦を含み、軒丸瓦、軒平瓦等は皆無であった。叩目も縄目叩文が主体で格子目叩文は数点にすぎない。

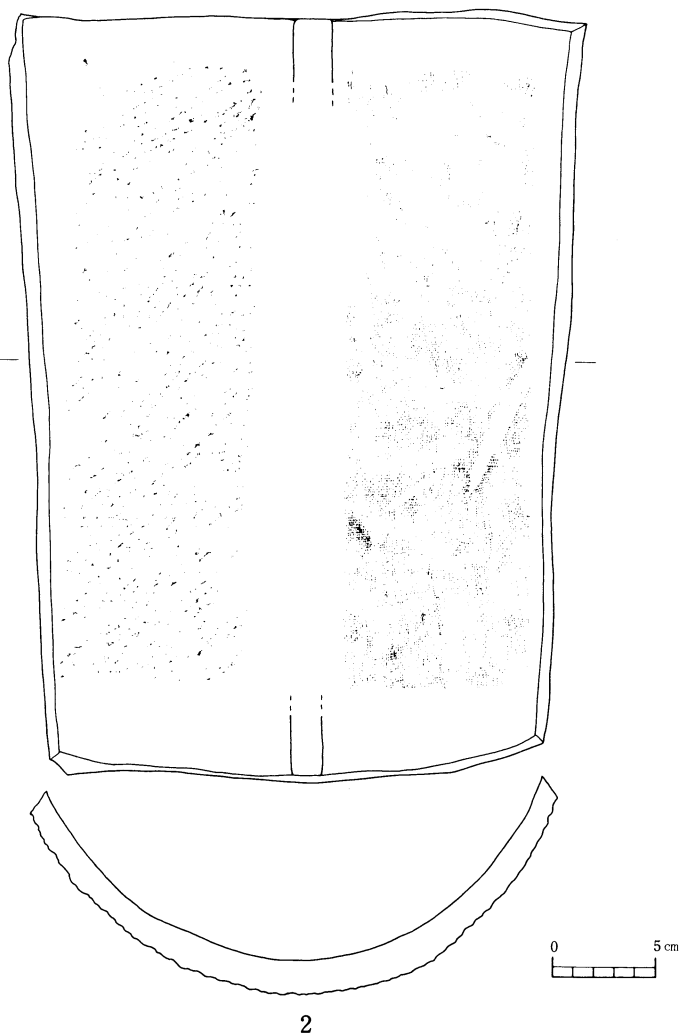
なお小瀬戸遺跡の北東・約1kmの位置に12基を数える宮田ヶ丘窯跡が所在し、本遺跡の出土瓦と類似するため採集品を掲載した。2は出土瓦のうち唯一の完形品で井戸I内より出土したものである。長さ37.5cm、最大幅27.5cm、最小幅23.9cmを測る平瓦である。両側縁はヘラによりそぎ落し調整する。瓦の表にみる布目は1cm<sup>2</sup>に経8本偉10本を数える。瓦の裏面は縄目叩文がみられる。瓦の弯曲により計り出した直径17.5cmでほぼ半円である。2~394, 397~403までは平瓦で、裏の叩文は402の格子文を除き縄目叩文である。391は側縁を調整し二面を作り出す

薄手の平瓦である。402は格子目叩文の平瓦である。他の平瓦の布目は1㎡に経10本～11本、緯9本～10本がみられる。404～406は丸瓦で縄目叩文を表に、裏に布目文がみられる。

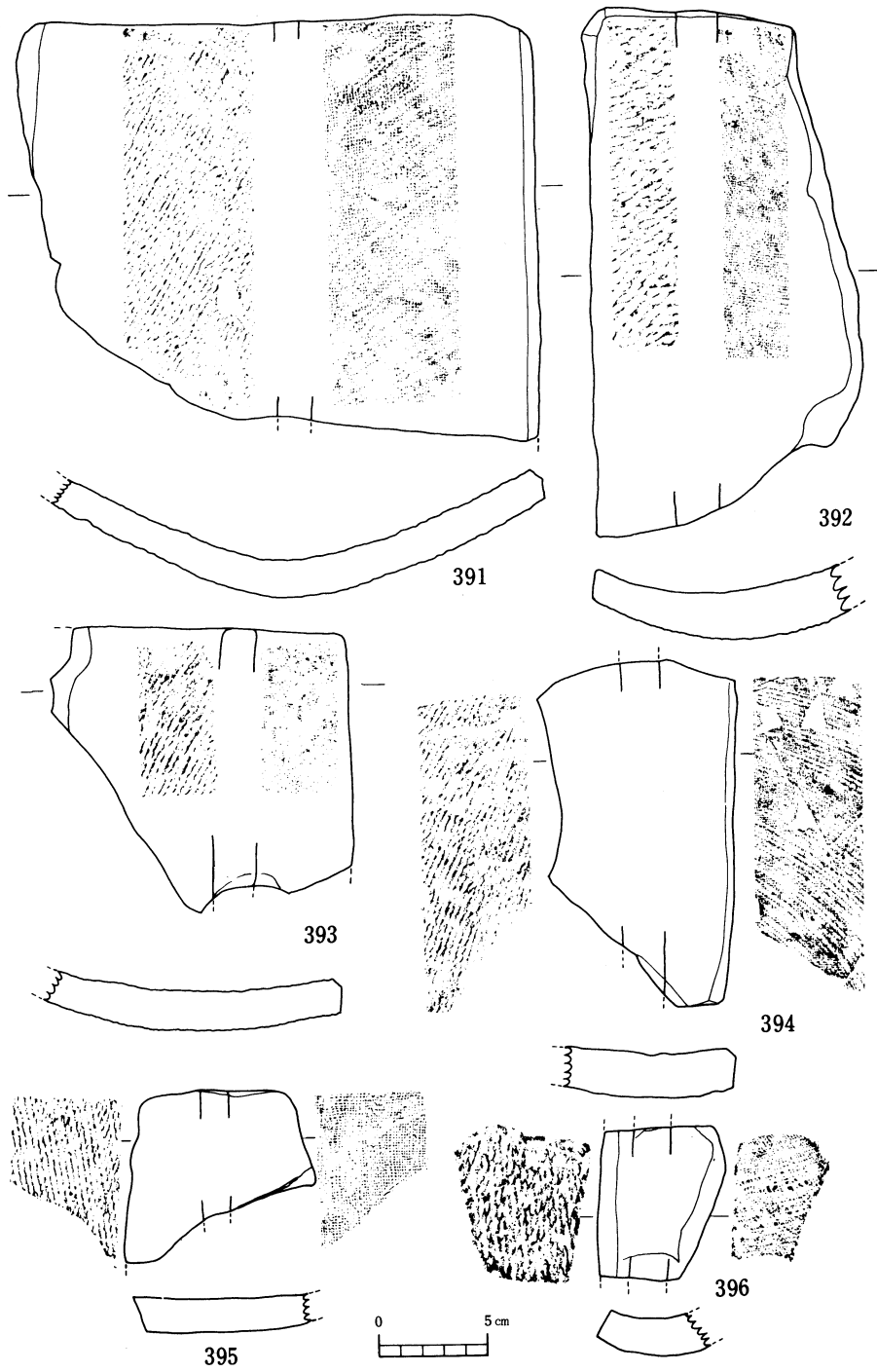
407～409は宮田ヶ丘窯跡採集品で407は格子目叩文を裏に、表には布目がみられる。採集品のため一般的ではないかもしれぬが、厚手のものが多い。

表14 瓦出土区一覧表

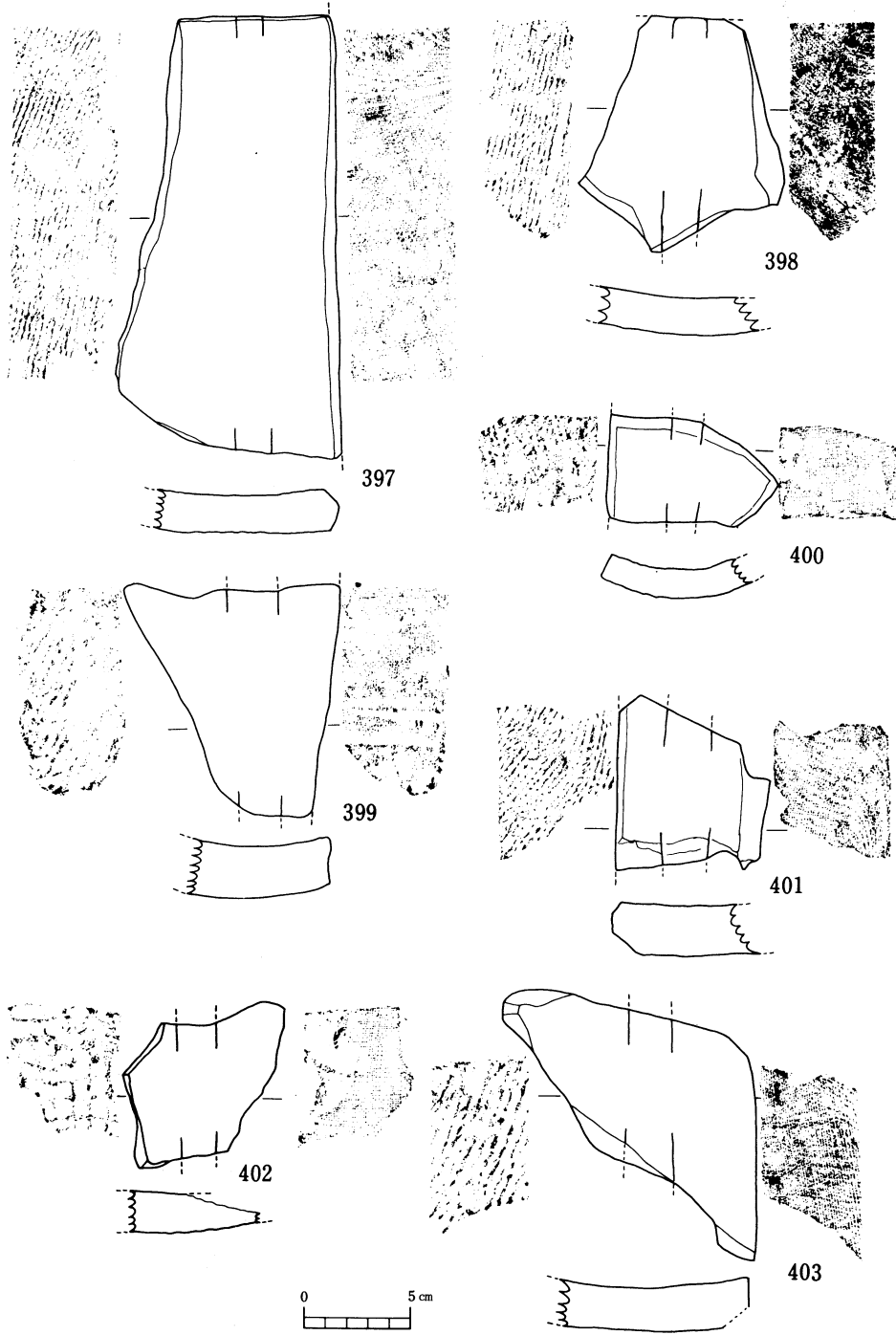
番号	出土品	層	種類	番号	出土品	層	種類	番号	出土品	層	種類	番号	出土品	層	種類
2	D-IV, m-15	井戸内	平瓦	395	B-IV, g-10	溝	のし瓦	400	A-V, b-20	1	平瓦	405	P-IV, m-15	落込み	丸瓦
391	B-IV, n-15	2	"	396	B-IV, e-9	1	"	401	C-III, y-10	3	"	406	B-III, g-12	2	"
392	D-IV, m-15		"	397	B-IV, h-15	2	平瓦	402	C-IV, p-17	2	"	407	宮田ヶ岡窯跡		平瓦
393	B-I, e-2	溝	"	398	G-IV, r-14	2	"	403	D-IV, c-4	井戸	"	408	"		"
394	D-IV, n-14	2	"	399	F-III, x-10	2	"	404	C-IV, i-15	2	丸瓦	409	"		"



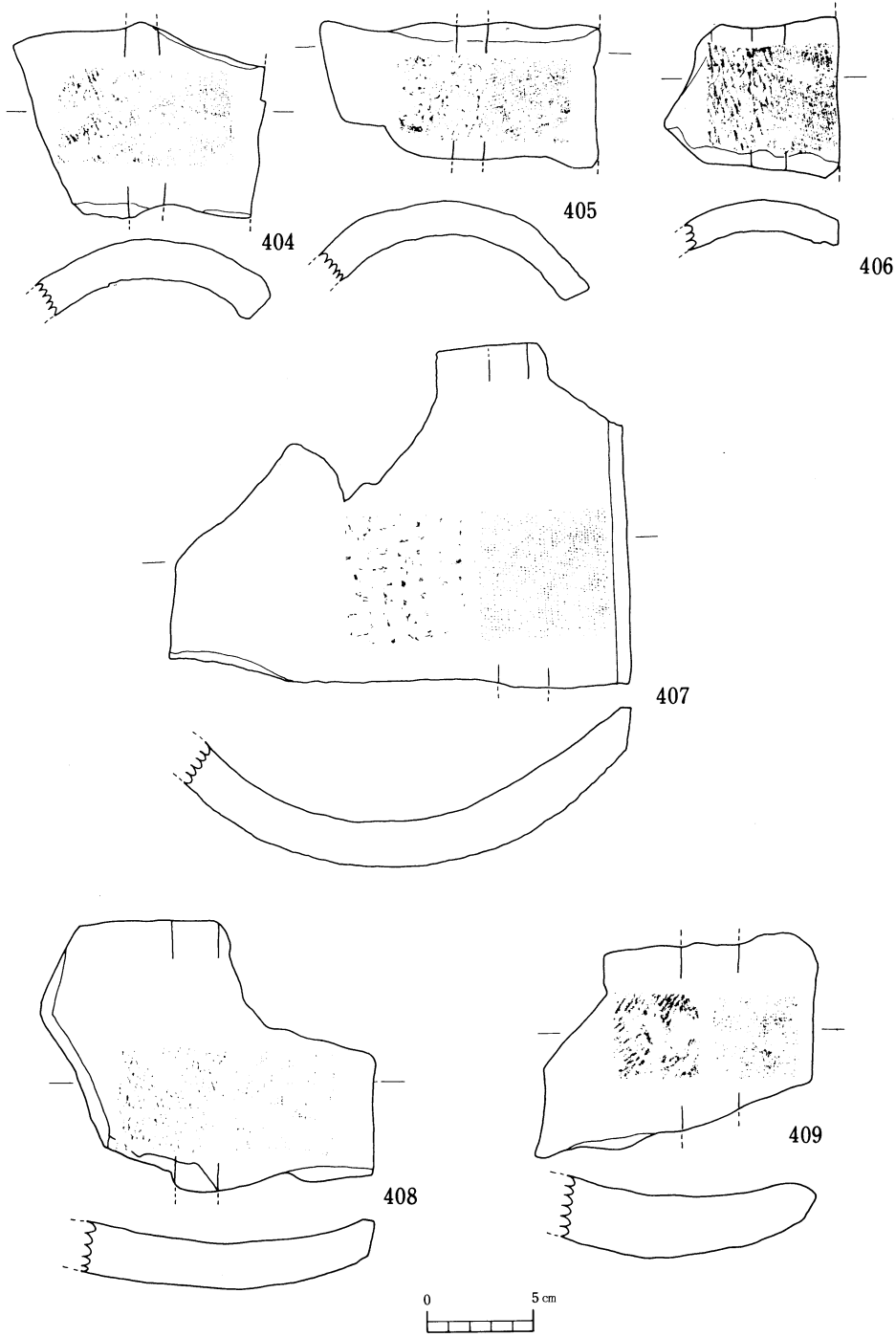
第43図 平瓦実測図I



第44图 平瓦美测图II



第45图 平瓦实测图Ⅲ



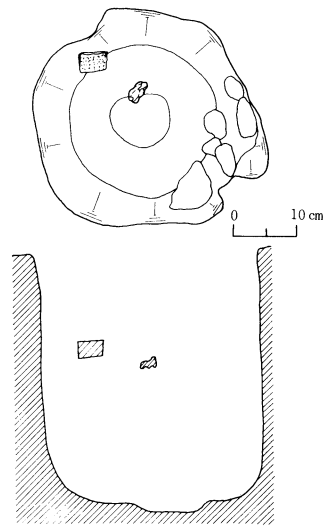
第46図 丸瓦・宮田ヶ丘窯跡採集瓦実測図

第7節 土馬（第47、48図・図版25）

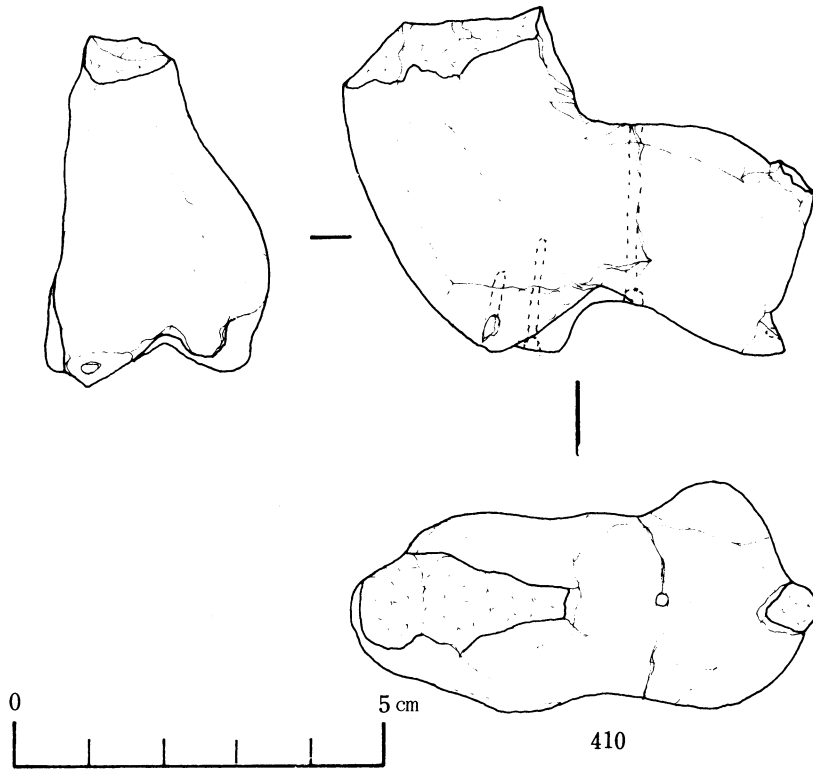
A-III、a-11区のピット中位の埋土中に出土した。  
この区は遺跡の東端にあたり、ピットの東側約1 m  
西側約1 mにはそれぞれ南北に溝状遺構が平行に走る  
ピットは径38cm、深さ43cmを測り本遺跡では大きい  
ピットである。

土馬は黒色を呈し、頸部の一部及び頭部、尾部は欠  
落するが、焼成後欠落したものである。姿は体軀が短  
かく、頭頸部が大きく、しかも四肢が短い、不安定  
な形である。表面は指頭により整形する。

四脚には下方から 1.5cm~1 cm、径 0.1cm、中軀に  
は腹より背にかけて径 0.1cmの孔がある。孔は焼成用  
の空気抜きと考えられている。



第47図 土馬出土状況



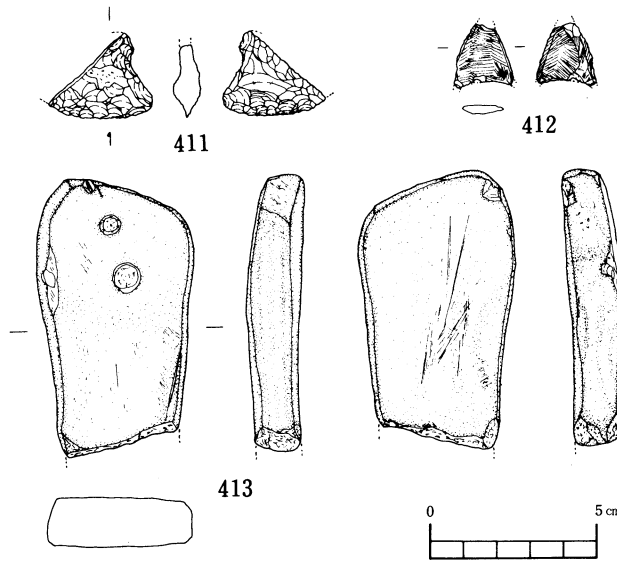
第48図 土馬実測図



第8節 石器 (第49図、  
図版21)

石器には、石匙・石鏃  
(磨製石鏃)・砥石が見  
られる。

411は石匙で、A III・C  
12区、第1層(耕作土)  
より出土した。器形は横  
形で、一部つまみ部から  
主要刃部にかけて片方が  
欠損している。大きさは  
現存全長3.1cm、現存最  
大幅2.55cm、厚さ0.65cm  
重さ0.5gを計る。つま



第49図 石器実測図

み部軸線は中央を通らない。主要刃部の角度は、一方が11度、片方が12度であり、両面より交互剝離により加工調整がなされている、素材はチャートである。

412は磨製石鏃で、B I・e-2区、第1層(耕作土)より出土した。器形は扁平無茎で、基部にはえぐりが見られ、先端及び基部両サイドは欠損しているが略三角形を呈する。大きさは現存最大長1.9cm、現存最大幅1.8cm、厚さ0.25cm、重さ0.7gを計る。両面ともに器面全体に研磨痕が顕著に見られ、整形上のためか器形両面全体的に稜を作りだしている。素材として頁岩を利用している。

413は砥石で、C III・I-II区、第2層(奈良・平安期遺物包含層)の溝状遺構内埋土中より出土した。一部欠損しているが、大きさは現存最大長8.35cm、最大幅4.75cm、厚さ1.5cmを測る。両面・側面ともに砥面がみられ、両面には部分的に砥痕が認められ、特に片面には細かく浅い溝の窪みを有し、磨溝と考えられる。また片面には、大小2個の円状の窪みを有し、一方には約0.9cm、深さ0.2cm、片方は0.6cm、深さ0.15cm計り、明らかに使用した痕跡がみられる。素材として細粒で生目が細かい砂岩を利用している。

以上当遺跡においては3点の石器が出土した。うち2点は耕作土からの出土であり、石匙は縄文時代前期の貝殻条痕のある深浦式土器が出土していることから縄文時代のもと考えられる。磨製石鏃は弥生時代中期の須久式土器が出土がみられることか考えると同時期のも推定される。

## 第Ⅶ章 総 括

小瀬戸遺跡の発掘調査で検出された遺構は多数の柱穴、柱穴によって復元された建物跡、溝状遺構及び井戸等である。これ等の遺構は後述する出土遺物からほぼ奈良時代末期より平安時代にかけてのものと推定される。

出土遺物では縄文時代早期に属する前平式土器、同前期に属する深浦式土器のほか、弥生時代中期該当の土器も出土したが、主体は土師器、内黒土器、須恵器、青磁、白磁、土錘、瓦等であり、その他土馬や多量の墨書、刻書土器であった。

そこで本項では出土遺物で時代の推定を行い、遺構との関連を述べるとともに、遺物によって導出された時代について、本遺跡の所存する始良郡帖佐地方の歴史的背景を文献により考察してみたい。

まず本遺跡で一番多量に出土した土師器である。土師器の器種には碗、坏、皿等があり、坏では188の糸切底を除きすべてヘラ起しの底部である。本県における土師器の編年の研究は確立されていないが、糸切底のはじまりは12世紀頃といわれる北九州地方に対比させると、地域性を考慮してもこの時期より上ることは考えにくい。

また須恵器のうち、瓶にみられる特徴のうち、底部際まで叩目を施さず、数cmの幅をもつ横位のヘラ整形、底部に同心円状の叩目を施すという技法は、肥後地方の須恵器に酷似することにより、本遺跡出土の須恵器は当地方の移入品とも考えられ、しかも時期は奈良時代末より平安時代末に比定されているので、この時期が与えられよう。

青磁、白磁のうち、蛇目高台をもつ越州窯系青磁（井戸Ⅰ内出土）、荊州窯系白磁（井戸Ⅰ内出土）は、9世紀以降の時代を推定できる。

また出土量としてはさほどでないが平瓦、丸瓦も出土した。瓦は軒丸瓦等は皆無であり、しかも少量であること等から不変的な使用は考えられないにしても、瓦の特徴のうち、側面をヘラ調整する技法はとるものの、薄手のうゑに使用された布目はきめ細かく、布も一枚を整然と使用していること等の特徴は平安時代頃と推定される。なを本遺跡出土瓦と酷似する瓦は町内の宮田ヶ丘窯跡出土の瓦で、近年調査した大隅国分寺跡出土瓦とは類似しないことも判明した。

以上出土遺物の時代推定を行ったが、これ等を総合すると、本遺跡はほぼ奈良時代末から平安時代にかけての生活跡と思われる。

また緑釉陶器（底面に「伴家」と針書する）や「大伴」、「伴」、「仲」、「仲家」、「利」、「雄」等の墨書、刻書土器の出土は、本遺跡が単なる古代における生活跡の遺跡というだけでなく、地方官衙等を想起させる古代地方政治の一遺跡とも考えられるであろう。

さて、古代より中世にかけての本地方はどのような変遷をたどったのであろうか。

本遺跡を含む大隅地方は和銅6年（713年）、日向の国から、肝付、大隅、贈於、始羅の4郡を割いて大隅国として設置され、のち天平勝宝7年（755年）には菱刈郡が加わり5郡となっ

た。そして延暦23年（804年）には桑原郡の名がみえることから奈良時代未頃には桑原郡が設置されたものと思われる。この桑原郡には大原、大分、豊国、答西、稻積、広田、桑善、仲川の八郷があり、このうち答西郷が帖佐に比定されている。ただ近年この答西郷を始良郡溝辺町竹子（タカゼ）に比定する考えもある。<sup>(6)</sup>しかしこの期にはいまだ帖佐郷の名はみえない。帖佐郷名が現われるのは天承2年4月の（1136年）「桑幡文書」に知足院（前関白従一位藤原忠実）が帖佐郷を正八幡へ寄進するとあり、また建久8年（1197年）図田帳に帖佐郷（271丁大）正宮領、本家八幡地頭、掃部頭とあり、大友掃部頭親能入道寂忍が帖佐地頭であったことが記されていることなどから、この期にはすでに帖佐郷が成立していたことがうかがわれる。

また本遺跡の地域西方には「西ノ妻」なる字名があるが、これは国分市所在の守公神社へ奉納する畳表が、西ノ妻であったためとも伝える。ちなみに「旧記雑録前編」によれば

一守公神御侍疊事

一長疊三十二帖 小疊六十二帖 帖佐之役也 一ヶ村分三帖也 一帖分代三十文

一濱殿借尾分役所之事

西妻一間 曾野恒見疊三帖 日隠萱葺一枚 簾一間

次中一間 帖佐恒見疊三帖 日隠萱葺一枚 簾一間

（以下略）

弘安十年二月 日

「旧記雑録前編」

とあり1287年には帖佐より疊等が守公神社へ献納されたことがわかる。

これより11年前の建治2年（1276年）の石築地役には

帖佐西郷二百四十丁九段三百歩 余真進田五丁  
定二百州七丁五段大  
公田百四十三丁五段 加宮吉五丁并福田寺田  
定除真進田五丁

以下に大山、深見以下に

餅田廿七丁四反小 加神田寺田定  
除真進田一丁 御家人税所義祐

「旧記雑録前編」

とあり餅田名がみえる。本遺跡地周辺は大字西餅田であることからこの地域を示しているものといえよう。また餅田は他が十丁前後にもかかわらず廿七丁と多いことから、帖佐郷の中心的な位置にあったものと思える。

以上のことから本遺跡の所在する地域は12世紀にはすでに帖佐郷となり、しかもその中心的な位置にあったのが餅田（本遺跡地を含む）であったと考えられる。

次に墨書、刻書土器にみる「大伴」、「伴」、「仲」、「利」、「雄」、「原」等の名前である。「伴」については安和1年（968年）伴掾大監兼行が薩摩国総追捕使としてみえるほか大隅国衙役人の中に監代伴貞安の名がある〔桑畑文書、天承2年（1132年）〕ほか、宝治元年（1247年）の起請文に伴姓がみえる〔旧記雑録前編〕ことなどから、あるいは本地域が郡衙ではないにしても、郡に関する行政上の要地と比定はできるであろうし、前述の伴名も、関連する姓ではなかろうか。

他の墨書、刻書名についても官史の名であると思われるが、現在のところ不明である。

これ等のほか生活遺跡からの土馬の出土も注目される。土馬は水霊祭祀に関わることの事例の多いことから、本遺跡出土の土馬も、その出土状況を考えあわせると興味深い。

また、井戸 I 内より出土したモモ、ヒヨウタンは当時の食生活面一端をうかがい知ることができるし、ヤブニッケイ、イケイガシの種子からは遺跡周辺の植性の再現の一助となり、自然環境の復元の材料となろう。

以上本遺跡出土の遺構、遺物の推定年代、それによって得られた時代について若干の考察を加えたが、文献へのアプローチが浅く、十分に本遺跡を解明するには至らなかった。

今後、文献よりの補強がおこなわれ、生活跡遺跡としての本遺跡の性格等が構築されることを期待する。

- (1) 森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚書」九州歴史資料館論集 2・3 1976・1977
- (2) 「生産遺跡基本調査報告書II」熊本県教育委員会1980
- (3) 小田富士雄教示
- (4) ♪
- (5) ♪
- (6) 「鹿児島県史」鹿児島県 1944
- (7) 平田信芳「古代大隅・薩摩の郡郷名」鹿児島大学史録 1981
- (8) 小田富士雄・真野和夫「土馬」神道考古学講義 第3巻雄山閣 1981

以上のほか「続日本後記」、「延喜式」卷廿二、「和名抄」、「旧記雑録前編」、五味克夫「桑畑文書」鹿児島県文化財調査報告書11集1970、「始良町誌」、「国分郷土誌」、「三国名勝図会」を参照したほか、本蔵久三氏（指宿郡開聞中学校長）、のご教示を得た。

## 小瀬戸遺跡井戸 I 内出土種子の同定について

鹿児島大学教養部

教授 田川 日出夫

### 1 モモ *Prunus persica* Batsh. (バラ科), 3個

現在のモモの種子に比してやや小型であるが、核に刻まれた文様からみてまちがいない。

### 2 ウメ *Prunus mume* Sieb. et Zucc. (バラ科), 1個

現在のウメと変らない。

### 3 イチイガシ *Quercus gilva* Blume. (ブナ科), 果皮のみ1個

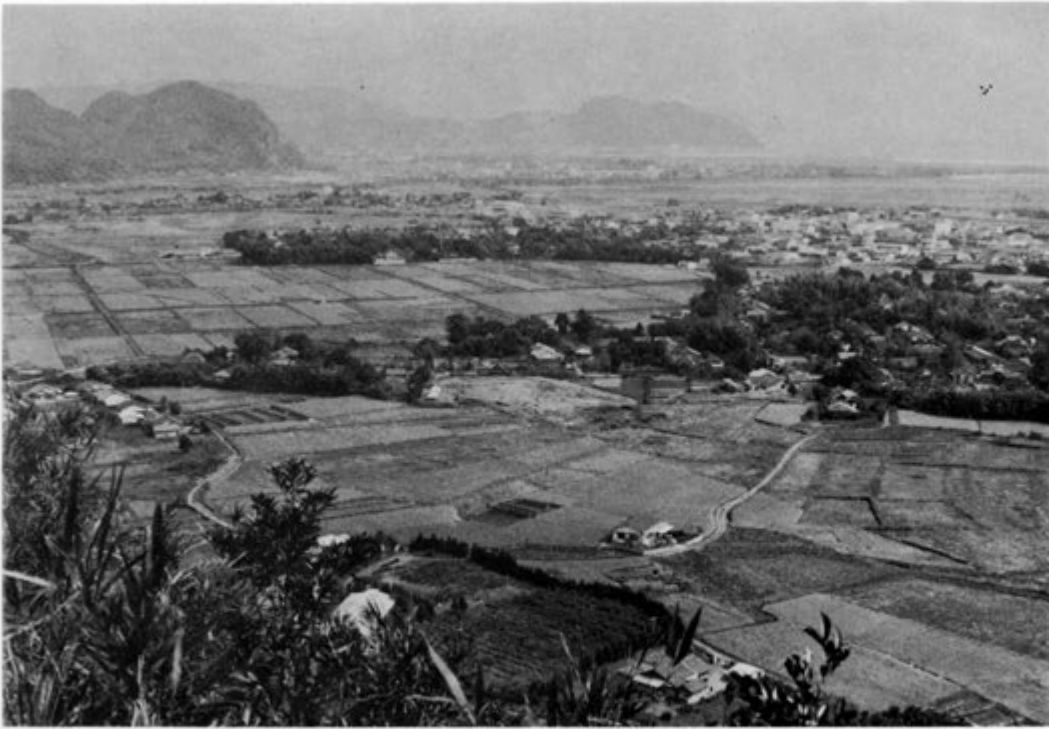
果皮に残る雌蕊跡の特徴はイチイガシのものである。

### 4 ヤブニッケイ *Cinnamomum japonicum* Sieb. (クス科), 2個

この黒色の稜を持つ種子はクスノキ属 *Cinnamomum* の特徴であるが、クスノキの種子よりもや、大きくヤブニッケイと同定した。脐の部分が両種では異なる。クスノキは中国より入ってきたものといわれているので、この時代に入ってきていれば興味があるが、クスノキではなかった。

### 5 ヒヨウタン *Lagenaria leucantha* Rusby. (ウリ科), 32個

ヒヨウタンは *L. leucantha* var. *goulda* Makino、フクベは *L. leucantha* var. *depressa*、ユウガオは *L. leucantha* var. *clavata* となっており、基本種 *L. leucantha* のいずれも変種扱いになっている。この変種のどれに相当するか不明であるので、基本種の名で示しておく。



遺跡遠景



遺跡近景



遺跡発掘風景



遺構検出状況（東より）



井戸Ⅱ検出状況

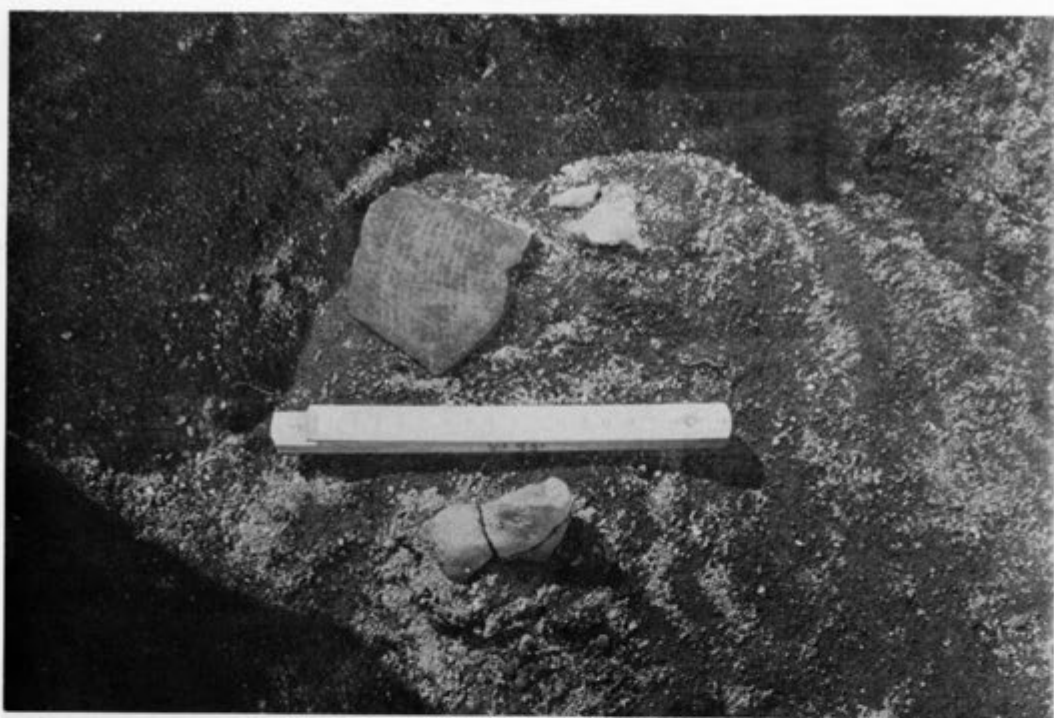


井戸Ⅰ内（井戸枠・木製容器）出土状況

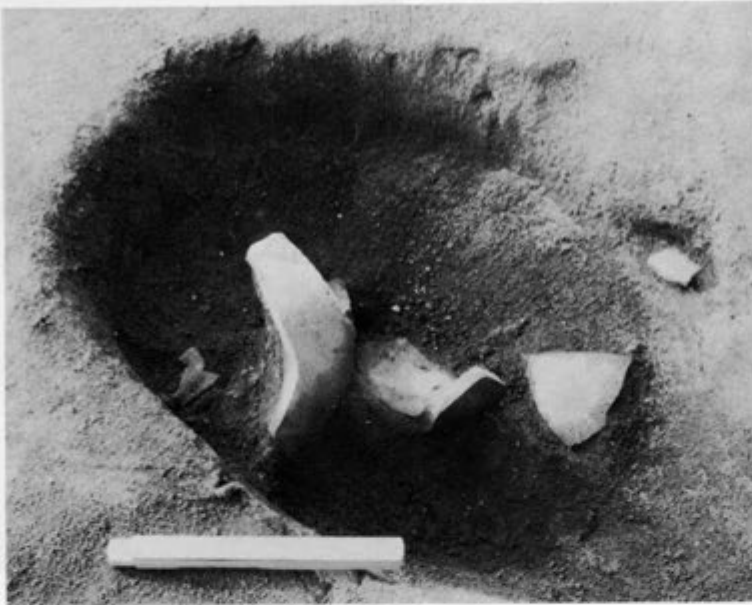
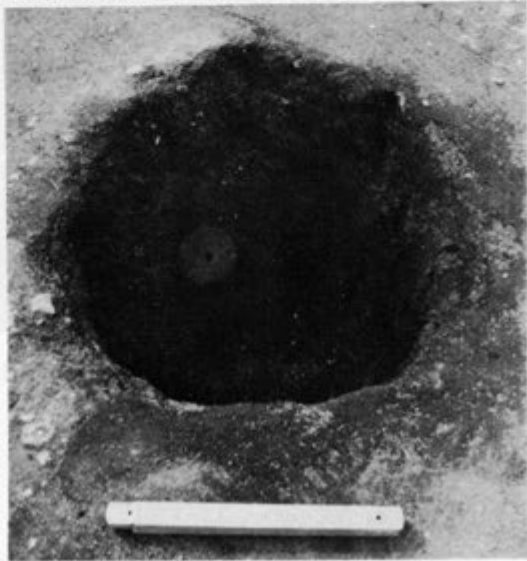




井戸 I 内 (木製容器) 出土状況



土馬出土状況



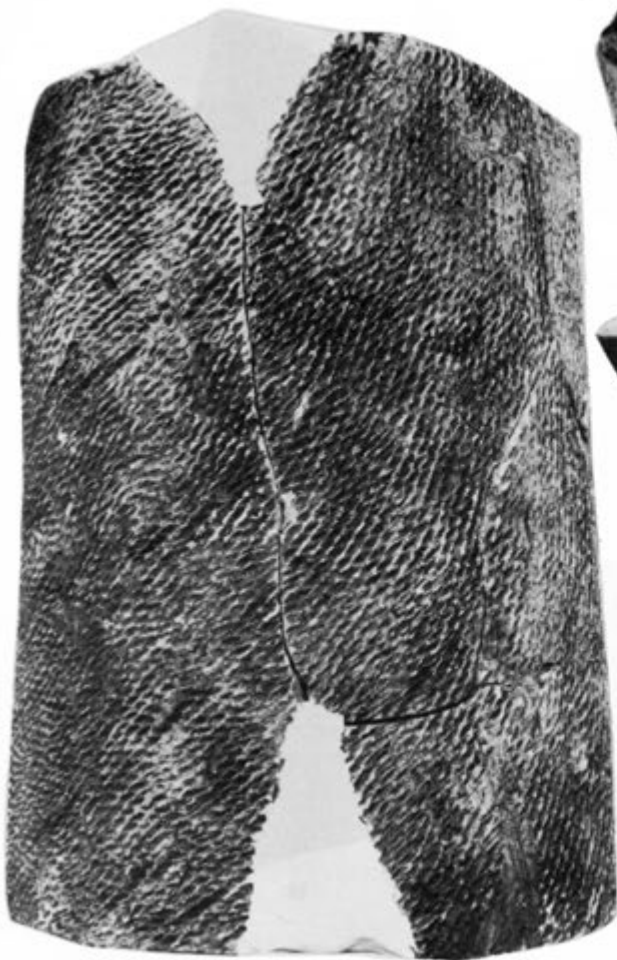
遺物出土状況



遺構検出状況



遺構検出状況



2



3



4



5



6



7



8



9



11



10



17



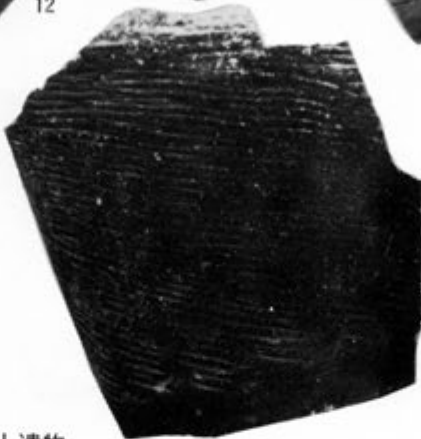
12



14

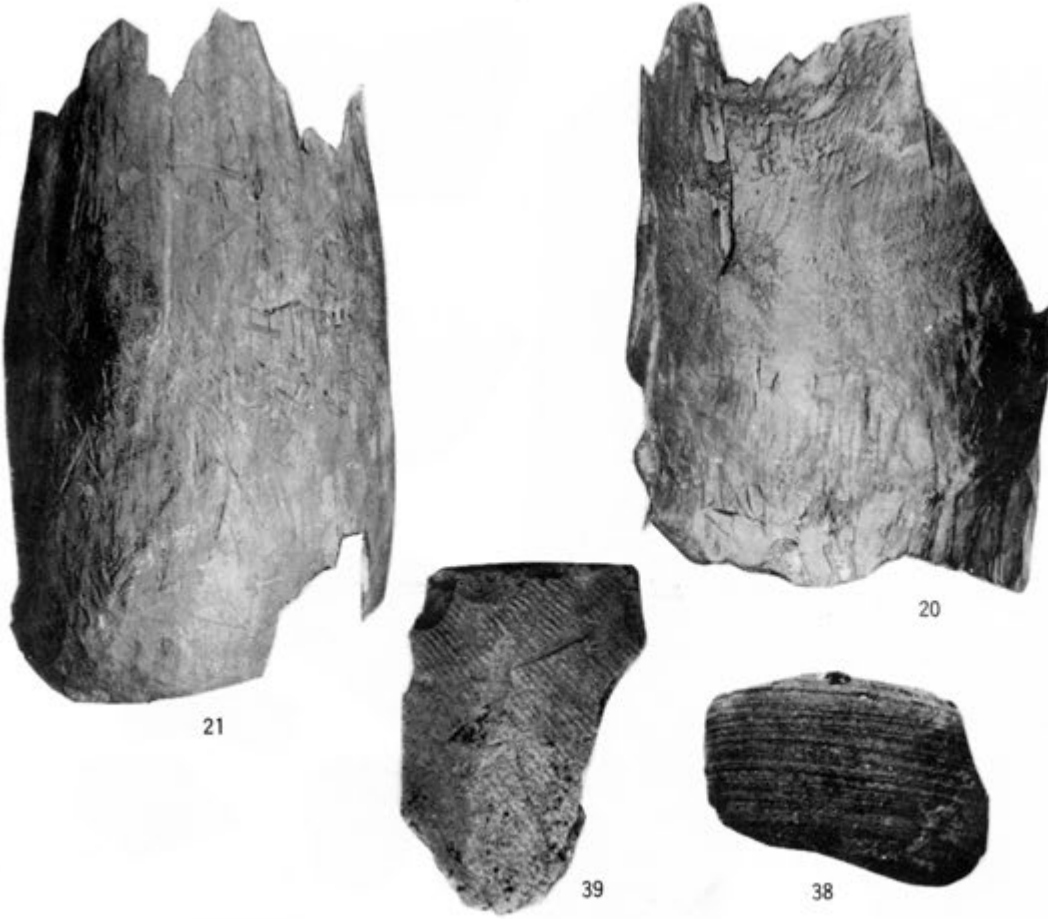


13

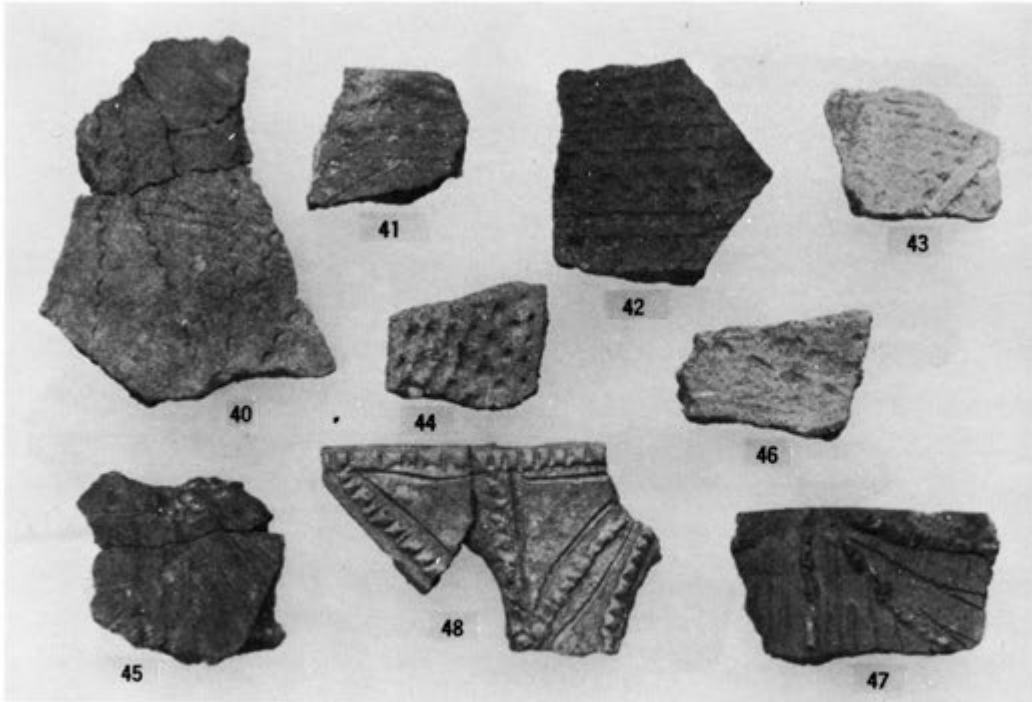


18

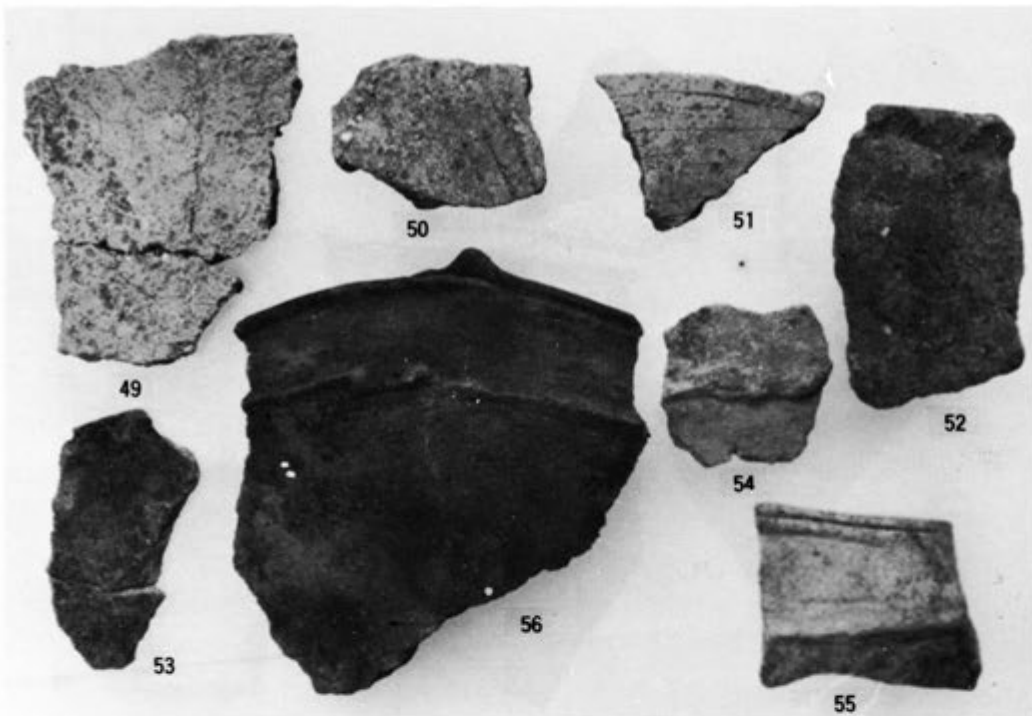
井戸 I 内出土遺物  
-77-



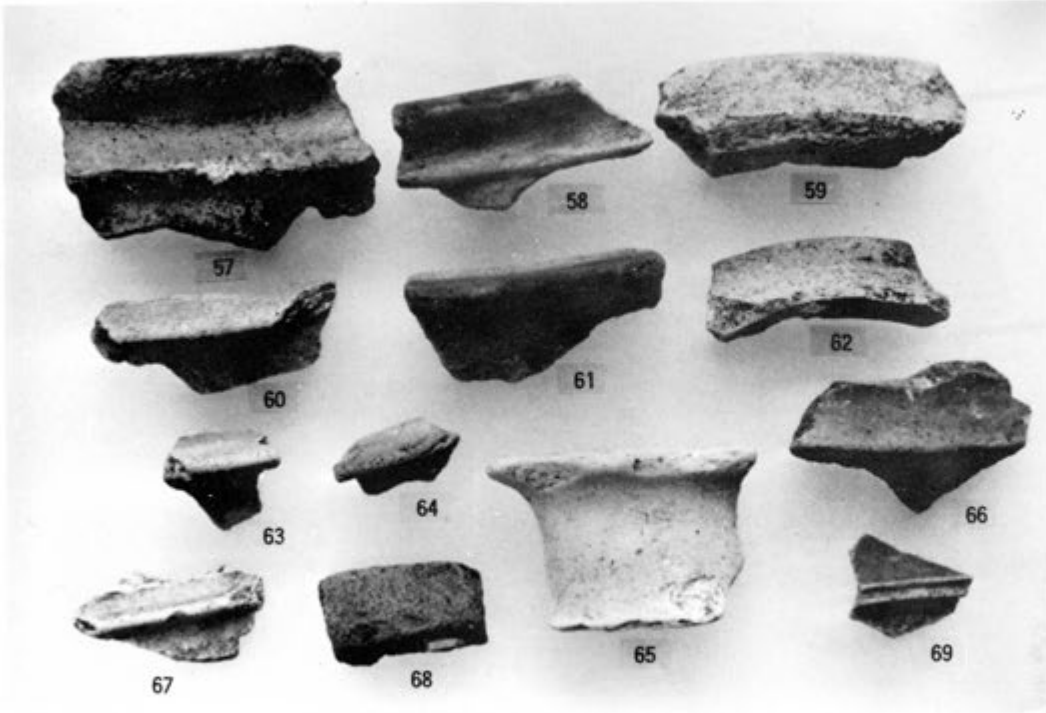
井戸 I (井戸粹)・井戸 II 内出土遺物 (下)



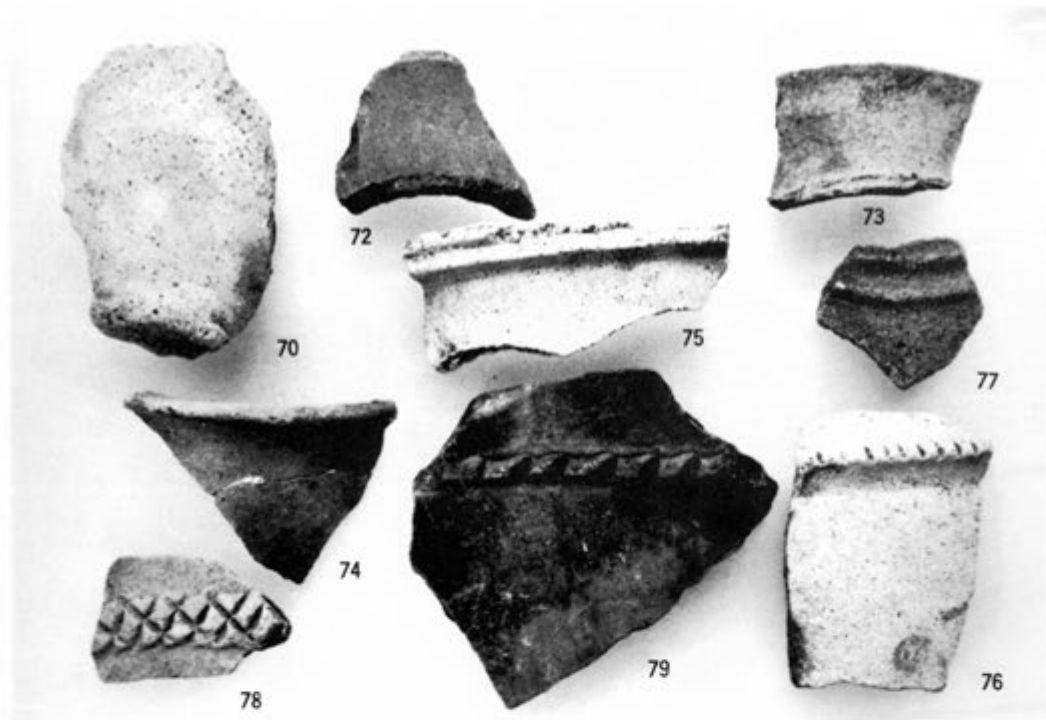
縄文式土器 (前平式・点線文・深浦式)



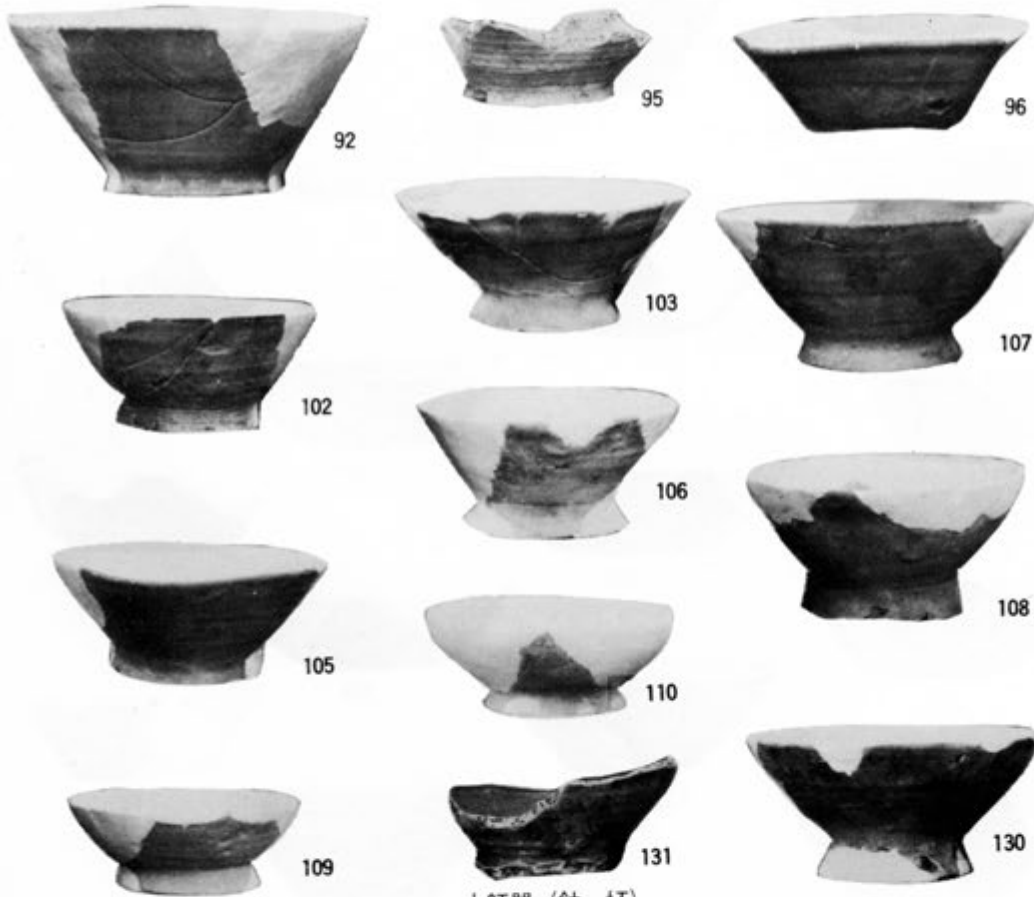
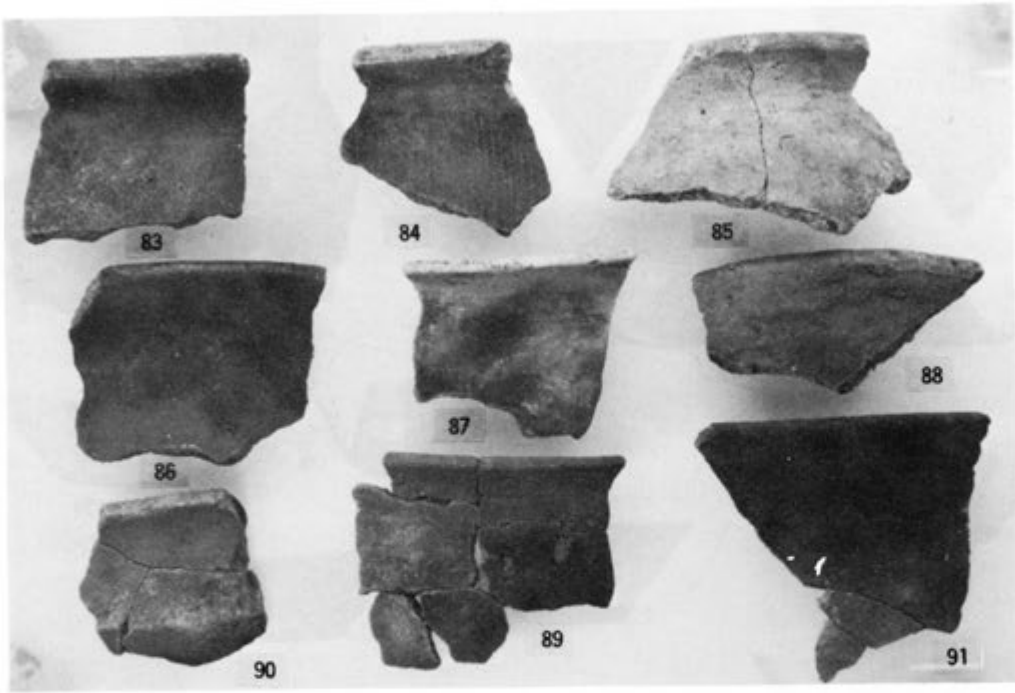
縄文土器 (深浦式・晩期)



弥生式土器

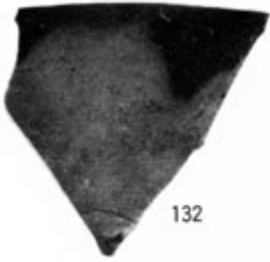


弥生式土器



土師器 (鉢・坏)





132



133



134



135



136



140



138



139



141



142



144



145



143



148



146



147



149



156



147



160



155



159



161

土師器 (坏・皿)



165



166



167



168



169



171



172



173



174



175



176



177



178



179



180



181



182



183



184



185



186



187



188



189



190



191



192



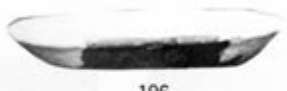
193



194



195

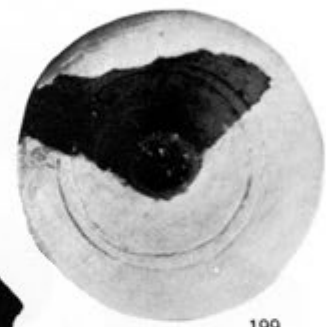


196



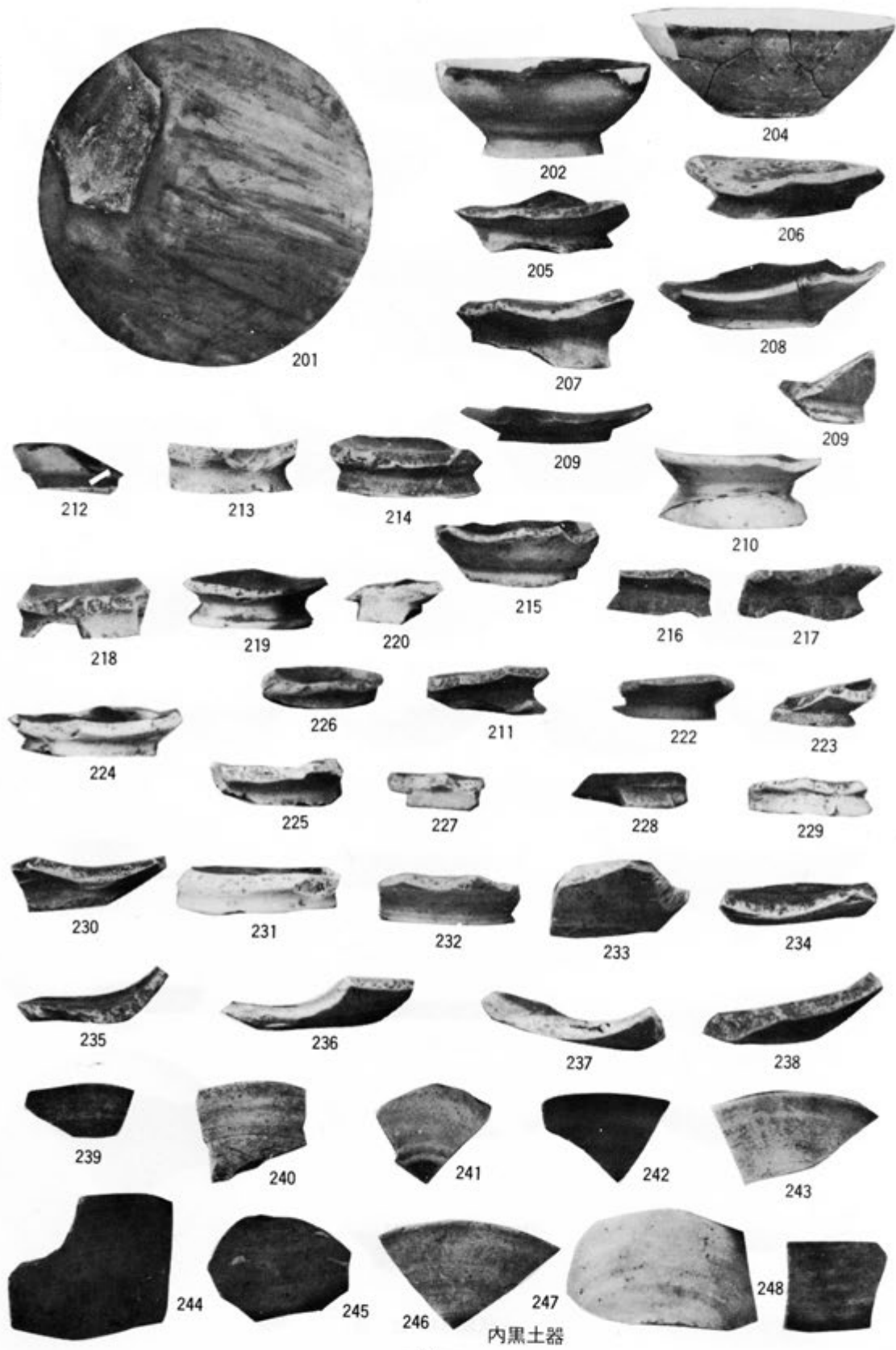
198

200



199

土師器(坏・皿・蓋)



内黑土器



250



249



252



251



253



墨書土器



254



256



257



255



258



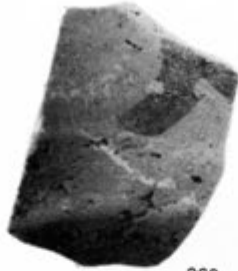
259



260



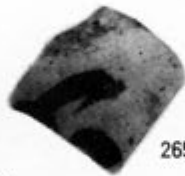
261



262



263



264



265

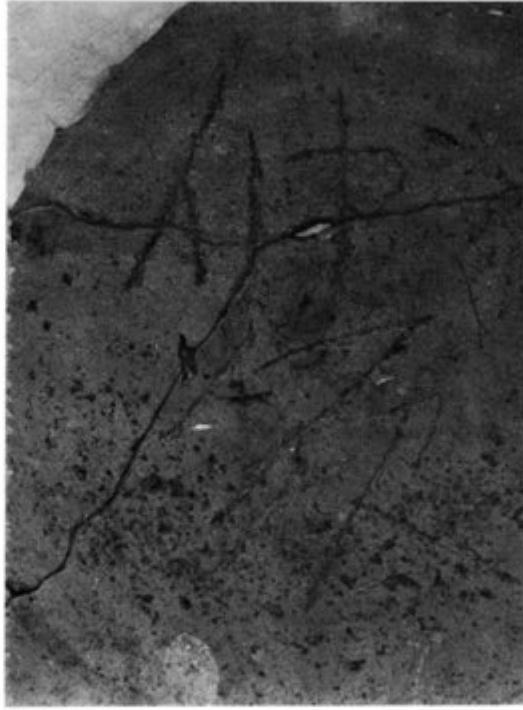


266

墨書土器



267



1



268



269

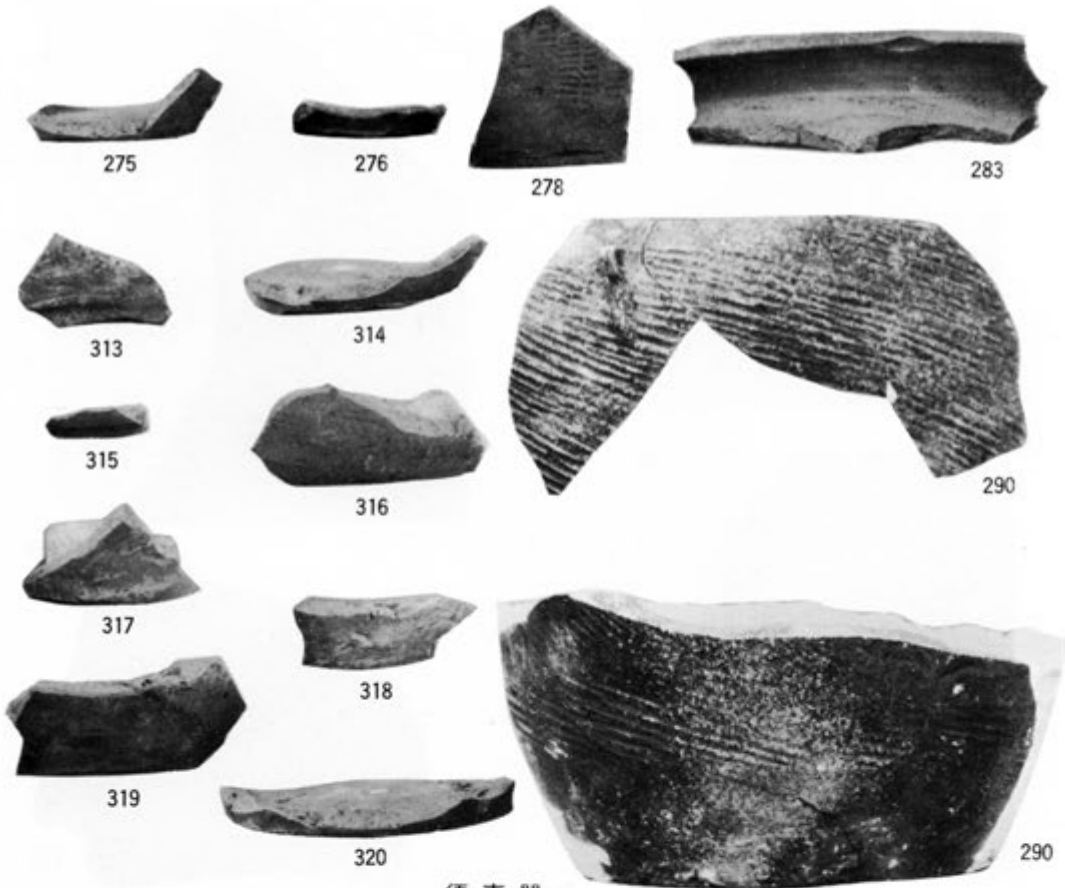
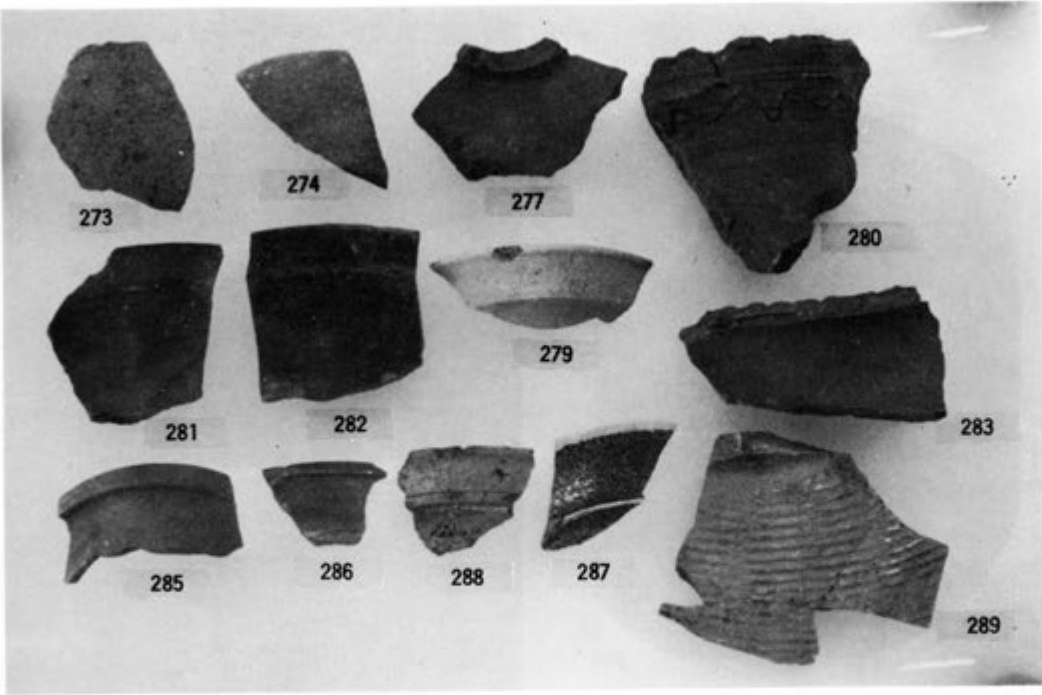


271

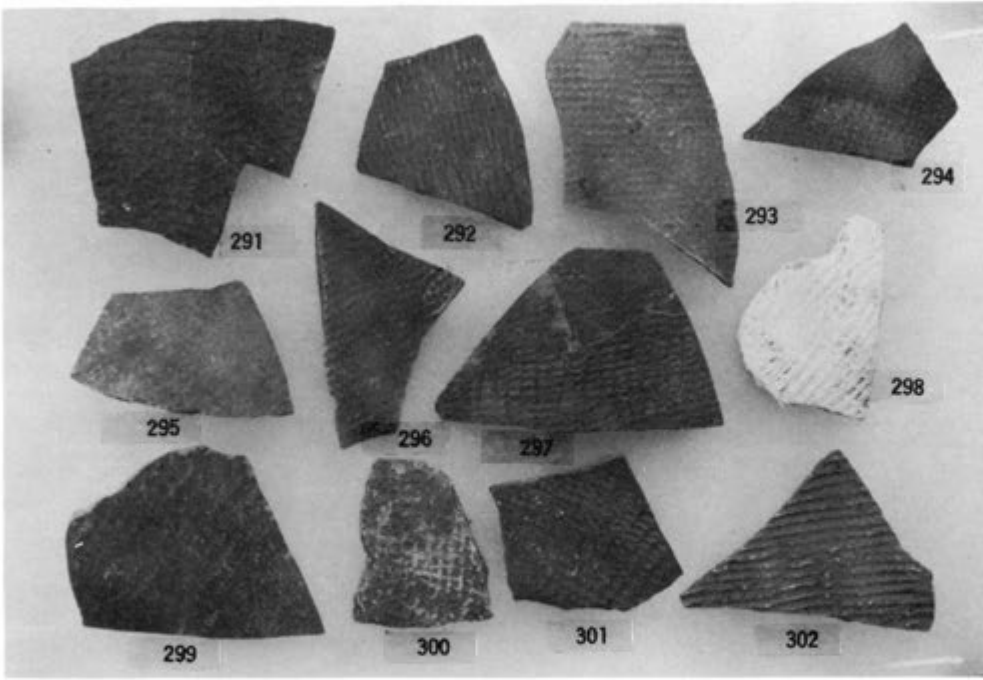


272

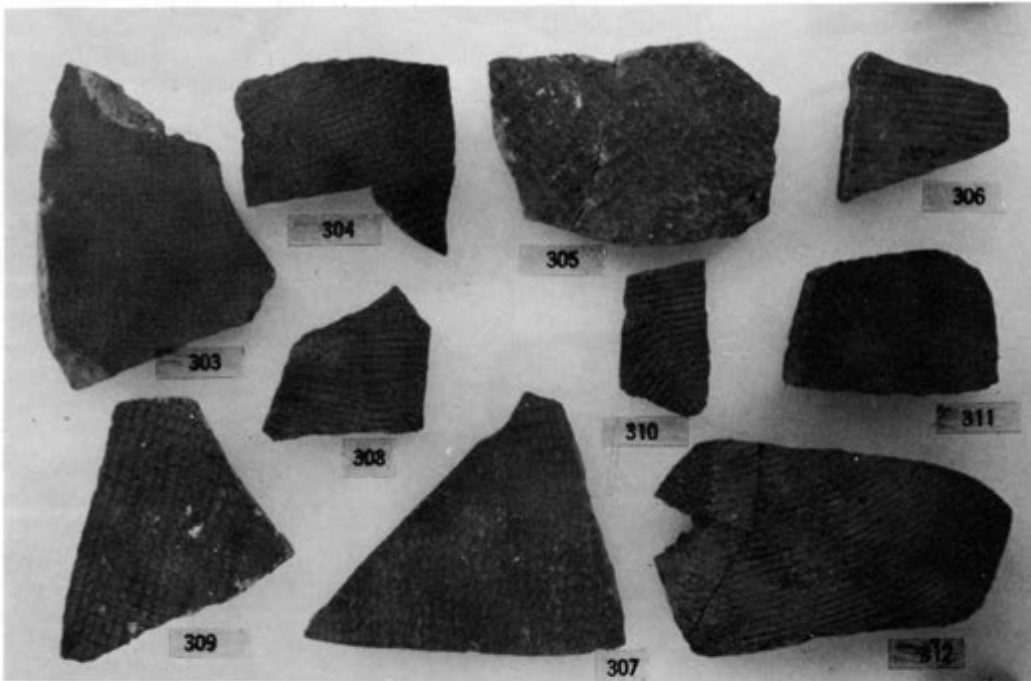
刻書土器



須惠器

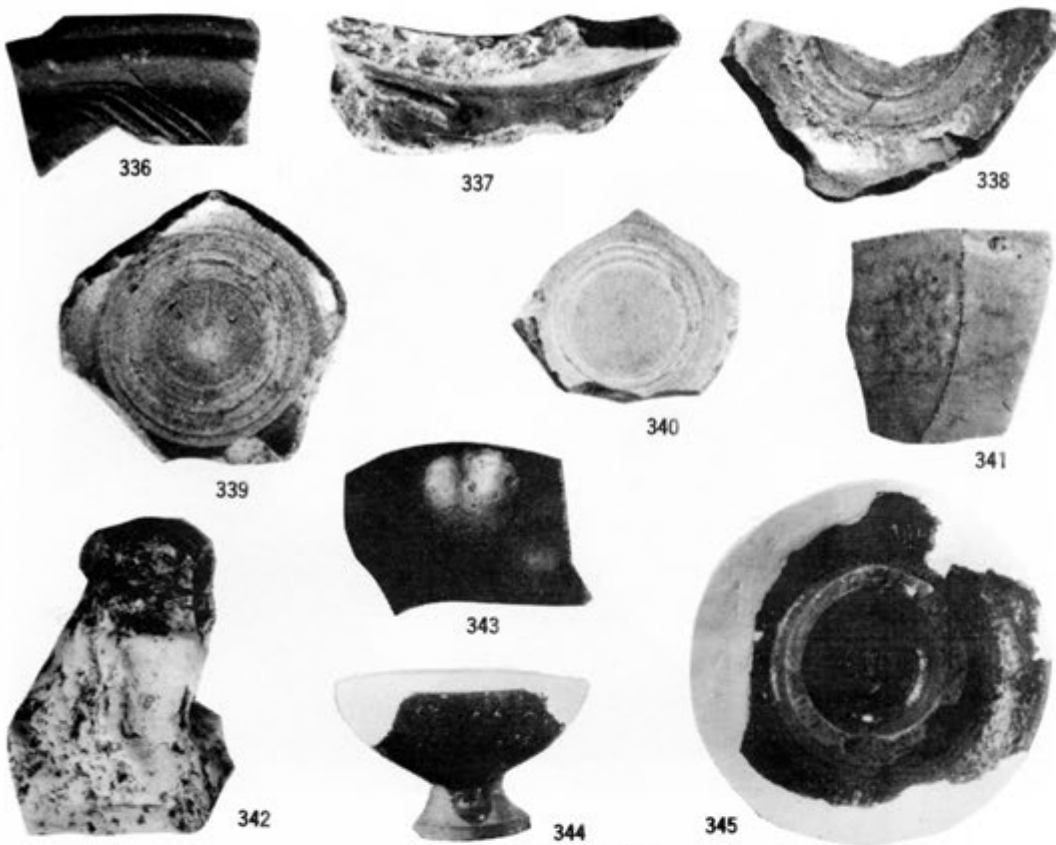
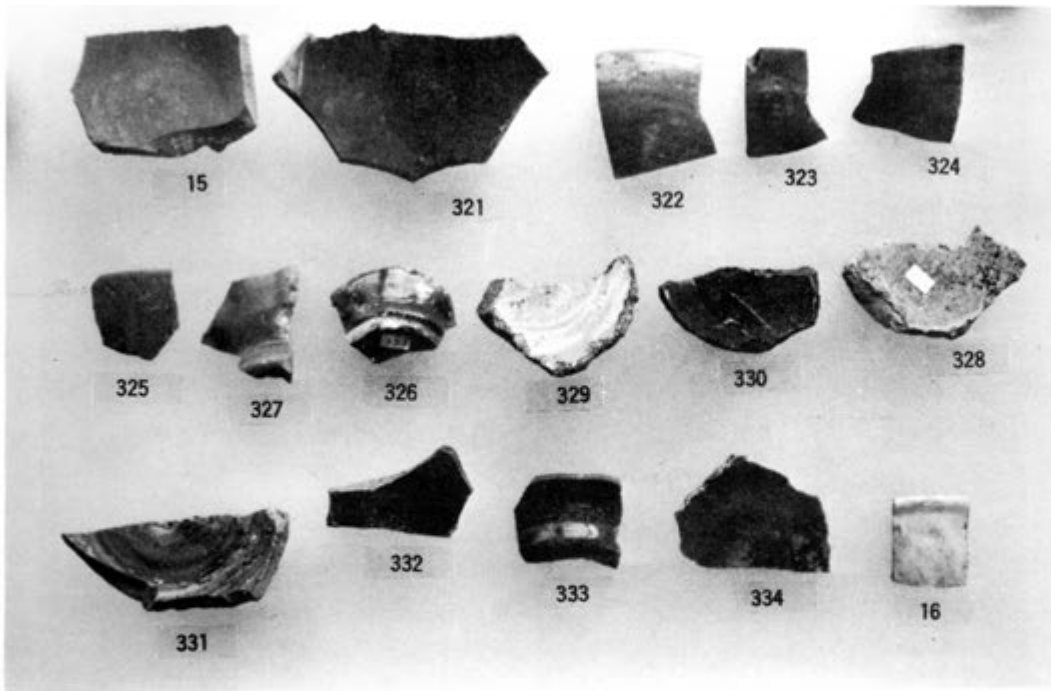


須惠器

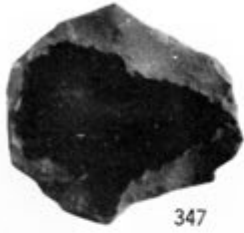


須惠器





青磁・白磁・その他土器



347



346



348



353



351



352



355



356



354



412



411

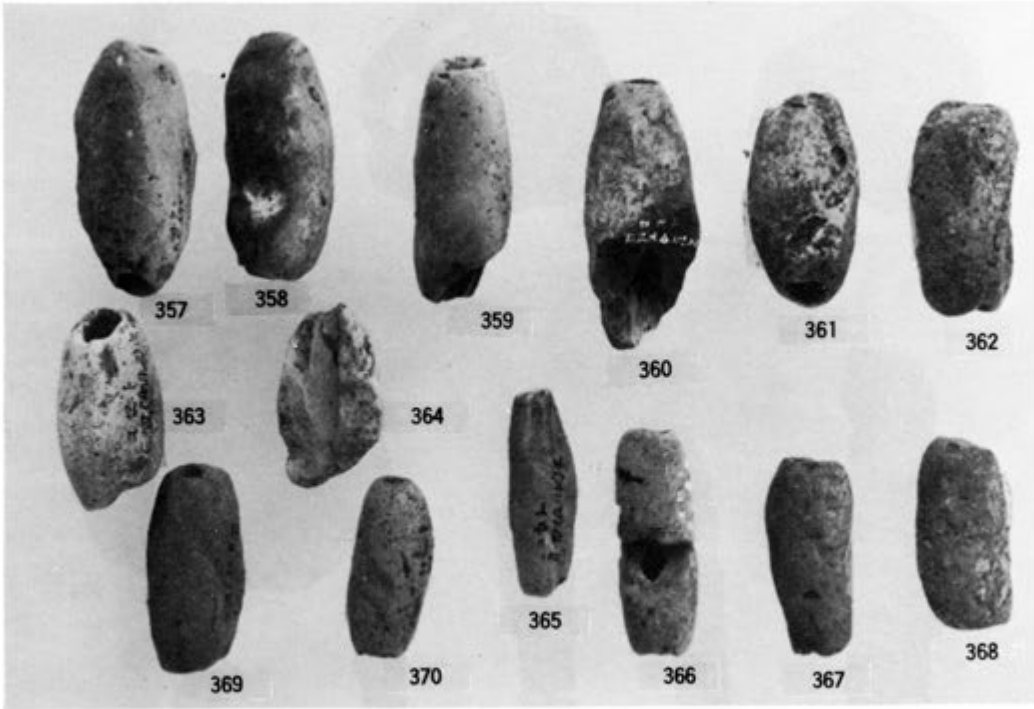


19

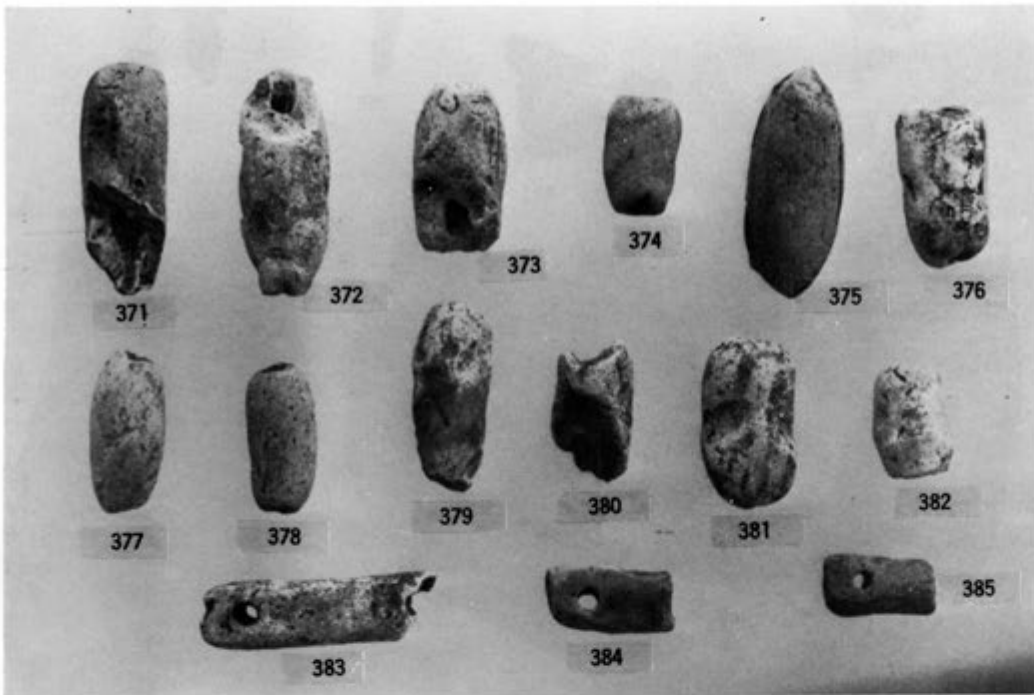


413

その他土器・刀子・釘・木製容器



土 錘



土 錘



386

387

388

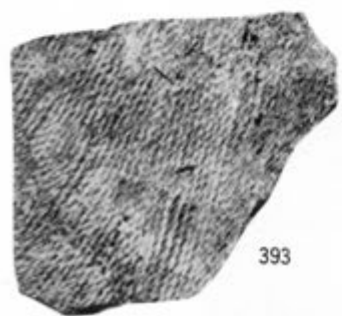
390



389



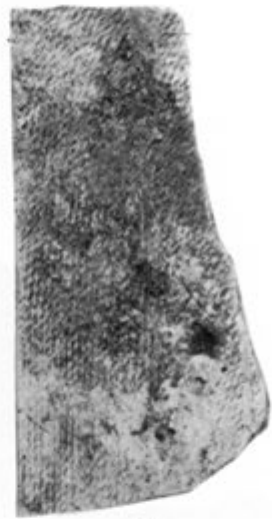
391



393



394



392



397

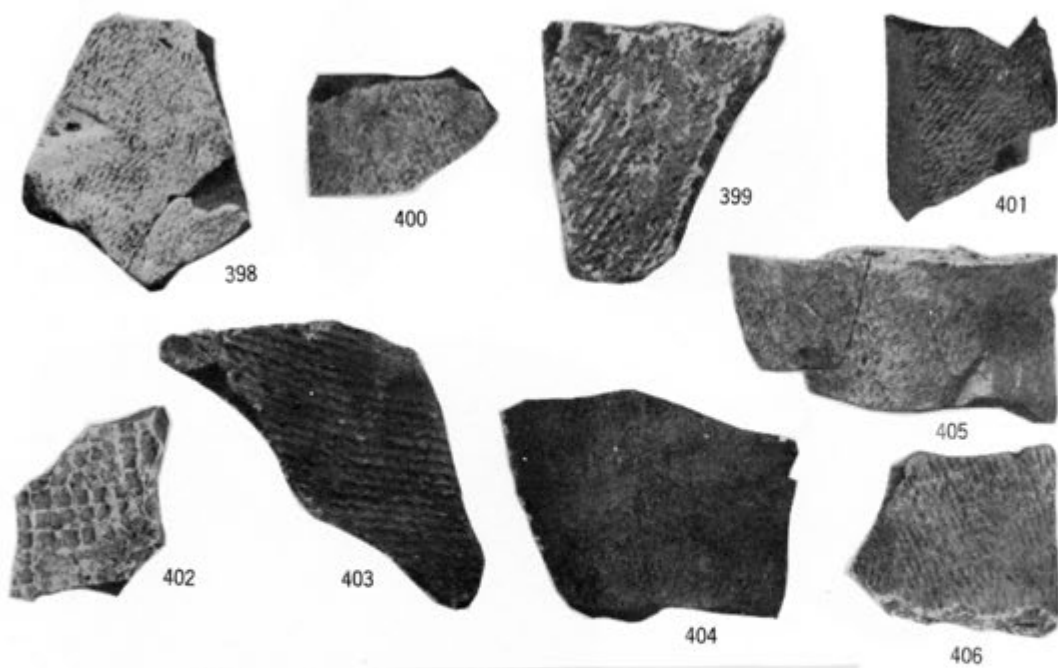


396

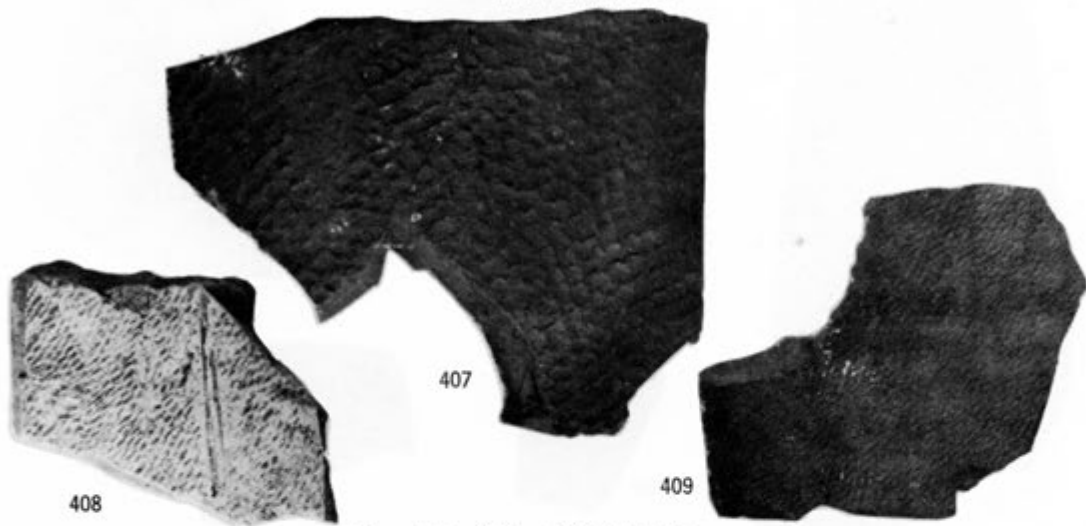


395

紡錘車・平瓦



宮田ヶ丘窯跡遠景



平瓦・丸瓦・宮田ヶ丘窯跡出土瓦



土馬



モモ



ウメ



イチイガン



ヤブニッケイ



井戸 I 内出土種子

ヒョウタン

## あ と が き

諸種の事情から発掘調査後長期間を経ての報告書作成であったが、できる限りの努力をしたつもりである。

発掘調査を含め10余年の間には多くの方々の協力があった。廻って今日、整理作業を手伝って下さった収蔵庫の作業員2人は発掘に参加された人であった。調査補助員であった大学生の中には本県の職員になった者もいる。それぞれの道で精進されている人も多い。

こうして出来あがった報告書をみると、果して協力して下さった方々に満足いただけるかには不安が残る。

日本道路公団をはじめ地元の始良町教育委員会にも多くのご迷惑をかけた。記して感謝の意を表したい。



# 建馬場遺跡

## 例 言

- 1 この報告書は、九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設に伴う建馬場遺跡の報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団からの受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
- 3 調査の組織は、調査の組織及び調査の経過の中で記した。
- 4 本書の執筆・編集は、担当職員の異動により立神が代って行った。

## 目 次

I	調査に至るまでの経過	101
II	調査の組織及び調査の経過	101
III	遺跡の位置及び環境	102
IV	調査の概要	107
	1 土層	108
	2 遺物	109
V	むすび	111

## 挿 図 目 次

第1図	建馬場遺跡の位置及び周辺遺跡	104
第2図	建馬場遺跡周辺地形図	105
第3図	建馬場遺跡グリット及びトレンチ配置図	106
第4図	建馬場遺跡第Ⅲ地区、a-4～a-7区土層断面図	108
第5図	建馬場遺跡成川式土器実測図	110
第6図	建馬場遺跡土師器、須恵器、磁器、陶器、実測図	111

## 図 版 目 次

図版1	建馬場遺跡遠影（西側より） 建馬場遺跡第Ⅲ地区、a-6、a-7区土層断面
図版2	建馬場遺跡手捏土器

## I 調査に至るまでの経過

九州縦貫自動車道は、昭和43年3月6日第18回国土開発幹線自動車道建設審議会において、九州関係各路線とともに鹿児島県内では、九州縦貫自動車道加治木―鹿児島間の整備計画が決定された。ついで昭和43年4月1日建設大臣から加治木―鹿児島間25kmについて、日本道路公団に対して、工事施行命令が出された。それに伴って、日本道路公団では「日本道路公団の建設事業等、工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、埋蔵文化財の取扱いについて協議を求めた。これに対し鹿児島県教育委員会では昭和43年12月17日～昭和44年1月20日の間、県内の考古学研究者を調査員に依頼して分布調査を実施し、26個所の周知の遺跡について範囲確認を行った。

九州縦貫自動車道の路線は、この報告をもとに決定されたが、路線内の未確認の遺跡については、再度昭和46年1月に分布調査を実施し、その結果、建馬場（加治木町）、松木田・小瀬戸（始良町）、小山・谷ノ口・上城城址・宮後（吉田町）の埋蔵文化財包蔵地6個所と中世の城跡1個所の遺跡が発見された。

県教育委員会では、この結果をもとに日本道路公団とそれらの遺跡の取扱いについて協議する一方、発掘調査等については、鹿児島県考古学会（会長河口貞徳氏）、鹿児島県史蹟調査会（会長河口貞徳氏）等に協力を依頼し、県教育委員会は昭和46年8月10日、日本道路公団と委託契約を結び、小瀬戸遺跡を昭和46年8月20日から発掘調査することとなった。

本遺跡は、小山遺跡発掘調査期間中であつたが、別途調査班編成を行い、昭和46年12月8日から12月12日までの実働5日間で調査は終了した。

## II 調査の組織及び調査の経過

### 調査の組織

調査 主体	鹿児島県教育委員会	
調査 責任者	社会教育課長	寺 師 次 夫
調査員兼総務	社会教育課文化係長	盛 園 尚 孝
調 査 員		立 神 次 郎

### 調査の経過

分布調査の結果、建馬場遺跡は、日本山川および網掛川によって形成された沖積平野に所在し、加治木町の市街地はずれ、県道栗野―加治木線から西へ約400mの低丘陵地の縁辺部に位置し、国指定史跡南浦文之の墓地のある安国寺の前を通る町道が三差路で交わるところの近くにあつて、この三差路の南側に接する畑地ならびに水田跡が遺跡で、その面積は540㎡である。

発掘調査は、遺跡が段違いになっている5筆の畑地及び水田跡に分かれているためグリット

及びトレンチは、地形に応じて任意にそれぞれ設定し、昭和46年12月8日より第Ⅰ地区より開始した。その結果、第Ⅰ地区～第Ⅴ地区まで表層から約20～50cmまで砂混じりの黄褐色砂層で、さらに下層も小石、軽石、パミス、砂などの混ざった黄色砂層となり、明らかに氾濫等を含めた堆積地であると思われる。しかし、第Ⅲ地区の一部地区で畑地の縁辺部に急傾斜で落ち込みがみられたが、この地区は表土層である黄褐色砂層下に黒色砂層が認められ、土師器、須恵器染付、成川式土器などの遺物が混在して多量に認められたのみであったため確認調査のみで終了し、発掘調査面積は180㎡で、12月12日に終了した。

その間の調査経過については、下記のとおりである。

#### 調査日誌抄

発掘調査期間 昭和46年12月8日～12月12日（午前中）実働 4.5日間

- 12月8日 発掘調査開始 作業員に発掘調査の説明と調査上の注意を行い作業に入る。草木の伐採作業から開始し、グリット及びトレンチ設定作業。第Ⅰ地区掘り下げ作業。
- 12月9日 第Ⅰ地区掘り下げ作業。第Ⅱ地区掘り下げ作業。各地区とも遺物包含層は確認されず。
- 12月10日 第Ⅰ地区・第Ⅱ地区・第Ⅲ地区掘り下げ作業。第Ⅲ地区より遺物包含層を確認する。
- 12月11日 第Ⅱ地区・第Ⅲ地区掘り下げ作業。第Ⅲ地区の一部地区で遺物の混在が認められる。
- 12月12日 第Ⅲ地区・第Ⅳ地区・第Ⅴ地区掘り下げ作業。第Ⅲ地区土層実測作業。すべての地区で両河川による影響が見られ、破壊されている。現場作業終了。

### Ⅲ 遺跡の位置及び環境

建馬場遺跡は鹿児島県姶良郡加治木町反土建馬場に位置している。加治木町は鹿児島県のほぼ中央部、すなわち薩摩半島の基部に位置し、姶良郡の西南部にあり、西部は姶良町、東部は隼人町、北部は溝辺町に隣接し、南部は鹿児島湾に面しており桜島が直視でき、鹿児島県の県庁所在地のある鹿児島市よりおよそ23kmの国道10号線沿いにある。本遺跡は加治木町役場からさらに北方約1kmの地点にある。

本遺跡の位置する姶良郡地方を大きく見ると、鹿児島湾奥深部を中心とした馬蹄形状の地形を呈し、霧島山地を中心とする周辺部は高く、国分、姶良平野を中心とする中心部が低く、その両平野の背後の台地の大部分は火山灰土に覆われ、いたるところが開析されている。両平野を貫流している大小河川は、周辺部の山間地帯に源を發し、中央部の鹿児島湾へカルデラ壁の土砂を運び沖積平野を形成している。特に思川、別府川、網掛川、新川等の流域は沖積地の形成がすすみ、台地と低地とに区分されるが、軽石・砂・円礫混じりの火山灰に覆われ明らかに二次的な堆積が見られ、大小河川流域は水田が営まれている。

加治木町を概観すれば、東側に黒川山、西側に五老峰、北側に鳶ヶ岡、高峠山があって三方を囲み、南部は馬蹄形の盆地を形成し、北部方面一帯は台地で山間部を造り出し、高地と低地

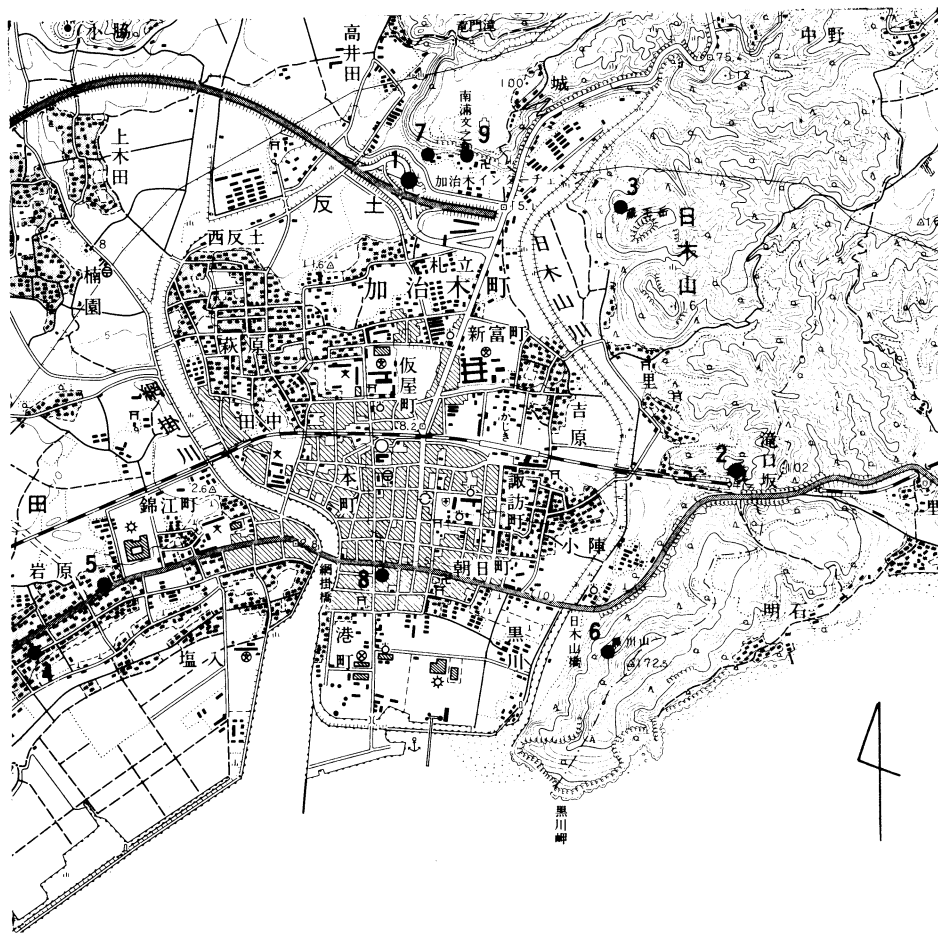
とに二大別される地形を呈しているといえよう。

本遺跡は、加治木町の市街地はずれ、網掛川と日本山川とに取り囲まれた標高12mの台地縁辺部に位置し、東側日本山川寄りを県道栗野—加治木線が走り、さらに日本山の山麓には、冠形の円錐丘を呈した安山岩で形成されている加治木町のシンボル蔵王岳が高くそびえている。

西側は網掛川が蛇行して流れ、その流域に広く分布する水田地帯となっているが、最近では町営住宅等の建設に伴い宅地化の波が押し寄せている。北側には本遺跡との比高差が約60m以上の急崖がせまり、舌状台地となり、加治木城の跡が所在し、遺跡地より約550mの所には、竜門ノ滝があり、加治木町の名所のひとつに数えられる。南側は市街地を隔てて鹿児島湾となり、日本山川や網掛川が流れ込んでいる。

建馬場遺跡の周辺遺跡を概観してみれば、縄文時代の遺跡は、日本山の三代寺遺跡（早期・前期・晩期）<sup>註①</sup>・中野の楠原遺跡（前期・中期）、日本山の日本山洞窟遺跡（前期）<sup>註②</sup>・小山田の仏石遺跡（後期・晩期）<sup>註③</sup>などが知られている。特に日本山洞窟遺跡は、溝辺台地から南へのびた日本山の山麓・蔵王岳の南側・国鉄鹿児島本線日本山トンネル近くの凝灰岩の山崖に位置する自然洞窟内の遺跡で、加治木町の故野田昇平氏により発見され、当時の国学院大学の樋口清之・乙益重隆の両氏により昭和18年8月に発掘調査がなされている。三代寺遺跡は、鹿児島県教育委員会により昭和49年3月～7月まで発掘調査が行なわれ、押型文土器・円筒土器・寒ノ神式土器などが出土している。

弥生時代から古墳時代の遺跡は、反土の建馬場遺跡・黒川山の黒川遺跡・木田の木田遺跡・岩原の岩原遺跡などが知られている。平安時代前半の遺跡としては、西別府の曲田遺跡<sup>註③</sup>があり、木炭と焼骨が埋納された蔵骨器<sup>註③</sup>が発見されている。



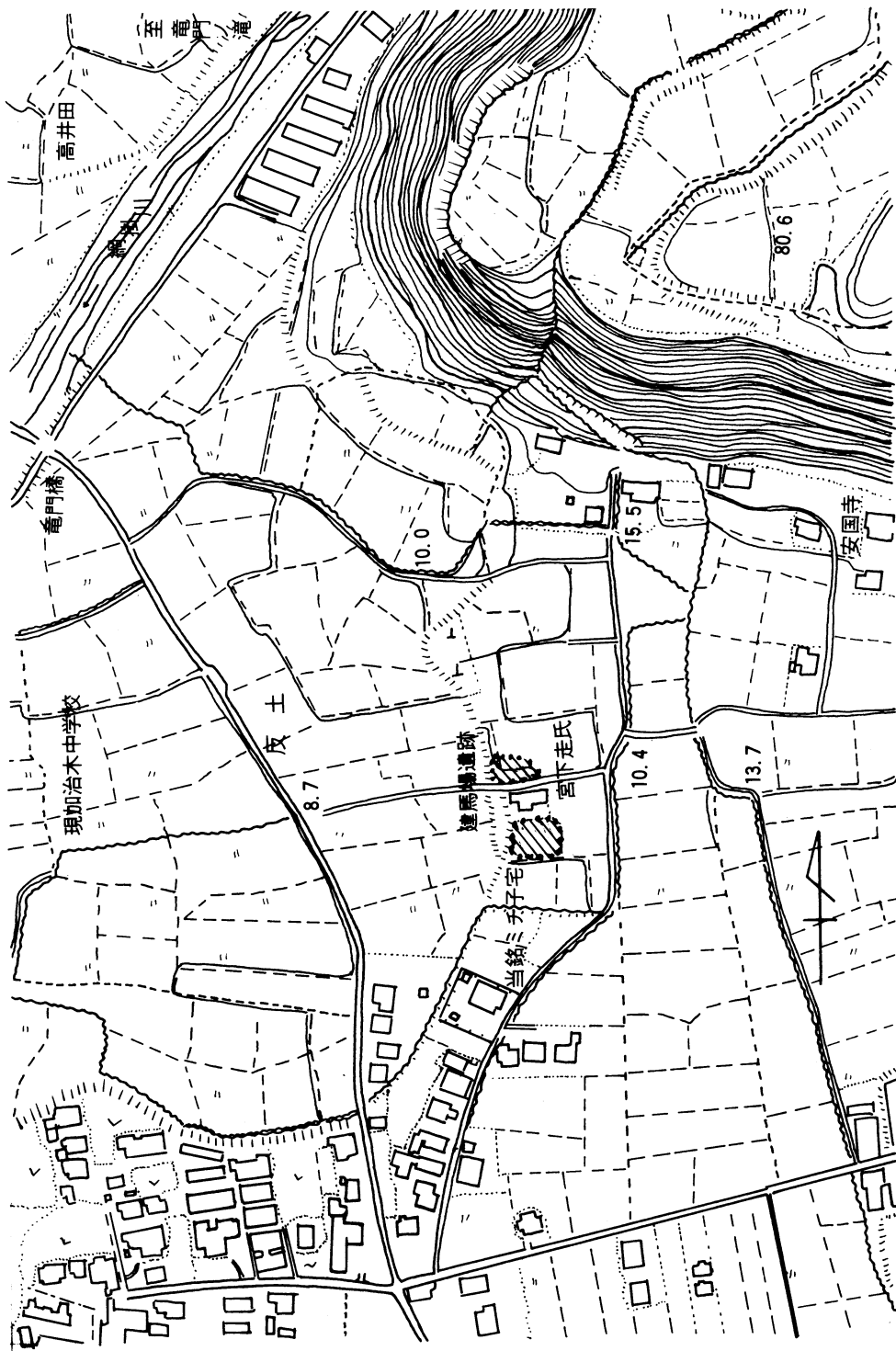
第1図 建馬場遺跡の位置及び周辺遺跡 (25,000分の1)

- |            |             |             |
|------------|-------------|-------------|
| 1、建馬場遺跡    | 2、日本山洞窟(縄文) | 3、三代寺遺跡(縄文) |
| 4、岩原遺跡(弥生) | 5、木田遺跡(弥生)  | 6、黒川山遺跡(弥生) |
| 7、反土遺跡(弥生) | 8、加治木銭造址    | 9、南浦文之墓     |

註①、鹿児島県教育委員会「三代寺遺跡・木佐貫原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘報告書(1) 1979年

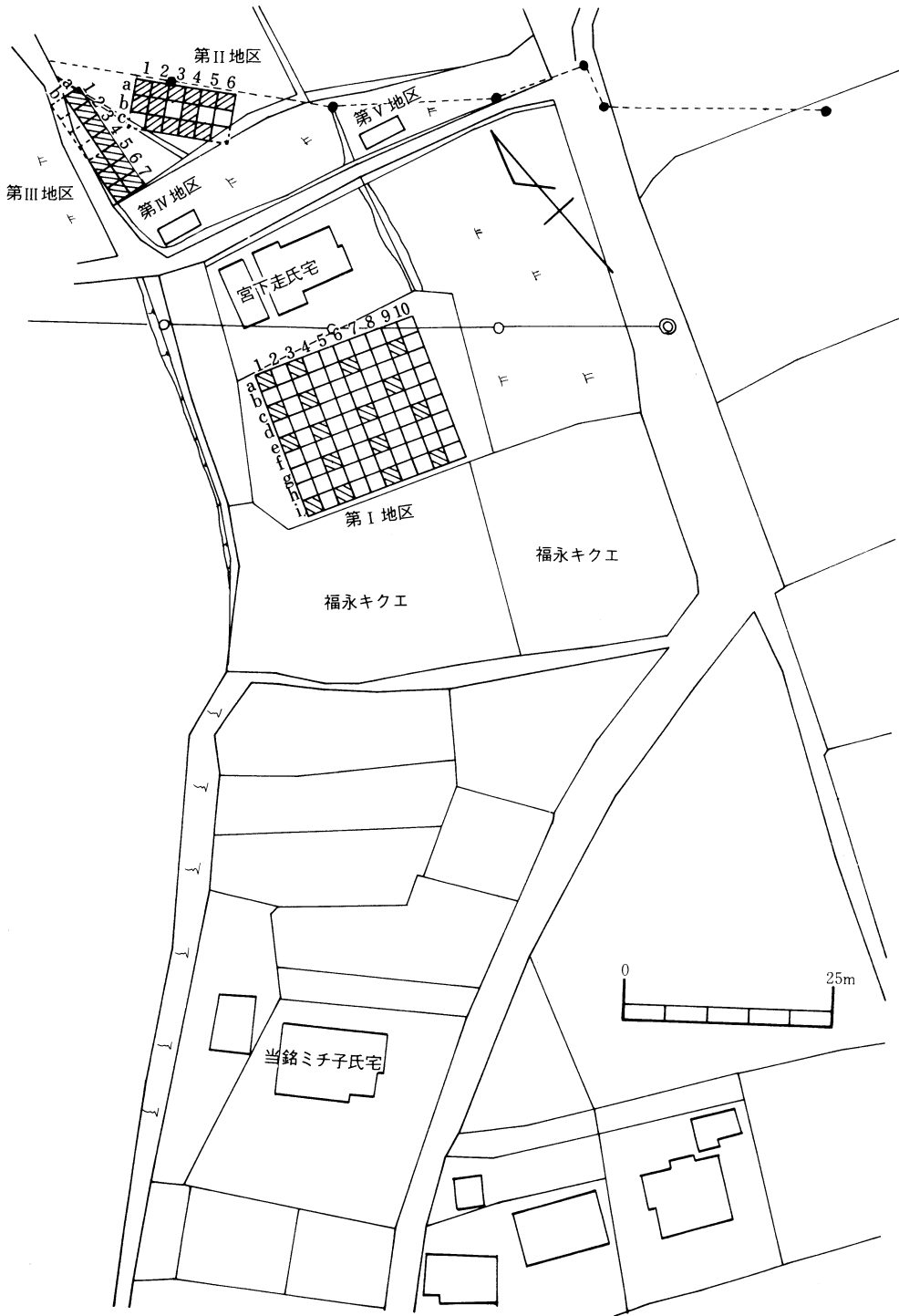
註②、樋口清之・乙益重隆「加治木町日本山洞窟遺跡」史前学雑誌10-2 1938年

註③、鹿児島県教育委員会「遺跡台帳」、昭和37年



第2図 建馬場遺跡周辺地形図





第3図 建馬場遺跡グリッド及びトレンチ配置図

## VI 調査の概要

建馬場遺跡は、加治木町の市街地はずれ、沖積平野の北東部の台地縁辺部の畑地及び水田跡現在、九州縦貫自動車道加治木インターチェンジ内に所在する遺跡である。

発掘調査は、分布調査の結果、宮下走氏の宅地跡を避けて5筆の畑地及び水田跡地に、第I地区から第V地区にグリッド及びトレンチを任意に設定し、まず第I地区より確認調査を実施した。

第I地区は、宮下走氏宅の南側沿いの畑地に、20×18mの範囲に2×2mのグリッドを設定し、I区（IA～IB）とII区（IIA～IIB）に区割りし、さらに2m四方の小区割りをし、北を基準に、1～10とa～iの小区割りにした。このグリッドの中で、当初a-1、c-3、e-6、i-9、e-1、i-1、b-9区の7箇所を任意に選定して掘り下げ作業を実施した結果、表土層（耕作土）を含めた地表面より20～50cmまでが砂混じりの黄褐色砂層で、下位層についても小石、軽石、パミス、砂などの混在した黄色砂層となり、明らかに日木山川や網掛川などの氾濫などを含めた堆積地であると見られた。出土遺物については、c-3、e-1、i-1、e-6、i-9区の表層より現代陶器や土師器、成川式土器などの小破片が少量出土したのみで他区からの出土は皆無であり、さらに下層である2層からの出土遺物についても同様の結果であった。しかし、表層から遺物の出土したトレンチが認められたため、さらに遺物の出土したトレンチの周辺で、a-3、c-1、b-6、d-8、e-3、g-3、g-6、i-3、i-6、f-9区に掘り下げを実施した結果、余り変化のない結果が出たため第II地区へと作業を進めた。

第II地区は、畦道から2筆目の畑地で、南側の水田跡（第V地）との比高は約2.0mもある。西側は、第III地区の畑地で、その比高差は約1.0mであり、北側は墓地となっている。この第II地区は、本遺跡でいちばん高い標高を数える。グリッドは九州縦貫自動車道インターチェンジ幅杭により略三角形を呈するため、幅杭と平行に12×6mの範囲に2×2mのグリッドを設定し、a-1、a-2、……、b-1、b-2、……、c-1、c-2、……までの四方の小区割18区に区割りし、a-1、a-3、a-6、c-2、c-4区について掘り下げ作業を実施した結果、第I地区と同様の結果が得られたが、さらにa-2、a-4、a-5、b-1、b-2、b-4、c-3、c-5区について作業を継続したが、一部表土層より土師器成川式土器の小破片が少量出土したのみで、層位についても第I地区と同様の結果のため氾濫等による堆積地であることが判明した。

第III地区は、第II地区の西側沿いの台地周縁部の略三角形を呈する畑地で、第II地区との比高差は約1.0m低い畑地に、7×2mのトレンチを設定し、a-1～a-7区まで2mづつの区割りをし、a-1、a-4、a-6区から掘り下げ作業を実施した結果、a-1～a-4区は、第I、第II地区と同様の結果となり、氾濫を重ねており、遺物の出土は皆無であった。

しかし、a-5区の一部に表土層で黄褐色に小礫・軽石などの混じった砂層下は、黒色砂層があり、土師器や成川式土器破片が認められたため、さらに、a-2、a-3、a-5、a-

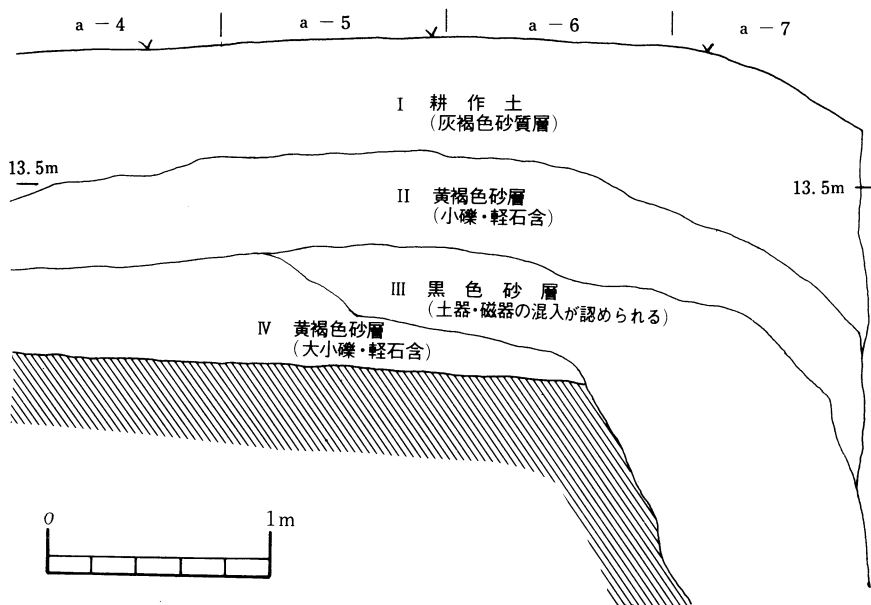
7区とb-5、b-6、b-7区を設定し、掘り下げ作業を継続した。その結果、a-7、b-7区において、a-6区と同様な黒色砂層が認められ、染付、現代陶器、土師器、成川式土器が混在して多量に出土したことで、二次的な堆積であると見られたが、さらに掘り下げ作業を行った結果、b-6、a-6、a-7区を結ぶ線で落ち込みが検出された。この落ち込みは、作業が進展するにつれ急傾斜を呈し、土器留りの状態で成川式土器を中心に小破片が多量に認められた。このことから、この落ち込みは、b-6、a-6、a-7区を結ぶ線で急傾斜している当時の台地の周縁部であることが判明し、この黒色砂層下は、第I、第II地区と同様な層位となっている。

第IV地区と第V地区は、ともに湿田跡で、宮下走氏宅の北側沿いの農道をはさんで、北側及び北東側の略長形状を呈した2筆の水田跡で、V地点が約70cm程度比高が高く、各地区ともに任意に2×5mのトレンチを設定し掘り下げた結果、出土遺物は皆無で田んぼの基盤層下は、第I地区等と同様の層を呈していた。

以上のことから、この台地縁辺部に位置する遺跡は、洪水や水蝕により、殆んど破壊されていて、ただ僅かに、第III地区の一部において、その痕跡をとどめているにすぎない。このような調査結果のため、本遺跡については、確認調査をもって終了した。

### 1、土 層

本遺跡の層位は、二次堆積によりほとんどの地区において遺物包含層は確認されない。しかし、第III地区の一部地区に遺物包含層が認められたものの、遺物が混在して出土した。



第4図 建馬場遺跡 第III地区、a-4～a-7区土層断面図

## 2、遺物

### ①成川式系土器（第5図・1～23）

#### 甕形土器（1～9）

1～5は口縁部でやや外反するものである。1は復元口縁径23cm、2は復元口縁径15.3cm、3は復元口縁径29.8cmを測る。6～9は頸部及び胴部である。6は頸部から口縁部にかけてハケによるカキアゲ技法が顕著に見られる。7は胴部復元径30.4cmを測る。7～9は貼り付け突帯を有するものであるが、7・8の突帯は断面三角形に近く、つまみの痕跡を残す。9は不規則な刻目を施す突帯である。10～18は底部で、いずれも中空のあげ底である。10・11は、やや浅いあげ底を呈する。18は底部径7cmとやや小形のものである。

#### 壺形土器（19・20）

壺形土器で図化出来たものは底部だけ2点のみである。19は底部が径4.2cmと小さく、直線的に外反して立ちあがる。20は底部がやや大きく丸味を帯びている。

#### 高坏（21）

高坏は坏部片が1点だけ見られた。内側に段を有するもので、大きく外反するものと思われる。

#### 手捏土器（22・23）

22は甕形土器で口縁径5.5cm、底部径3.2cm、器高4.5cmを測る。23は鉢形で口縁径7cm、器高4.9cmを測る。いずれも指頭による調整痕が認められる。

### ②土師器（第6図・24～26）

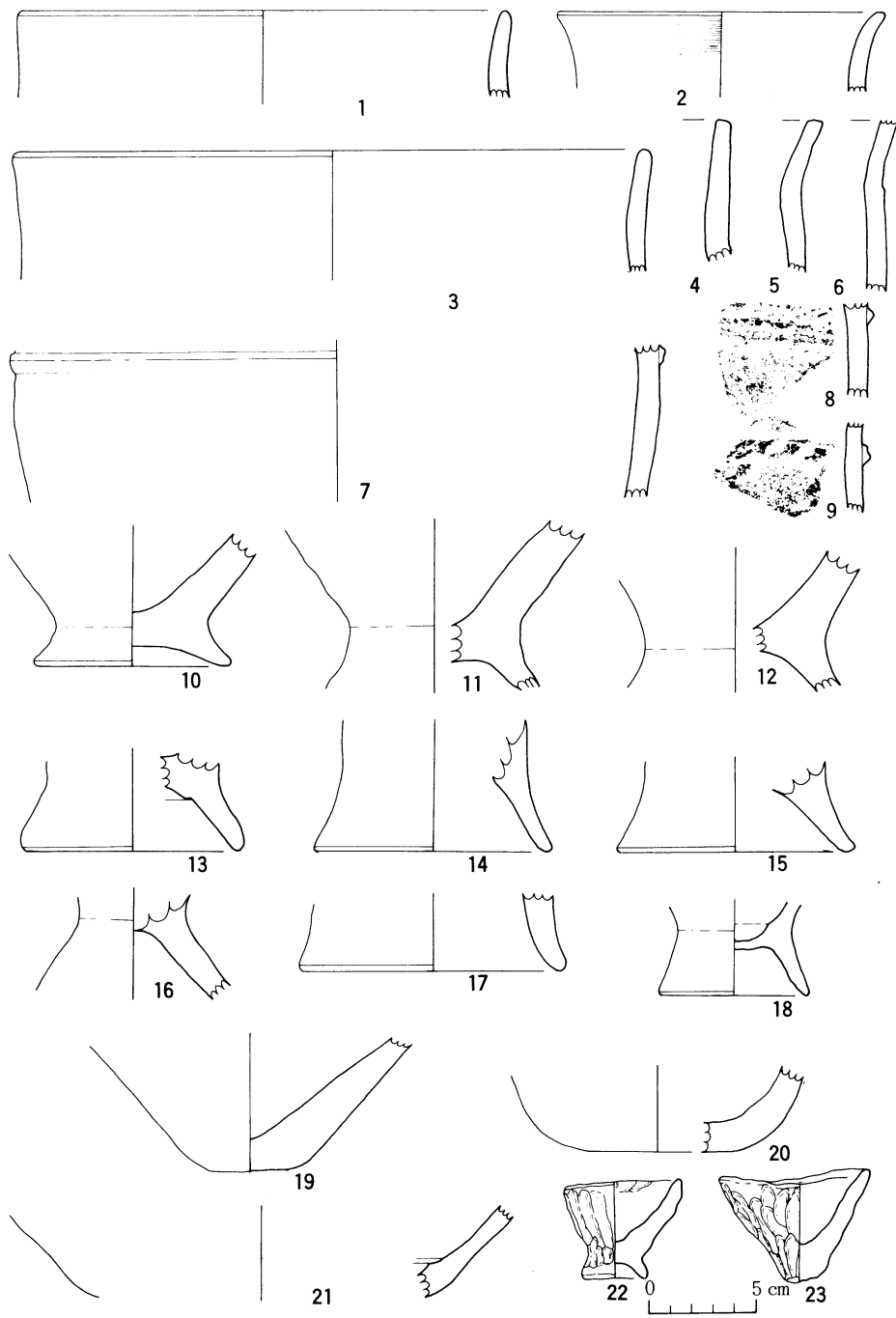
24は鉢の底部と思われる。底部復元径6.5cmを測り、外面には荒いハケ目が認められる。25は復元底部径6.3cmを測る坏の底部で、ヘラ切り底である。26は皿で、口縁径8.3cm、器高1.3cmを測る。糸切り底である。

### ③須恵器（第6図・27）

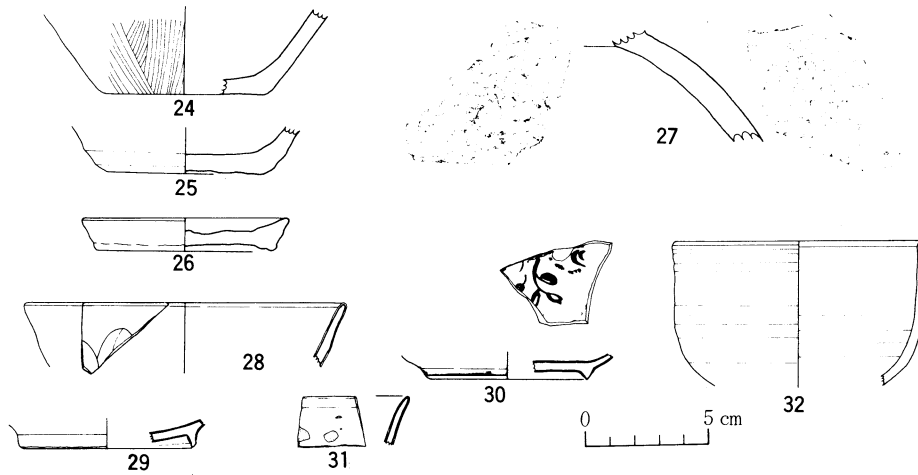
27は甕の頸部及び胴部上位である。外面は格子目叩き、内面は青海波様の叩きが認められる。

### ④陶磁器（第6図・28～32）

28は青磁の碗で復元口縁径13cmを測り、蓮弁を有する。29は白磁の底部である。底部の内側で高台の付け根の部分に釉切れが認められる。畳付きには釉がかからない。30は染め付けの底部・内面は2条の圈円文の内側に草花文が施されている。畳付きには釉がかからない。31は近世磁器で、白濁釉の刷毛目の上に半透明な釉をかけたものである。32は近世陶器で、黒釉のかかった碗である。



第5図 建馬場遺跡成川式系土器実測図



第6図 建馬場遺跡 土師器・須恵器・磁器・陶器実測図

## V むすび

本遺跡は沖積平野の一隅に位置し、日本山川や網掛川等の河川の氾濫や水蝕を含めた堆積地のためか、各地区とも何んらかの影響を受けており、各地区ともに遺物包含層はつかむことの出来ないまま確認調査を終了した。遺物は第Ⅲ地区の一部地区の黒色砂礫層中より、成川式系土器の甕形土器・壺形土器・高坏・手捏土器、土師器、須恵器、陶磁器（青磁・白磁・近世磁器）などの遺物の混在が認められ、特に成川式系土器を中心とした土器溜まりの状態以小破片が多量に出土した。遺物は図化に努めたが、小破片が多く第5・第6図に示した通りである。このようなことから、この台地縁辺部に位置する遺跡は、洪水などの氾濫や水蝕により、殆んど破壊されており、ただ僅かに、第Ⅲ地区の一部に、その痕跡をとどめているにすぎない。



①建馬場遺跡遠影 (西側より)



②建馬場遺跡第Ⅲ地区 a-6, a-7 区土層断面



手捏ね土器



手捏ね土器



# 松木田遺跡

## 例 言

- 1、この報告書は、九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設に伴う松木田遺跡の報告書である。
- 2、発掘調査は、日本道路公団からの受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
- 3、調査の組織は、調査の組織及び調査の経過の中で記した。
- 4、本書の執筆・編集は、担当職員の異動により立神が代って行った。

## 目 次

I	調査に至るまでの経過	117
II	調査の組織及び調査の経過	118
III	遺跡の位置及び環境	119
VI	調査の概要	124
①	土 層	124
②	遺 構	125
③	遺 物	126
V	む す び	126

## 挿 図 目 次

第1図	松木田遺跡の位置及び周辺遺跡	120
第2図	松木田遺跡周辺地形図	122
第3図	松木田遺跡グリッド及びトレンチ配置図	123
第4図	松木田遺跡柱穴遺構実測図	125
第5図	松木田遺跡管玉実測図	126

## 表 目 次

表1	松木田遺跡柱穴遺構計測表	126
----	--------------	-----

## 図 版 目 次

図版1	①松木田遺跡遠影（南側、別府川より） ②松木田遺跡近影
-----	-----------------------------

## I 調査に至るまでの経過

九州縦貫自動車道は、昭和43年3月6日第18回国土開発幹線自動車道建設審議会において、九州関係各路線とともに鹿児島県内では、九州縦貫自動車道加治木―鹿児島間の整備計画が決定された。ついで昭和43年4月1日建設大臣から加治木―鹿児島間25kmについて、日本道路公団に対して、工事施工命令が出された。それに伴って、日本道路公団では「日本道路公団の建設事業等、工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、埋蔵文化財の取扱いについて協議を求めた。これに対し鹿児島県教育委員会では昭和43年12月17日～昭和44年1月20日の間、県内の考古学研究者を調査員に依頼して分布調査を実施し、26個所の周知の遺跡について範囲確認を行った。

九州縦貫自動車道の路線は、この報告をもとに決定されたが、路線内の未確認の遺跡については、再度昭和46年1月に分布調査を実施し、その結果、建馬場（加治木町）、松木田・小瀬戸（始良町）、小山・谷ノ口・上城城址・宮後（吉田町）の埋蔵文化財包蔵地6個所と中世の城址1個所の遺跡が発見された。

県教育委員会では、この結果をもとに日本道路公団とそれらの遺跡の取扱いについて協議する一方、発掘調査については、鹿児島県考古学会（会長河口貞徳氏）、鹿児島県史跡調査会（会長河口貞徳氏）等に協力を依頼した。

昭和46年8月10日、県教育委員会は日本道路公団と委託契約を結び、小瀬戸遺跡を昭和46年8月20日から発掘調査することとなった。

本遺跡は、小山遺跡調査期間中であつたが、別途調査班編成を行い、加治木町の建馬場遺跡の調査の後、昭和46年12月12日（午後）から調査を始め昭和46年12月15日までの実働3.5日間で終了した。

## II 発掘調査の組織及び調査の経過

### 調査の組織

調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査責任者	社会教育課長	寺師次夫
調査員兼総務	社会教育課文化係長	盛園尚孝
調査員		立神次郎

### 調査の経過

発掘調査は、遺跡地が2筆の段違いの畑地のためグリッド及びトレンチは、地形に応じて任意に設定し、昭和46年12月12日から開始した。その結果、第I地区の一部地区に関しては、表層面から地山までが浅く、地山までくい込んだ柱穴と思われる遺構が検出された。柱穴遺構は径20～50cm、深さ20～50cm程度のものであり、約22個確認された。出土遺物は表土層から土師器、現代陶器、成川式土器などが認められ、表土層直下に柱穴が検出されたため性格は不明である。ただし、柱穴より滑石製の管玉1個が出土している。第II地区からは、遺物、遺構ともに検出されなかったため確認調査で終了した。発掘した面積は172㎡である。

その間の調査経過については、下記のとおりである。

#### 調査日誌抄

発掘期間、昭和46年12月12日（午後）～12月15日

- 12月12日 調査開始、作業員に発掘調査の説明と調査上の注意を行ない作業に入る。草木の下払い作業から開始し、グリッド及びトレンチ設定作業を行う。
- 12月13日 OA・a-1、c-3、IA・a-5、d-4、c-7、IB・e-4、h-6、区について掘り下げ作業実施。第II地区、T-1、T-2掘り下げ作業実施。
- 12月14日 OA、a-2、d-3、IIA・a-10、IIB・e-10、g-10、IIIA・b-14、IIIB・e-18、第II地区、T-3について掘り下げ実施、遺物出土皆無である。
- 12月15日 IIIA・a-18、IIIB・i-18、e-16、f-14、IIB・e-13区に掘り下げ実施。e-13、f-14、e-16区より柱穴検出。その周辺地区を拡張し、掘り下げ実施。遺構実測後調査終了。

### III 遺跡の位置及び環境

松木田遺跡は鹿児島県始良郡始良町鍋倉松木田に位置している。始良町は鹿児島県のほぼ中央部、すなわち薩摩半島の基部に位置し、始良郡の西南部にあり、東部は加治木町、西部は蒲生町と鹿児島市、北部は溝辺町とに隣接し、南部は鹿児島湾に面しており、鹿児島県の県庁所在地のある鹿児島市より約20kmの国道10号線沿いにある。本遺跡は始良町役場から、さらに北東方向に約1.9kmの地点にある。

本遺跡の位置する始良地方を大きく見ると、鹿児島湾奥深部を中心とした馬蹄形状の地形をなし、周辺部は高く、中央部が低く、大小河川は周辺部の山間に源を発し、中央部の鹿児島湾へカルデラ壁の土砂を運び沖積平野を形成している。特に思川、別府川、網掛川、新川などの流域には広大な沖積平野部を形成し、台地と低地とに区分されているが、軽石、砂、円礫混じりの火山灰で明らかに二次的な堆積が見られ、大小河川流域の低地では水田が営まれている。

始良町を概観すれば、始良カルデラによって形成され、角閃安山岩、輝石安山岩、溶結凝灰岩などを基盤とする山岳が周辺部に見られ、西部には赤崩の300～400m級の山間部、南東部に長尾山、東北部に烏帽子岳の山々に三方を取り囲まれ、はるか北方には霧島連山を望むことが出来る。また、本町は別府川と思川とが北西部より蛇行しながら沖積平野を東流しながら鹿児島湾へと流入している。これらの沖積平野は、水蝕による始良カルデラ壁の土砂の堆積や別府川や思川の二河川を中心とした大小河川の運ぶ土砂の堆積により形成された。平野部には円礫軽石、砂、火山灰からなる低丘陵や平地を造り、始良平野を形成し、穀倉地帯となり、一部地区においては鹿児島市のベットタウンとしての新興住宅地と化しつつある。

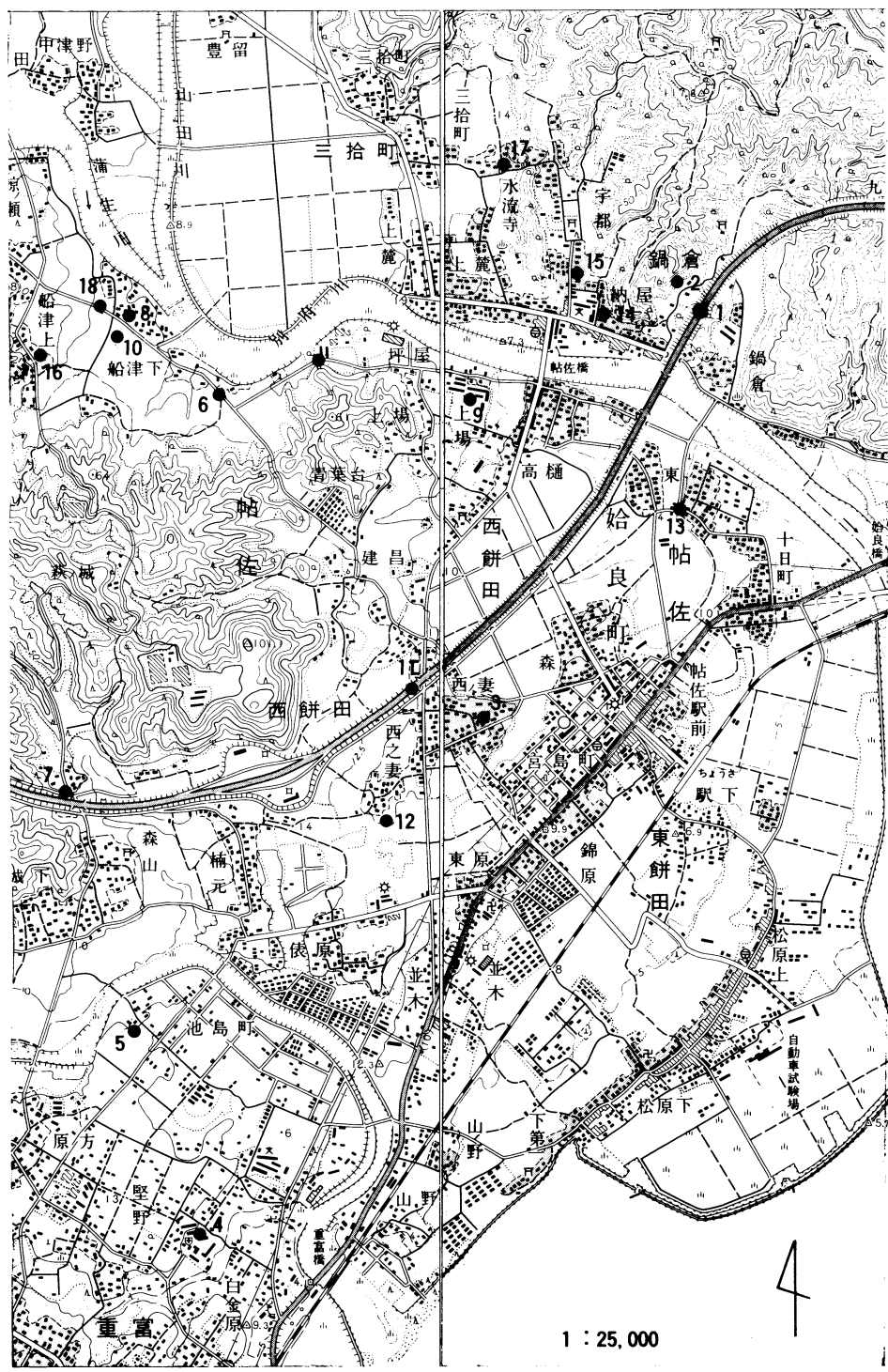
松木田遺跡は、始良町の市街地はずれ、始良平野の北東周線を開析する別府川河口近くの北岸にそった鍋倉東端近くの標高約10mの畑地に位置し、南側は標高約39.6mの凝灰岩の山を隔てて県道下山田一加治木線が別府川沿いに走り、東部及び北部は標高50～100mの山間部で加治木町との行政区画区域となっている。西部は標高約50mに及ぶ凝灰岩の山が急崖をなし、その山麓下には、蓬来山天福寺跡や鍋倉洞窟遺跡が知られ、さらに西方は、別府川北岸に所在する鍋倉の集落地となっている。

始良町の遺跡を概観すると縄文時代の遺跡では、早期は、木津志の榊木野遺跡、前期は西餅田の西ノ妻遺跡・平松の鍋谷洞窟遺跡、木津志の榊木野遺跡、平松の稲荷遺跡、西餅田の南宮島遺跡、後期は鍋倉の鍋倉洞窟遺跡、西餅田の南宮島遺跡などが周知されている。

弥生時代及び古墳期の遺跡としては、豎野の保養院遺跡、帖佐の船津遺跡、平松の立野遺跡、重富の森山遺跡、西餅田の上場遺跡、船津の馬場迫遺跡、住吉の住吉遺跡、平松の荻原遺跡、住吉の住吉神社などが周知されている。

奈良、平安時代、安土、桃山時代、江戸時代の遺跡としては、西ノ妻の小瀬戸遺跡、鍋倉の古帖佐焼窯址、船津の小野亢立陀窯址などが知られる。

城址としては、平松の平松城址、西餅田の建昌城址、鍋倉の平安城址、平松の岩劔城址などが周知されている。



第1図 松木田遺跡の位置及び周辺遺跡

- |           |            |          |          |
|-----------|------------|----------|----------|
| 1、松木田遺跡   | 2、鍋倉洞窟     | 3、西ノ妻遺跡  | 4、保養院遺跡  |
| 5、萩原遺跡    | 6、船津遺跡     | 7、森山遺跡   | 8、馬場迫遺跡  |
| 9、上場遺跡    | 10、馬場迫遺跡   | 11、小瀬戸遺跡 | 12、南宮島遺跡 |
| 13、願成寺跡   | 14、天福寺跡    | 15、総禅寺跡  | 16、宮田岡窯址 |
| 17、古帖佐焼窯址 | 18、小野元立院窯址 |          |          |

鍋谷洞窟は始良町平松鍋谷に所在し、思川の右岸の峡谷斜面にできた岩棚に位置する縄文時代前期の遺跡である。昭和35年河口貞徳氏が調査した。洞窟は思川の水面より約10mの比高があり、入口の幅12m、奥行3.5mの弧形の平坦な岩棚である。土器は寒ノ神A a式、寒ノ神B d式、轟式などがある。稲荷遺跡は、昭和28年の稲荷橋かけかえ工事の際に発見された遺跡で縄文前期の曾畑式、<sup>註①</sup>轟式土器片、<sup>註②</sup>後期の岩崎上層式、市来式、晩期の夜臼式土器、乳棒状の石斧などの出土した遺跡である。鍋倉洞窟遺跡は、本遺跡地の反対側で、町道納屋一山添線を隔てた北西約130mの所で、標高約50mの凝灰岩の山が急崖をなしているその崖を利用した洞窟遺跡である。故寺師見国氏によって昭和14年発掘調査され、市来式や西平式土器の出土が知られている。南宮島遺跡は、始良町の中心より南西約1kmの水田に囲まれた標高約11mの舌状台地の先端部の畑地<sup>註③</sup>に位置し、昭和51年始良町教育委員会が調査主体となり発掘が行われた遺跡である。縄文前期の春日式土器をはじめ、南福寺式、市来式、出水式土器の影響をうけたとみられる貝殻条痕文の粗製土器、縄文後期の岩崎下層式、指宿式土器の出土がみられ、中世のものと思われる逆台形状溝状遺構や木材加工品（長さ約3.5m、幅約60cm、中はくりぬいてある）や100基にのぼる土坑群が検出されている。西ノ妻遺跡は、南宮島遺跡の周辺の遺跡で縄文時代前期の遺物の出土が知られる。萩原遺跡は、<sup>註④</sup>稲荷遺跡の周辺に位置する遺跡で、始良町都市計画事業に伴う埋蔵文化財の調査で始良町<sup>註④</sup>教育委員会が調査主体となり、第1次から第4次まで調査が実施された。住居址群や壺・甕形土器などの成川式土器が多量に出土した。小瀬戸遺跡は、昭和46年度県教育委員会により事前調査された九州縦貫自道車道内の遺跡で、須恵器、土師器、墨書土器、刻書土器、布目瓦、井戸跡、建物跡、弥生式土器などが発見された。報告書は今年度刊行予定である。

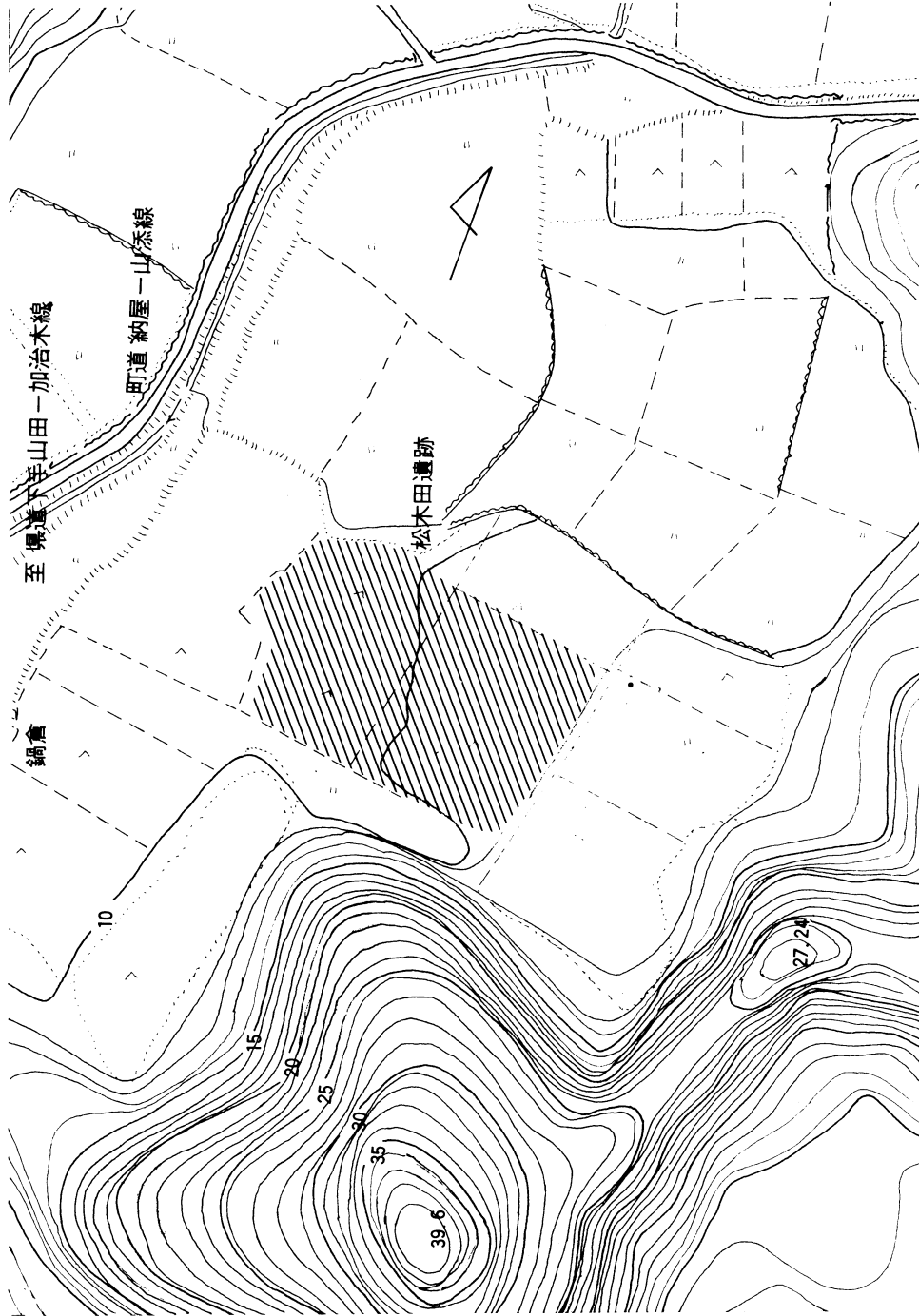
註①、鹿児島県考古学会「鹿児島考古6号」1972

註②、鹿児島県教育委員会「九州縦貫自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書」1969

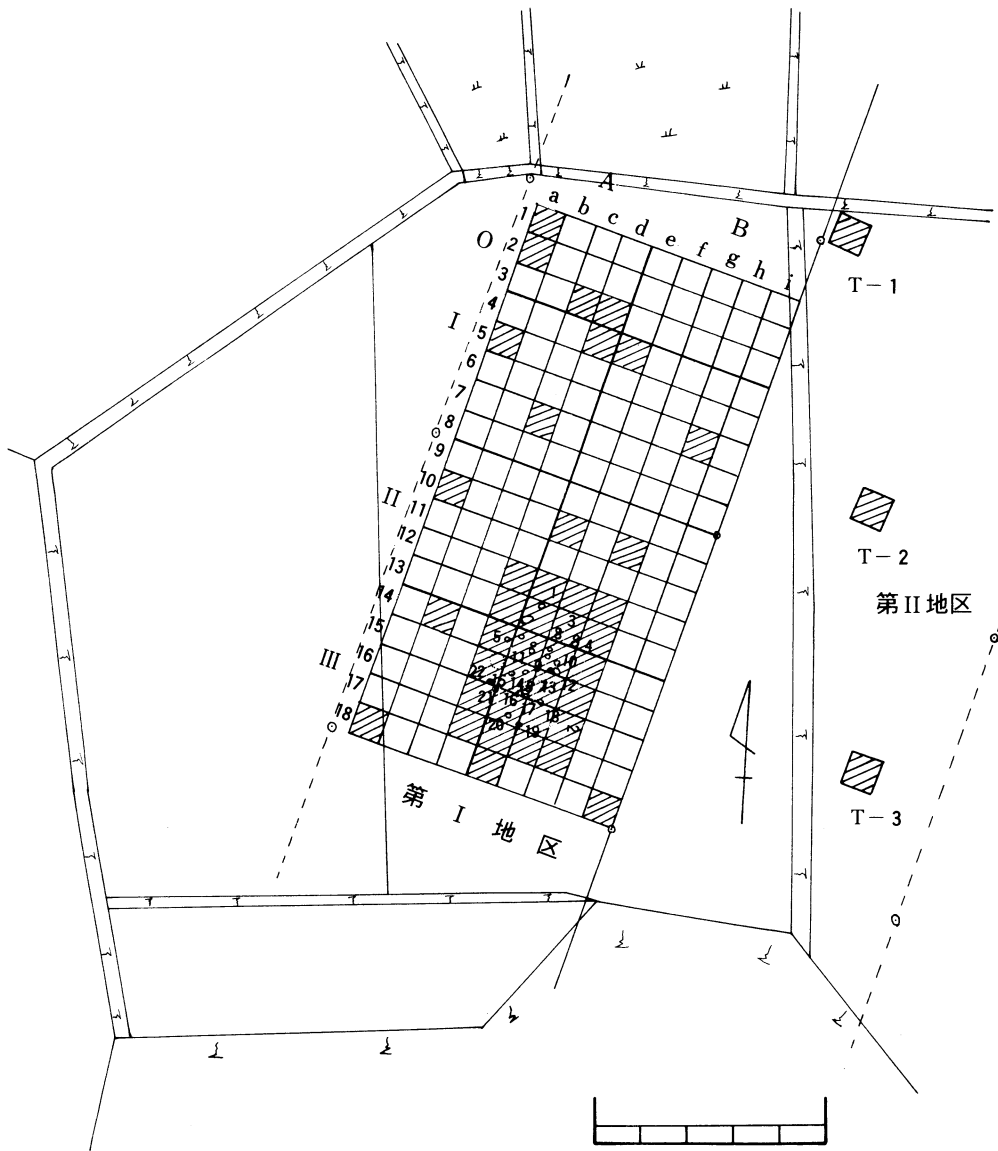
註③、始良町教育委員会「南宮島遺跡」始良町都市計画事業に伴う埋蔵文化財報告書1976

註④、始良町教育委員会「萩原遺跡」「萩原遺跡」II、始良町都市計画事業に伴う埋蔵文化財報告書1978・1980





第2図 松木田遺跡周辺地形図



第3図 松木田遺跡グリッド及びトレンチ配置図

#### Ⅳ 調査の概要

松木田遺跡は、始良平野の東北部で、始良町の市街地はずれ、別府川東北に沿った鍋倉東端に近く、東北にのびる谷があり、この谷を通して加治木町に至る町道納屋一山添線が走り、その沿線には水田や畑地があり、町道の東側の畑地が遺跡である。

発掘調査は、分布調査の結果、標高10.1mと標高11.1mの2筆の畑地に、九州縦貫自動車道建設用センター杭（S T A 36+00とS T A 36+40を結ぶ線）と平行に36×18の範囲で、2×2mのグリッドを設定し、O A～O B、I A～I B、II A～II B、III A～III Bと区割りし、さらに2m四方の小区割りをして、北を基準にして、O A・a-1、O B・e-1のような小区割りにした。このグリッドの中で、当初確認調査から実施し、O A・a-1、c-3、I A・a-5、d-4、c-7、I B・e-4、h-6区の7箇所を任意に認定して掘り下げ作業を実施した。その結果、表土層中より現代陶器、成川式土器、土師器などがみられたのみであった。さらにO A・a-2、d-3、II A・a-10、II B・e-10、g-10、III A・b-14、III B・e-18区を掘り下げた結果、前回のトレンチと同様の結果が得られ、出土遺物は皆無であった。このため上段の畑地との関係を知るため第2地区として2×2mのトレンチを任意に3箇所設定し、T-1～T-3について掘り下げを実施した結果、表土層直下黄褐色砂礫層となり、小石、軽石、パミス、円礫などの混入が認められ、明らかに氾濫などを含めた堆積地であると見られ、遺物の出土は皆無であったため、第1地区の確認調査へ戻った。III A・a-18、III B・i-18、i-16、f-14、II B・e-13区について、掘り下げ作業を実施した結果、III B・i-16区、5-14区、II B・e-13区において、表土層直下に柱穴と思われる遺構が確認されたため、III A・d-12、d-13、II B・e-12、f-12、f-13、g-12、g-13、III A・d-14、d-15、b-16、d-17、III B・e-14、e-16、e-17、II B・f-12、f-13、III B・f-15、f-16、f-17、g-14、g-15、g-16、g-17区について拡張作業を行い掘り下げ作業を実施した。その結果、II B・f-13、III A・d-14、d-15、d-16、III B・e-14、e-16、f-16、f-17区において、表土層直下に柱穴が検出された。柱穴は、径20～30cm、深さ40～50cm程のものであり、22箇所検出され、III B・e-14区、No.7の柱穴より、滑石製の管玉が出土したのみで他の遺物は皆無で、性格の判断は不明であった。

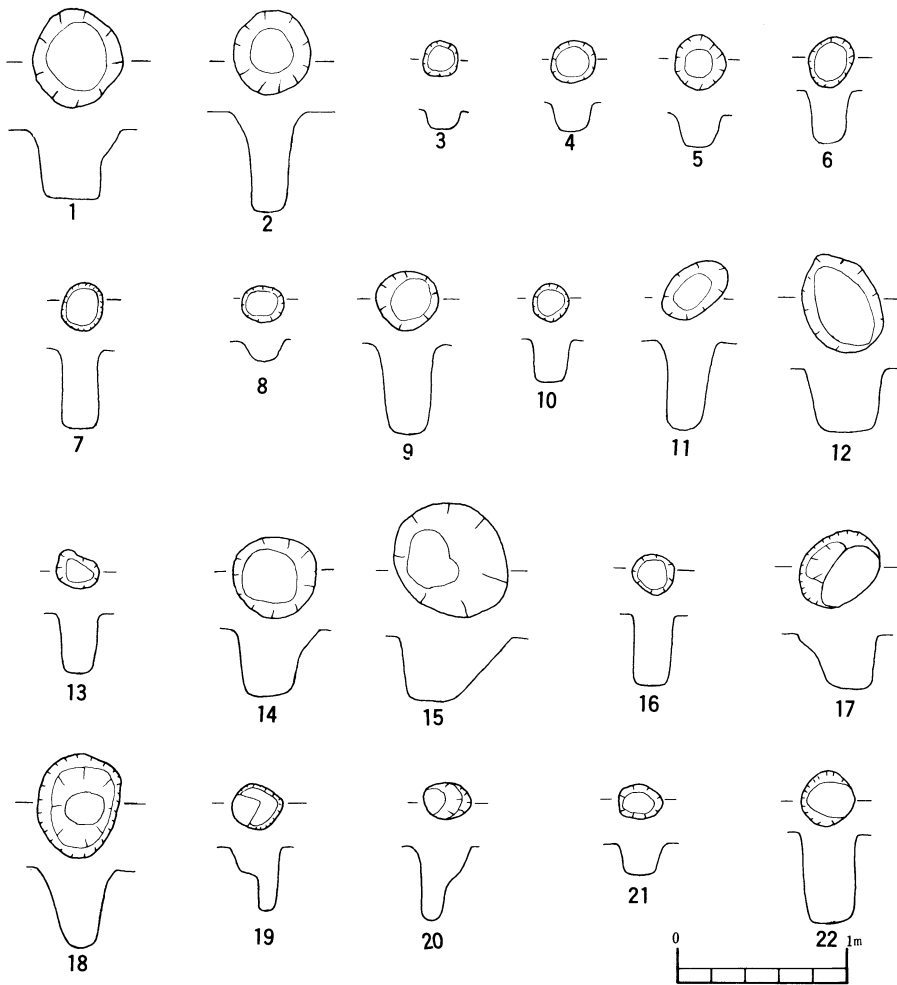
以上のことから、調査は一部でトレンチを拡張し、発掘作業を終了した。

##### ① 土層

本遺跡の土層は、耕作土が灰褐色砂層で、II層が黄褐色砂層である。黄褐色砂層を地山と判断し、下層の確認は実施しなかった。同町に所在する小瀬戸遺跡ではII層黒色砂質が土師器・須恵器などの遺物包含層であることから本遺跡は本来II層の黒色砂質があったと思われるが、後世の攪乱等によって消滅したと思われる。

②、遺 構

本遺跡は、耕作土直下に地山と判断した黄褐色砂礫層が認められ、その一部には、耕作土が黄褐色砂礫層まで達しており、攪乱の跡が確認された。発掘調査中に地主より発掘予定地区については、開墾を行い畑地化したということであった。しかし、第1地区は掘り下げ作業を継続した結果、表土層中より現代陶器・成川式土器・土師器などの遺物が約10点認められた。さらにII A、II B、III A、III B区の一部地区より黄褐色砂礫層にくい込んだ柱穴と思われる遺構が検出された。柱穴の規模は表1に示したとおりであるが、柱穴No.7より滑石製管玉が1点のみ出土した。柱穴の埋土は黒色砂質層で、一部削平された箇所が随所に認められたが黄褐色砂礫層まで削平された箇所が多い為不明で、22か所の柱穴が確認されたがいずれの時代のものか判断することは出来なかった。柱穴の配置は第3図に示したが、不規則な並びで、建物遺構としての復元は不可能である。



第4図 松木田遺跡柱穴遺構実測図

表1 松木田遺跡柱穴遺構計測表

(単位cm)

柱穴 No.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備 考	柱穴 No.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備 考	柱穴 No.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	54	58	38		9	36	34	52		17	46	44	32	軽石1個
2	46	50	60		10	22	22	24		18	62	48	46	
3	20	22	12		11	34	30	52		19	36	30	38	石1個
4	26	24	16		12	46	50	48		20	28	22	44	
5	34	28	20		13	24	22	34		21	24	20	20	
6	36	30	32		14	48	48	40		22	24	22	50	
7	34	30	46	滑石製 管玉	15	66	66	38	石2個					
8	24	22	14		16	24	24	36						

③、遺物

本遺跡では、遺物包含層の確認はなかった。第1地区のA II・e-13区、B III・f-15区の表土層より現代陶器・土師器・成川式土器などの小破片が約10点みられたのみで、図化することはできなかった。また当遺跡は、柱穴の埋土から判断すれば、すでに遺物包含層は削平が行なわれたとみられ、一部II層部までその痕跡が認められる。

管玉 (第5図、図版2)

玉は、滑石製の管玉1点が柱穴 (No.7)

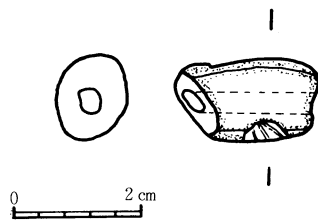


表1より出土した。全長 2.3cm、最大幅 1.3cm、厚さ 1.0cm、重さ 4.7gを測り、表面は随所に後世に受けたとみられるキズがあり、擦痕も認められる。穿孔部は、一方からのみ孔をあけ、大きさは約3mmある。破損品である。

第5図松木田遺跡管玉実測図

V、むすび

本遺跡は、表土層直下に黄褐色砂層が確認され、小石・軽石など含んだ二次的な堆積であると見られ、当地山と判断し、下層の確認調査は実施しなかった。遺構は黄褐色砂層にくい込んだ柱穴と思われる、22個検出されている。遺物包含層の確認がなされていないため、いずれの時代のものか不明であり、配置も不規則である。遺物は表土層より土師器・成川式土器・現代陶器が数点みられ、また柱穴より滑石製管玉1点が出土している。



①松木田遺跡遠影（南側、別府川より）



②松木田遺跡近影



管 玉

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (19)

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 X

小瀬戸遺跡 建馬場遺跡 松木田遺跡

発行日 昭和57年 3月20日

発行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷 錦江印刷株式会社 〒892 鹿児島市山下町2-7